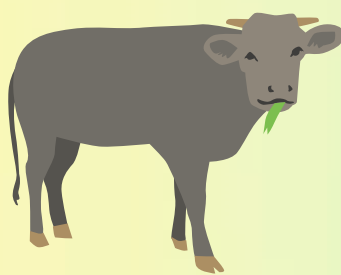
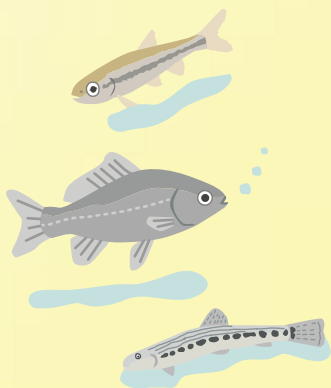
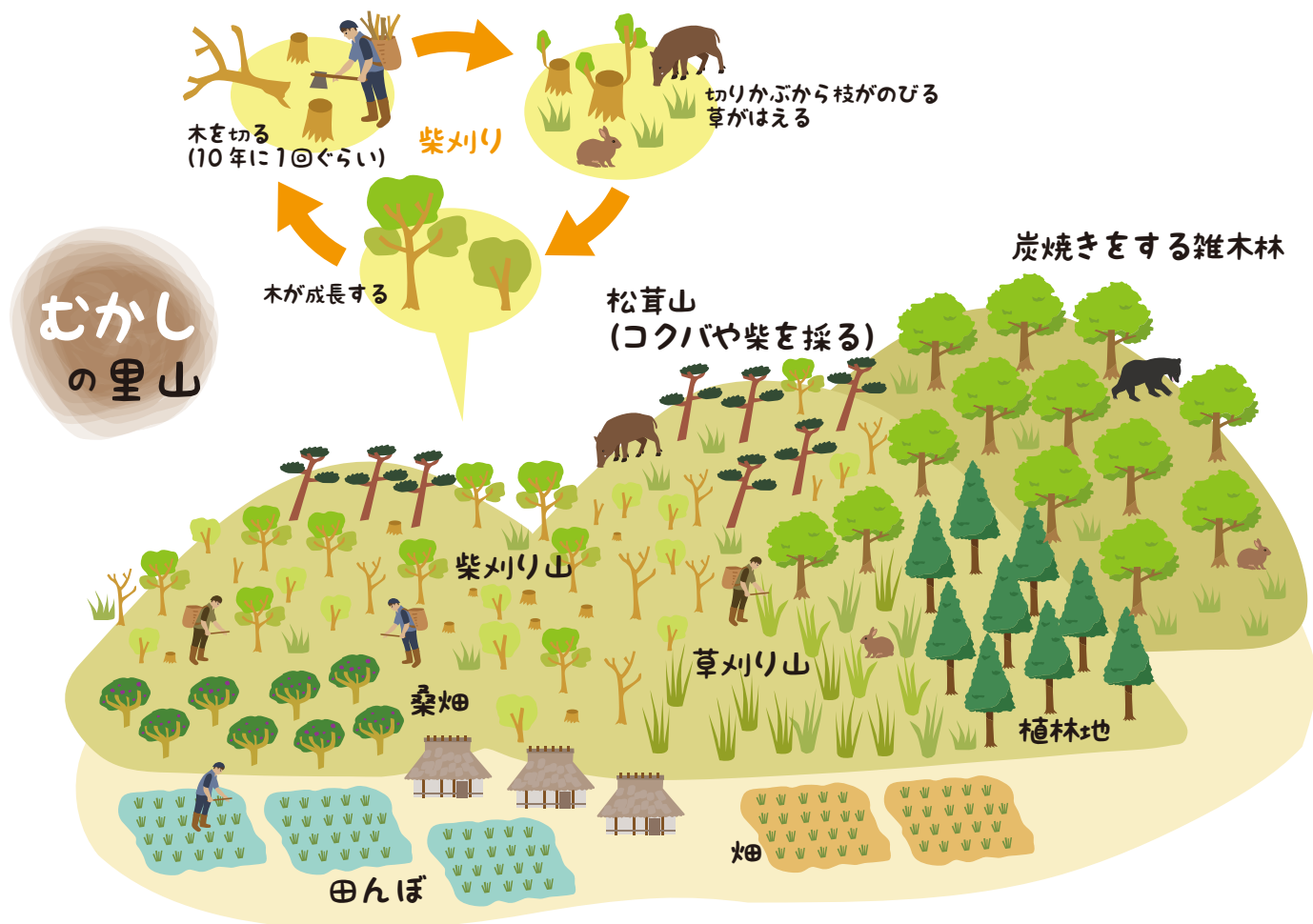


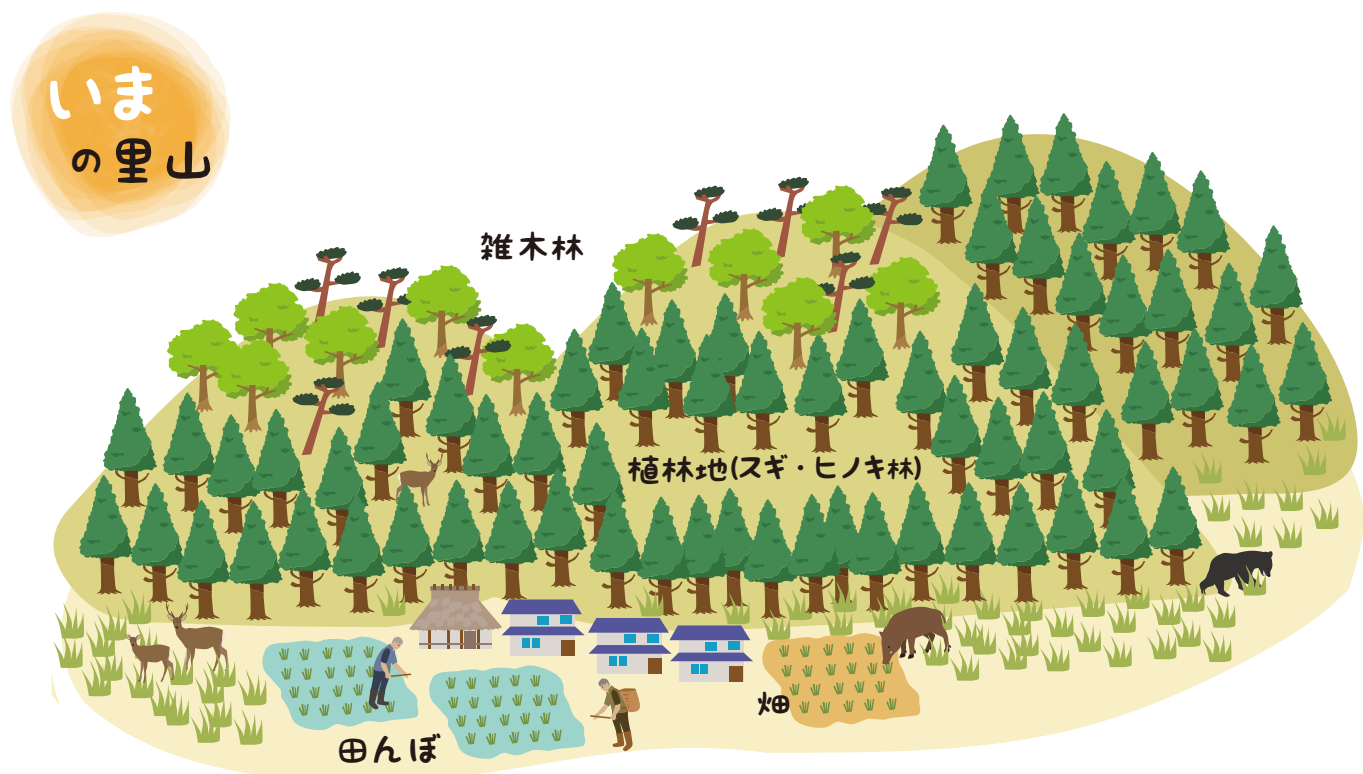
丹波里山文化物語

、丹波のくらしは里山とともに、





口絵① 昭和 20 年頃の丹波の里山



口絵② 現在の丹波の里山



◆ フキノトウ



◆ イタドリ (地元名：イッタンドリ)



◆ チガヤの穂 (地元名：ツンバラ など)



◆ スイバ (地元名：スイスイ)



◆ ナガバモミジイチゴ



◆ フユイチゴ



◆ クワの実 (地元名：フナメ)



◆ カクミノスノキ (地元名：ウス)



◆ オウレン (薬草)



◆ ゲンノショウコ (薬草)



◆ センブリ (薬草)



◆ ドクダミ (薬草)



◆ アケビ



◆ クサギ (地元名：アマギなど)



◆ ジャノヒゲの実 (地元名：フルフルダマ)



◆ アキグミ



◆ カマツカ（地元名：スナホリ、ネズカなど）



◆ ホオジロ（地元名：シトトなど）



◆ タマムシ



◆ ミヤマクワガタ（地元名：ハコイなど）



◆ イドコ(竹かご) と稲刈り鎌



おしきり
◆ 押切(裁断機) 春日歴史民俗資料館所蔵



◆ タテ（わら編みの頑丈な大袋）
春日歴史民俗資料館所蔵



◆ 牛の^{すき}犁
8世紀頃のもの／梶原遺跡(市島地域)出土

目次

巻頭写真・図版ページ	1
目次	5
【1章】はじめに 里山文化資源基礎調査の様子、意義	6
【2章】農村の四季と里山風景	8
里山は、村の暮らしのために絶妙にデザインされていた（市島町乙河内）	
農村の一年 ～農作業、祭り、子どもたちの手伝い（市島町上垣）	
古い地名には、土地の特徴や昔の生活が織り込まれている（氷上町香良）	
【3章】里山の恵み	14
大名草の猟師と、奥山の山菜採り（青垣町稻土）	
マツタケは、からし漬けに。ネズミタケは、豆と炊いて（青垣町東芦田）	
里山おやつ、あれこれ	
川の恵み ～ズガニ、ドジョウ飯	
【4章】子どもたちの遊びとシゴト	22
ウルシでチャンバラ、おやつはフナメ、罌をしかけて鳥狙い（市島町上竹田、上鴨阪、下鴨阪）	
学校の行き帰りに牛追い。野山を駆けて、ウサギも獲った（青垣町山垣）	
子どもらで魚を捕っては、家で料理してもらうのが、おいしかった（柏原町石田）	
遊びと食が近い時代 ～野山を駆け回って、共に遊び、共に食べる（柏原町大新屋）	
小学校二年生のとき、一人で峠を越えて、祖父母の家へ（氷上町鴨内）	
【5章】山稼ぎいろいろ（炭焼き、薬草、林業）	32
薬草の里の戦後 ～オウレンで家が建ち、小学生も薬草採集（山南町小野尻）	
村で競って、炭を焼いた（春日町野瀬）	
山師（原木屋）が見た、戦後のヤマと丹波の木（山南町小畑）	
さんばくち ～村の各戸が、共有山で稼ぐ（青垣町大名草）	
山林八百町歩 子どもが駆け回れるほど、山が綺麗になるしくみ（柏原町上小倉）	
【6章】里山こぼれ話	42
木炭バスのために客が歩く?!	
天秤棒で峠越えした時代	
峠越えて遊ぶ、無尽蔵な体力	
適材適所と、木を運ぶテクニック	
カブト、クワガタ、ホタルの宝庫	
日天さんのお供・お迎え	
【7章】まとめ	48

はじめに

いま、私たちをとりまく環境は激変しています。

豪雨災害や記録的な猛暑など、気象の激化による自然災害が、毎年のように発生しています。また、世界的な感染症の流行によって、都市部に人や資源を集中させるこれまでの社会のあり方に、思わぬ弱点があることもわかってきました。

一方で、リモートワークの普及などによって、自然を身近に感じられるライフスタイルが、改めて注目されつつあります。ただし、その自然環境も、様々な理由で生態系が不安定となり、多くの生きものが絶滅の危機に瀕しています。

◆ 私たちが、心豊かに安心して暮らしていくためには、今こそ「人と自然の共生」が大切ですが、それは、どのように実現すればよいのでしょうか。

◆ そのヒントを求めて、本冊子では、昭和三十一年代以前の丹波を知る方々の体験談を収集しました。その頃は、太平洋戦争の戦中・戦後で、あらゆる物資が不足した時代です。一方、化石燃料や石油化学製品などが市民生活に普及する以前だからこそ、子どもも大人も、丹波の自然と真つ向から向き合い、自然の恵みを受け取るノウハワを、あれこれと知っていた時代でもありました。



昔の丹波は、パラダイス？！

本冊子に先立つて、平成二十六年から平成三十一年にかけて、昔の生活体験や子ども時代の遊びについて、市内各地の方を訪ねて聞き書きしました。

ウナギやマツタケといえば、今や高級食材で、丹波でも激減したと言われています。しかし、「当時はウナギがたくさん居たから、夕方に罟を仕掛けたら、大抵、翌朝にかかっていた。もちろん、その日は自家製蒲焼き！」「マツタケが背負籠に入りきらないから、ズボン脱いでそれを袋代わりにして持ち帰った」「出荷前のマツタケを庭に広げておいたら、一晩でマツタケの胞子が降り積も

って、庭が真っ白になった」などなど、今では考えられないような体験談をたくさん聞きました。丹波の自然は、生命に満ち溢れていたのです。

「川の淵をのぞくと、魚の群れが黒く渦巻いていて、怖いほどだった」「ホテルは、わざわざ探しに行かなくても、窓を開けて寝ていると、次々に家に入ってきて、蚊帳の周りを飛び回っていた」「山菜採りは、おばあさんが山ほど摘んで、背中を丸めるように担いで帰ってきた」こんなお話は、まるで映画のワンシーンのように印象的です。

「ウサギは罾で捕れた」「マムシは、皮を剥いで竹の棒に巻き付けて干し、後で焼くとおいしかった」「雨の後は、増水した小川の草陰に魚が逃げ込んでいた。大人はそれを、晩酌のアテに捌きに行つた」などという話は、決して教科書には載ることのない、ワイルドな実話です。

丹波市民は、自然を愛し、自然に悩む

平成二十八年の丹波市のアンケート（注①）によれば、「家の周辺の自然環境に満足（満足＋どちらかといえば満足）」と答えた市民の割合は、七十四・四%でした。そのうち七十五・一%は、「身近なところに自然とふれあえる里山や河川などがある」と答え、四十九・八%は、「農地や山林が豊かである」と答えています。

一方で、「家の周辺の自然環境に満足していない（あまり満足していない＋全く満足していない）」と答えた市民は

二十四・七%でしたが、そのうち、七十四・四%は、「野生生物による農作物などの被害が増えた」と答え、四十三・五%は、「農地や山林の荒廃が進んだ」と答えています。また、「開発により身近な自然が減少した」と答えた市民も十四・八%いました。

多くの丹波市民が、自然を愛しつつも、自然環境の質的な変化を感じ、山林から発生する土砂災害や、野生鳥獣による農作物被害など、自然由来の問題に悩んでいることがわかります。

注①「第二次環境基本計画」策定のための市民アンケート調査結果（平成二十九年一月）



写真 秋の味覚 丹波マツタケ

里山とは

丹波市には、未開の原生林はありません。その代わり、昔から人々が頻繁に利用してきた里山が広がっていました。

里山とは、里のすぐそばにあつて、人々が里の生活に必要なものを調達する山のことです。古くから農産物の豊かなこの地域では、多くの農村が、何百年にわたリ続いてきました。そして、その村（里）の暮らしに不可欠なものを、周囲の山々で調達していました。下図は、丹波の人たちが、里山からどのようなものを得ていたかを紹介したものです。

詳細な内容は、第二章・第六章に展開する皆さんの体験談に譲りますが、大きく分けると、燃料、材料（建築材や器具材）、食料、家畜の餌、肥料など、生活の様々なニーズが、里山で賄われていました。

里山のデザイン

丹波市は、現在、総面積の約七十五%が森林ですが、そのうちの六割弱は、スギやヒノキの人工林です。しかも、松林や雑木林は、山の上の方にあり、里に近い山裾のほとんどがこの人工林になっています。そのため、「山が暗い」と表現する方も居ます（一ページ口絵②）。

一方、昭和二十年前後の丹波の山の風景は、全く違います（口絵①）。当時を体験された皆さんが共通しておっしゃるのは、里の周りの山が、とても明るく、見通しの良い景観だった、ということです。これは、山の使い方によるものです。



一部には、昔からのスギやヒノキの人工林もありましたが、里に近いところの大半は、背丈の低い雑木林や草原だったそうです。これは、村の人たちが定期的に燃料の柴を刈ったり、牛の餌や田んぼの肥料にする草を刈ったりしていたところからです。また、山裾には、サツマイモや大根をつくる畑、桑畑などもあったそうです。（第二章 八、九ページもご参照下さい）。一方、尾根筋は養分が少なく乾きがちなので、そうした条件を好むマツ

の林が多かったそうです。マツの落葉は、コクバと呼ばれ、かまどや風呂の着火剤として重宝されていました。炭焼きをする場所は、柴刈りをする場所より不便な山奥にあることが多かったようです。これは、炭にすることで、薪や柴より軽く運びやすくなるからでしょう（口絵①）。

里山に暮らす生きものたち

丹波の人たちのこうした里山利用は、

恐らく数百年にわたって、ほぼ同じように続いてきました。その結果、この地域の生きものたちも、すっかり、この里山のデザインに適応して、それぞれの棲家を見つけてきました。

匂いマツタケ、味シメジ（ホンシメジ）と並び称される、日本人好みのこの二種類のキノコは、いずれも、柴刈りや落ち葉掻きがしつかり行われる山にたくさん生える性質があると言われています。

フラビ、ゼンマイ、フキノトウなどの山菜や、キキョウ、ナデシコなどの秋の七草は、明るい草原を好む植物です。ノウサギやキツネ、カヤネズミなども、そんな草原に暮らしていて、ときどき里に姿を見せたことでしょう。

春に田んぼに卵を産むカエルやイモリなどは、田んぼに水のない季節、意外にも山奥で見つかることがあります。

いずれの生きものも、少なからず、里山での人々の活動をちよつぱりアテにして、うまく共存してきたのです。

生の体験談をお楽しみいただくために

本冊子では、できる限り、話者の地元らしい語り口を忠実に文章に起こしています。そのため、標準語よりも、やや読みづらいかも知れませんが、しかしながら、地元方言の響きの中には、話者の微妙なニュアンスがこもっています。

クワガタはどこに一番多かったか。木の実や魚は、どんな種類が美味しかったか。ぜひ、地元言葉の響きの中に、生きた文化を感じてもらいたいと思います。

二章

農村の四季と里山風景 里山は、村の暮らしのために絶妙にデザインされていた

話し手 荻野忠一氏（市島町乙河内）
日時 二〇一四年七月二十九日



写真 絵を描きながら説明する荻野氏

村の正面の丘は、柴刈り場

荻野 愛宕さんという祠があるんですけど、（公民館の向かいの丘の上）、その祠のあたりは少し自然林。ケンポナシというね、珍しいんです、大きな木ですけどね。（果実の下に）ザー

っと軸があつて、この軸の先がね、秋になると甘いんです、しがむとね。
—— ケンポナシは、伐られずにあつたんですか。

荻野 ありました。愛宕さんの続きに。これなんかはもう秋の楽しみね。道なんてありませんから、あつちから行ったりこつちから行ったりして。その上が今度マツタケ山でしたね。だからまあ、乙河内であれば、下の方は、いわゆるナラ、クヌギ、それからカシの木の小さいの（柴刈り場）。これは伐つて伐つてしますからね。大きなカシにはならないで、柴にしましたからね。

—— カシは柴が多かったですか。
荻野 あれは早く伐りますからね。私らの頭の中では、役に立たん木やと思つとつた。こう大きくなつてすると、今度は堅いですから、木刀とかね、ハンマー（の柄）ね。こういうのにするんですけど、そんな役に立つ木やと思つてなかつたんで。むしろ私たちは、カタギ（堅木）と言つてましたから。

カブトムシやクワガタムシが居る所

荻野 里山で楽しかったのは、やつぱり、カブトムシとかね、昆虫採集。

—— カブトムシ採りは山裾ですか。
荻野 違ふんです。どこ行つても良いというわけやない。大体ああいう、クヌギ

とかね、コナラは薪にするから、何年ごとに伐るんかな（薪や柴にする木は小さかったり細い）。ところがですね、境木（さかいぎ）というのが伸ばしてあるんですよ。境木は伐つたらいけないんですよ。せやから、それは大きいんですよ、境木は。で、境木はずーっと、田んぼの際からですね、大抵、山に向かって。

—— 縦に並んでいたんですね。
荻野 そう、山に向かって縦に並んで。それは古い（木）ですから、もうカブトとか蜂とかね、いろんな、主として甲虫類が。良い樹液を出しますからね。若い木はダメなんですね。大抵、境木でしたね。

—— 境木の間隔はどれくらいですか？
荻野 それはね、持ち山によつて違う。—— 境木の両側は、定期的に伐られていたんですね。
荻野 そうです。柴が一番ですから。定期的に伐つた。生活の糧ですからね。

炭焼きは奥山、田と山の間には桑畑

荻野 炭は、あんまり焼いてないです。この村では、炭焼き専門で焼いてたのは、二人くらいでしたね。これは、もう奥山へ行つて、炭窯を作つてね、やつてました。小野寺（おののでら）という山があるんですけどね。この集落の一番奥あたり。炭はちよつと大きい木をするから、年数が経たないと。だから奥ですよ。その人が一人やつていたとね、その人に雇われてする人もありました。

図 乙河内の昔の里山のゾーニング



そこから少し降りてくると、里山というか草原というか。そして、水の便が悪いから、畑になつてましたね。桑畑が多い。里山の続きは、大抵桑畑でした。—— 水持ち悪いところが桑畑で、水が持つなら田んぼですか。
荻野 そうですね。水便は良くて、水持ちの良いところ。水持ちが良いように、毎年毎年ねえ、鋤きならしては石を取つたりして、床（と）というのを作るわけですね、田んぼは。ニワトコいうてね、

赤土ですわ。で、あの野菜などがよくできる土は黒土やでね。田んぼは、毎年、山から草を採ってきて田んぼのふちに積んどいて、稲が植わったら、その間にずーっと、その草をね、敷くわけです。

奥山には、広大な草刈り場があった

——草刈りは、常時やっているんですか。

荻野 いえいえ、常時はできない、草刈りはね、「肥えの口」というのが決まってるまてね。入会地に、特に公有林というか部落有林というのは全部そういう草っぱらでしたから。里山は、草山だったんです。

——草山が尾根まで続いている？

荻野 尾根は、マツタケ山。（山裾から中間までが草っぱら。

——愛宕さんの高さくらいまでは草っぱらだったんですか。

荻野 草っぱらのところもあるし、クヌギなんかを植えてるところもあるし。まちまちでした。今のような針葉樹（の植林地）のようところは稀でした。

——田んぼの近くに桑があつて、その次がクヌギとか、ですか。

荻野 そうそう。そしてですね、大体ひとつのスタイルやけどね。六月の下旬に「肥えの口」という日が設定されてあつて、村中一斉に草刈りが始まるんです。——「肥えの口」は草刈り初めの日ですか。

荻野 そうです。田植えが済んで、稲の根がかつちり活着して、まさに分けつ（注①）しよかいいうところに、「肥えの口」

というのがあつてね。

で、そこで、六月初めにですね、当時の草刈り場の入口辺りに、カマトギ（鎌研ぎ）というところが今でもあるんですけど、一斉にね、みんな腰に砥石をぶらさげてね、谷川がありますから、谷川のふちで、鎌を研いで待つてる。ほな区長さんが「もう始めなはれよー」つちゆうてね、言うたつたら、山に入る。そつから先は、どこへ入っても自由ですからね。で、それを刈つてきて。大体、大きな束を二把つくつて、中には天秤棒で家まで帰る人もあるし。それから鉄車（てつしゃ）いうてね、ゴロンゴロンゴロンゴロンする鉄の車があるんです（木製の車輪に鉄の輪をはめた荷車）。そういうようなものに積んで。

そしてですね、それからあとは、その家の甲斐性です。毎日行く人もあるし。そのときだけ行く人も。というのは、早くくと、良い草が刈れる。いわゆるスキの若いのが、そういうのをみんなだーつと刈るわけです。カッカッカッカッつと刈つてパツと置いてね、さつと結わえて盗られんようにしてね、で、ばーつと集めてね。それがはじめ。それから、田んぼのふちにだーつと積んで。だから、ようけ働く人は、そのへんの田んぼのふちに、草の山ができるんです。うちらは、百姓してましたけど、ほとんど草入れへんから。有機肥料ですね。

——その積み上げた草の山の肥料を入れるのはいつ頃ですか。
荻野 それは、人によつて。たとえば、

それ入れると草抑えになるんですよ。腐るんですよ。ほんとにそれにつこた（使つた）んちやうかな。田んぼ全体いうとすごい草ですから。だから、大きな目的は、抑草です。田の草とりもしましたよ。ゴロゴロゴロゴロ言うてね（田押し車）。

それで、秋になったら今度は、秋の鋤きをやりまからね。牛入れて。そのね、稲を刈つた後に、一番鋤きつていうのを鋤きましてね。そしてその草を入れたりしていましたね。そしたらそれが腐つて。稲と麦と、一年間に二回作りましたからね。だから、麦をまくところに、畝を立てる前に、その草をやつたり。

注① 分けつ 稲の株元から脇芽が出ること

柔らかな草や木の葉は、牛の餌

荻野 里山つていうのはね、そういう大きな働きをしつたわけです。今のようなかクロキ（針葉樹林）にしつたらあかんのですね。里山で冬になったら赤い実のなるアオキもね。シカが大好物です。それがいっぱいありました。それを伐つてきてはですね、ガチャーンガチャーンと刻むと、牛が食べるんです。だから、広葉樹林であれ、牧草じゃないけれども、草んところは飼料。それから田んぼのこの草もね、自分どころ以外は、勝手に刈つたらいかんかったんです。それは全部、牛の飼料。全戸、黒牛を飼つてましたからね。役牛ですね、農耕のときにはね、牛が大活躍するんです。その餌というのは、主として、田んぼの畦草です。——全戸で牛を飼つていたんですね。

荻野 ほんとに全戸。だから、どこの家も、牛小屋とか、牛の部屋とか必ずありました。ない家はなかったね。

赤土を練って、溝の修繕

荻野 乙河内では、山裾に四か所、赤土取り場があつて、自由にとつて良かった。

——赤土を？壺づくりとかですか？

荻野 大きなものでは、家建てるときね。良い壁土です。しかし日常はね、これも農作業です。川に井堰（いせき）というのがあつてね、そつから、それぞれの井堰からイネミゾ（用水路）が来とんです。

昔は、イネミゾでですね、それこそカニが入つてきてね、穴をあけるんですよ。だから、年間、大体、肥えをやつた後くらいに、一番目のイネセキ日。それには、みんなまず初めに、山へ行つて、赤土を背中に負うてくるんです。あるいは、竹箕（たけみ）一杯ずつとかね。そして、イネ（井堰）の一番近くでイネから水を汲み上げてきて、練るんです。粘土をつくる。ほたら、良い塊になるでしょ。赤粘土にしてね。それをずーつと、イネにですね、カニの穴に（埋める）。ときには、牛が踏んだりしてね、プスつてされちゃうんです。そういうのを修理するのが、イネセキと言うてました。これは一斉にやるんです。そのかわり、イネセキしますとね、もう夏の夕方ですから、みんな、イネ世話さん（注②）のところに付いて、一杯やるんです（笑）。

注② イネ世話 用水路の見回り当番長

農村の四季と里山風景 農村の一年 ―農作業、祭り、子どもたちの手伝い

話し手 吉見和己氏（市島町上垣）
日時 二〇一五年二月十八日



写真 ヒアリング風景（右 吉見氏）

農繁休暇、子どもが百姓をよく手伝った

吉見 今の子はほとんど家事せえへんけど、昔は百姓よう手伝いよったんやで。小学校のときでも、農繁休暇いうのがありよった。ほんで、苗床でも、農協から今は来るけどな、みな田んぼの中

で苗を作りよったな。そのメイランとり、メイランで知らんやろ。ニカメイチュウ（ニカメイガ）の卵、それを取るのに、小学校の子、三年生ぐらいからかな、行きよったんや。稲の葉っぱに、苗の葉っぱにずーっと、卵産んどんや。それをひとつ取ったら、一銭もらいよったんや（笑）。メイラン一本で一銭や、昭和十年頃な。新聞紙でメイランとりの袋こしらえて、首にさげて、ほいで田んぼの中に入ってとりよったんや。

田植えでも、今はもう機械でギヤーとやってやけど、昔は縄引つ張ってな、定規もつてしよったやろ。そいで、私小さいときには、裏（後ろ）で、苗がうつてあるやつを、渡しよったんや。そういう手伝いもしよる。

――田植えは何月だったんですか。
吉見 六月頃や。六月の中頃にみな植えよった。

――六月中頃でしたら、収穫は？
吉見 稲刈りは十月頃や。九月の終わりから十月。

――子どもらは、まだ他にも手伝いがあるんですか。

吉見 田の草取りいうて、これは私らでも中学校、学校行きよるときやけどな。あの一週間おきぐらいにな、ずーっと各田んぼを回る。三回、根本の草を、這

うてまわりよったんやで。一番初めはな、田打ち車、いうてごうごうと押していくやつな。あれでて。一番最後は、三遍目は、這うて、根元の方の土をして（念入りに）草（引き）をすーっとしよった。それがすんだら、ずーっと、堆肥・・・昔は牛がみな居ったさかいな、マヤゴエつちゆうて、それをすつと稲のあわさ（間）に置いていきよったんや。

そら、苦勞しとつてや、その時分はな。今やつたら、水抜きすんのが精一杯ぐらいやで。もうほつたらかしで。そやなかつたら、米が安いさかいな、報われへんやん。

屋根はわら葺き、小麦のわらで
――昔、ここらにも茅場があつたんですか。

吉見 茅か。うーん、ないなあ。

――屋根は何で葺いていたんですか。

吉見 麦わらや。茅葺の屋根なんてほとんどないわ。麦わらでも、小麦わらや。あれは腐りにくい。大麦のわらは腐りやすいし。小麦わらや。

――小麦は、冬に田んぼの後に作るんですか。

吉見 ああ、田んぼの後に、十一月にくるんや。五月の末ぐらいに脱穀して。

――めちやくちや忙しいですよ。十月に稲を収穫して。

吉見 おお、そやんか、忙しいんや（笑）。収穫して、そのあと脱穀した稲を干しもつて田んぼを鋤いたりな。夕立が降ったら慌ててとり込んで、乾燥機つてなもんあらへんの、ムシロ敷いて。忙しいめしとつてや。

図 上垣集落の一年（里山学習用に作成）

- 冬** 1月 正月、はつもうで、七草がゆ（7日）、とんど焼き（15日）
- 2月 節分の豆まき、愛宕神社では火祭り
- 春** 3月 おひがん、春分の日に子どもたちは「日天さん」
- 4月 ひな祭り（4日）、花見、花祭り（8日）、農作業がいそがしい時期に！
- 5月 田植えがはじまる！メイラン取り、花折り（8日）
- 夏** 6月 たんごの節句（5日）、麦刈り、田植え（小学生は田植え休み）
- 7月 さなぶり（田植え後の休み）、田の草取り、川裾まつり（29日）
- 8月 夏休み（1日～）、七夕祭り（7日）、お盆（13日～15日）、地蔵盆（16日）、施餓鬼（18日）、24日（お宮の夏祭り／愛宕さん）
- 秋** 9月 イネ刈り始まる！荒神さんの目酒祭り（28日）、秋分
- 10月 小学校高学年はイネ刈り休み、脱穀、秋祭り（17日）、下旬に麦まき
- 冬** 11月 亥の子（11月最初の亥の日に、新米の餅を12こおそなえをする）、七五三（15日）
- 12月 お稲荷さん（8日）、山の神さん（9日）、大地蔵さん（21日）

牛も、子どもの頃からトレーニング

――耕す（鋤く）のは、主に人ですか、牛ですか。

吉見 牛。あの牛で鋤くのは、人それぞれ特徴があるな。（せわしなく）チャイチャイチャイチャイというて牛を操る人と、（リズミカルに）シューッチヨイツ、シューッチヨイツいうて（する人も）。人によって、癖があるな（笑）。あれ、せやけど難しいで。小さいとき

から、やっぱりそういうもんを稽古するために、石を後ろに積んで引つ張らして、練習。

—— 牛を練習させるんですか。

吉見 調教しよったんや。せやないと、まっすぐ行つてもらわなんだら、かなんが。

夜なべの後に食べる柿がおいしかった

—— 田んぼの後に耕して、種まいて、また麦踏みとか、子どももしたんですか。

吉見 そや、麦踏みせんなん。あれは寒の凍ててるときは折れつであかんでな。

—— 五月に麦を刈つて、六月に田植えですよね。麦の始末はどうするんですか。

吉見 麦まくのが十一月やろ。そやさかい、短期間にな、稲刈つた後、子どもらも手伝うて、夜なびいうのをしよったんや。夜、脱穀しよったんや。ガーガーガーって。機械や何もないから足踏みいうのや（足踏み脱穀機）。で、晩の十時頃になつたら、柿の木に柿がなりよったんを、ばいで食べたらおいしかったで。つめどう冷えて（笑）。

—— なるほど。

吉見 今、そんな生活する人ないわい。この頃は皆、テレビ見とらあ（笑）。昔はほんまに、十一時頃まで夜なべして、あくる日またそれを干して、まだ稲刈りせんなんところもあるわな。

—— 一段落した頃が秋祭りですか。

吉見 秋祭りな。運動会でも、ちようど稲刈りが終わつた頃にしよった。九月頃なんて忙しいもんなあ。

—— 麦と野菜をちよつと植えたら、あとは山仕事があつたんですか。

吉見 冬は冬で、やつぱり、縄ないやとか、草履つくりやとか、俵編みつちゅうのがありよったんや。米は今は紙の袋やけど、俵編みしよったんや。冬でもなかなか忙しい。大根でも、やつと（たくさん）できたら、干し大根つくりやとか、干し芋づくりや。カビが生えにくいでな、寒は。そういうことをしよつてや。

コクバ掻きとマツタケ山

—— 昔、この辺の集落でもコクバ掻き（コクバリマツの落葉）とか、やつたんですか。

吉見 ああ、やりよつたやりよつた、コクバ掻き。暗いうちから行かなんたら良いところがないうなる、言うて。十一月十五日に、マツタケ山の、山があくんや（立ち入り制限が解除される）。ほでに入つて好きなどこでとつたら良いつて。ほらもう、第一回目のその日は、暗いうちから行つて、自分の良い場所をとりよつたつてん。

今なんかもう、そんなことしてへん山なんか荒れ放題や。で、マツタケもなあ、よう生えよつてんけど、今はマツタケの生える山がないわ。植林してしもて、アカマツがあらへん。

マツタケはよう生えよつたで。ほんまに。（姿勢を低くして）こうして見たらばーつと。立つて見てもあかんのやで。のぞいて見ると・・・ずーつとかたまつて生えるんやな。

—— 今ももう、かたまつて、というほどのものは見たことがないですね。

吉見 せやろ。んなもん、今なんかな、探すんやない、ハイキングしとるような、暑いばかりや。マツタケてなもん生えてへんやん（笑）。

私が区の役をしとつたときはね、ここらは入札いうて、マツタケ山の入札しよつて、三百五十万円くらいが落札金やつた。今なんか、六万円ほどやないか。もうそんなもん、やめとけ、いうねん。

経費がいるだけやねん（笑）。

山がないようなんつて、ツツジらでもあらへんな。五月にそういう「花折り」いうんか、ツツジを竿の先に、ここへ先祖はんが降りてきてや、言うて、各家にシキビとツツジと、そういうもんを刺してこう立てよつたんやけどな。

火祭りの大焚火は、子どもたちが焚く

吉見 二月は、愛宕神社では火祭り。こ

こでは、火の神さん、言うんで。節分にはね、子どもがこれ仕事やつたんや。昔は焚きもん（柴や薪）で生活しとつたやろ、（集落を巡つて）焚きもんをみな荷駄（荷車）に積んで貰て回つて、それを積み重ねて、その晩燃やしよつた。戦中当時、立春、立夏、立秋、立冬という、これは季節の区切りや。まあ要は、二月は、子どもらでも協力して、愛宕神社の火祭りにしよつた、いうことや。

—— 子どもらが燃やしたんですか？

吉見 そや。今は、もうそんなこと、危ないやらなんとかいうて、みな当番の大

人がしよつてや。今も火祭りはあるんですよ。あるけど、子どもはもうほとんど来いしませんわ。塾に行ったり、なんかすつさかい。もうそういう行事には参加せえへんね。

—— もつたないですね。

日天さんのお供

吉見 日天さんのお供（注①）で、あれは三月の春分の日、それから秋の秋分の日。うちらは、大勝寺の裏に赤ズレ（赤土の露出したところ）があるで、あの辺によう山遊びに行きよつてん。

—— 山の上まであがるんですか？

吉見 いや、横峰までは上がれへん。里山みたいなどこやな。大勝寺があるやろ、この辺（寺の裏の斜面）に遊びにいきよつてん。今みたいに植林してないでな、あんな大きな木になつてへん、赤ズレの小さい松の木がしゅうしゅう生えとつたぐらいな。

そこで、ずりずりして遊んだり（斜面すべり）、旗とりをしてや、（斜面の）向こうとこつちとで（旗を立てて）。ほんまに泥んこになつて遊びよつたんや。

—— 一日中ですか？

ああ、一日中や。弁当持ちで行きよつた。ほんなん、ほんまに私らぐらいな歳までしかしらへんと思うで。

注① 四十七ページ参照

農村の四季と里山風景

古い地名には、土地の特徴や昔の生活が織り込まれている

話し手 荻野正裕氏（氷上町香良）
日時 二〇一五年十月二十一日



写真 荻野正裕氏（岩滝寺付近にて）

奥山は、村共有の草刈り場

荻野 もうとにかく滝から上は全部が、滝ナメラとかいうような（呼び名だった）。ナメラいうたら、水がしたたつてぬるぬるしたというような意味からつけられた地名だと思います。そして、（その奥の）谷でも、集落から見える五台山の南西面の谷が広いんですけど、その谷

がイリズミ、つて風に私は理解しておるんですけども、最近の書類では、違った場所に書いてあることがありますね。

五台山の山頂までは、（昔は）ひらけたところは、草刈山、まあ、草地ですね。というのは、昔は、田んぼに化学肥料とかはあんまり高価であつたりして、ま、一部の方は、ニシンとかイワシとかの骨粉とかそういうのを使われたり、それからリン酸関係の肥料を購入……いやよつぽどの人じゃないとよう購入できなかったと思うんですわ。

それで、夏の間、すなわち田んぼが一段落しますね。田植えが終わつて、最初の草取りなんかは、夏の暑い土用干しか、土用に土を混ぜ返したら非常に良いというので、土用の田の草取りいうんですね。それをまあ、最初の分は、何も使わず手ばかりで稗とか雑草を引いては足で踏み込む、いうような状態であつたわけですけども、それから、ゴロ押しいうて（手押しの除草機）、そういうのを乾田では使つてました。

そのちよつと合間に、草刈り場で、スキヤラシダ類のワラビとかね、そういうのが夏に生えますから、それを朝から行つて刈り取つて。そして、束にして、もう運ぶ手段がありませんから、全部背中に負うて、昼までに帰つてくる。それを今度、家へ持つて帰つて、そし

て、押切（四ページ写真参照）つていうんですけど、大きな刃があつて、それできゅつと、何センチかの長さに、その刈つてきた草を切つて。

家のマヤ、牛小屋ですね。稲藁なんかはよつぽど、貴重品ですから、というのは、縄をなつたり、それから、草履を作つたり、わらじを作らんなんなんですから、マヤの中へは、とにかく刈り草を（牛の敷き藁代わりとして、刈り草を使つていた）。

馬は、ほとんどなかったですね。この集落では、百五戸ほど江戸時代からあるけども、もう半数以上は、一頭の牛を飼育しとつて。

牛小屋の前には、マヤゴエといつて、牛の糞と敷き藁が交互になつたものが積んであつて（堆肥になる）。雨ざらしで積んでますから、雨降つたらその汁が、隣の家の庭まで流れて行つたりしてました（笑）。二十年ほど前に、中国の雲南省なんかへ行つたら、（かつて見た）生活そのままに、家の前にマヤゴエが積んであつて、そして雨が降つたら湿地の方へだーつとその汁が流れて行つてました。うわあ、非衛生的やな、日本もこんな状態やつたなど、思い出しましたけども。

草刈り場も、薪の山も、くじ引きで

荻野 草地の割り当ては、いわゆるくじ引きで、「わ、うち良いとこ当たつた」とか、そうなるわけですね。別の谷二つほどは、岩滝寺からあがつ

た右の方の谷、観音奥つていう名称の谷ですけども、そこ、それから左、滝を越して、谷がたくさんありますけど、一の谷、二の谷、三の谷とか、そういうふうな谷は、薪の山。ここもくじを引いて。間口はわりに狭かつたですね。三間か四間（一間は約一・ハメートル）はあつたような、それを尾根まで。尾根までと言っても、尾根までの距離が短いとこやら、長いとこやらありますね。で、それを、くじ引きで、「荻野さんとこ、観音奥の何番」というように割つてたと思うんですよ。



図 香良集落および周辺の地図
（国土地理院 地理院地図より改変）

うちなんかは、父が農協やかいろいろの勤めかわつてますけど、よう柴しに行きませんね（柴刈りに行けない）。母も教員してましたから、だから、隣に当たった人が、「荻野さん、あんたんとこよう行つてないから、権利分けてな」つていうような調子ですね。隣接とは限りませさん、こつちの谷の人で心安い人が「荻野さん分けて」つて早よから言うてたら、その人に。また、作業場としてきつい山だつたり岩場があつたり、そんなことおかまいなしに割つてますから、そんなところは十年間ほつたらかしになるわけです。それなら、今度は次にまわつてきた時に、それ当たつた人は、よかつたと思うわけですね。

また、（近隣の）井中とかそういう方で山を専門に歩いてる人なんか、「そこらまとめて、炭焼きしたいから」つて、譲つてもうて、そして、炭窯を築く。炭窯を築くためには、いい粘土つちがないとだめだし、また、石が拾えないと窯、できませんね。それともう一つ大事なことは水ですね。水、くみあげて行かんなんですからね。それで、そういう、炭焼きの立地条件の良いところやつたら、譲つてたと思うんです。

隣村から、柴刈りに来る古い取り決め

荻野（集落の南側に）見えとる烏帽子山（山）という山ですけど、その裏側は、よう人が入つてないんかシャクナゲとかいろいろなもんが多いかつたですね。

うん。それから、その中腹をずーつと、ユリ道があつて、絹山は山がないから、（ユリ道の奥の里山は）絹山の集落の人は自由に入つてよいという、取り決めを昔からやつてたようですね。で、その代り、つい戦後まで、ま、千円か二千元でしたね、私が区長（自治会長）しとる時分にも、毎年払つてましたね。絹山がね、んで、香良の人でも、自分とこの分け山の本がなくなつたら、こいつた野山つて言つとつたかな、とにかく、勝手に入つてもよいという、ことですね。

ユリ道を通つて、山を越して、美和の池（永郷池）のあるところへ通じる道は、昔の美和の役場と結ぶ道が、郡が指定して県道になっていました。岩渡りつて、飛び石で渡るところもあつた（けれども、地図には県道として載つていた）。

地名や道が消えたりできたり

荻野 今、私とこの息子らでも、古い地図なんかもういらんのとちやうか、いうてほかして（捨てて）しまふんやけど、絶対古い地図、ほかしたらあかん思うんですよ。昔どういふふうに名前入つてたか、つていうようなこと知るためには、

（昔は）山の神さんというのを越しよつたんや。そこから中腹に道があつて、三の谷の奥まで牛追うて。そして牛の背中に両振り分け、荷物をつくつて、薪やら、さつき言つた草を刈つて、持つて下りてきよつたんですね。きついですよ、この道。（香良ではあえて）かなりきついところを越した上に山の神さんが

祀つてある。もつと麓に祀つてる部落が多いですけど、登りがけに山の神さん拜んでいくことは、自分の心の中に、今日は怪我をせんように、安全に山仕事をしていこうという誓いが、そこにたてられたと思うんです。

フジノメの谷という谷は、だからそういう状態やから（途中が険しすぎる）、いわゆる分け山には、ようしてないですね。よつぽどのもんやないと、ここ越して荷物持つてよう下りない。

その次に（別ルートとしては）、お不動さん越して、洞窟のところを、ちよつとこれもきついですけども、上がつて、そして、牛の首（ウシノクビ）というところ。なんで牛の首いう地名がついたかいうと、チャート、珪岩がですね、層になつて、ちよつと牛の首のところの毛が、垂れとるのに似てるから牛の首という、地名をつくつてるようですね。その牛の首を越して、そしてこの、フジノメの谷と、一の谷二の谷三の谷へ、入つていつたわけですね。

大正年間に、今度は岩滝寺の、滝の上、ずーつと、のぼり岩いうて、岩が、堆積したときは水平やつたのが地殻変動でほとんど直立してるんですね、地層がね。で、そのところの岩をダイナマイトで切り落として、狭い、狭い切り割りをつくつた。牛の首を通らないで、その切り割りをつくつて、どうのこうの人が通れるぐらいに。牛はとも（通れない）。

だから、地図はその時代その時代によつて、山道がいろいろなとこに記入されてますね。

香良の地名考

荻野 こないだの水害（平成二十六年八月丹波市豪雨災害）で、如実に出ました、全く、河原やつたですね（水害直後の香良の風景は）。自宅付近の道でも二十センチほどずーつと流れまして、（自宅そばの雨量計で）四百二十二ミリを観測しました。そして、お寺の二台の軽自動車、一台は近くに引つかかつてボロボロでしたが、一台は長い間知れんで、この三月になつて、社町（現・加東市）で見つかった。

「香良」の元々の地名は、その水害から連想できる風景として「川」でもサズイの「河」でもいいけど河原ですね。それで、お宮さんは、発音を良くして、加える、昭和の和、優良の良で、加和良にしてます。加和良神社に。そしてそこから転じて、（村の名前は）香りの良いにしてきたと思うんです。河原が、発音でか・わ・らと置いて、それから、香良に。だから地名は、最初の頃は、発音で、聞いたただけだから、それが、だんだんだんだんこう、うーん、悪くない、良くしていきますね。

なるほど、そうすると、どうしても元々の意味が薄れてしましますね。荻野さんのおつしやる通り、ときどき古い地図を調べたり、地名のルーツなどに思いを巡らすことが大切ですね。

里山の恵み 大名草の猟師と、奥山の山菜採り

話し手 足立善徳氏（青垣町稲土）
日時 二〇一六年十月十二日



写真 足立氏（中央）

大名草の猟師

足立 戦後、木い伐つて、山を浅うしてしもうたから。ほしたら、今度はカズラが増えてくる、餌がだんだん出てくる、して増えてきたんですわ、シカなんかは。昭和三十八年の豪雪、あの時分に、こつから奥に居つて、猟師さんがようけ獲つ

たつたですけどね。この辺に増えてきたんは、それからのちです。四十年代なつてからです。道はさんで向こう側、松倉とか、あつち側には居りよつたん。で、こつちのこの旧・神楽の半分ほどは居らへんかつた、大分長い間。ちよいちよい居るけど、少なかつたもん。

で、向こう、松倉から倉町にかけては、早うから居つた。で、シカ獲りしようかいうたらあつち行きよつたつた。それから、こつちはもう遠坂から千原へかけて、福知山方面は、わりに少なかつた。居らんことはないけどね、猟師さんがうまいこと獲れるほどは居らへんかつた。せやから、兵庫県が初めにシカは獲つたらいかんことになつて、遠坂あたりで獲つても、わざわざ千原の方へ坂を越さして、そして、あつちから獲つたようにして、大きな顔して荷を負うて、そういう話がありますわな（笑）。幼稚なことや、よわわかんねやけどね、そやけど、その違反は言われるさかいに、うん、京都府までわざわざ持つて行つて、ほつて、担うて降りよつたんや。古い猟師さん、話してでした。

—— そうですか。昔の猟師さんは、そやつて、村じやないところに獲りに行くこともようあつたんですか。

足立 そうですね。この近辺、京都府からずーっと泊りがけでイノシシ獲りし

よつたんやで。大名草の猟師いうたら、そら大したもんやつたんや。それで一冬食べよつたんやからねえ。

—— その獲つた肉はどこで売

り捌いていくんですか？

足立 いや、そうじやなしに、持つて帰つたら、今度は人足が居つて、あの石生の駅まで車で持つて行つてくれんねやね。それから汽車で篠山まで。

—— そうですか。

足立 昭和二十年代から三十年代のはじめくらいまではねえ、そうやつたらしいでつせ。

—— 山には、猟師が勝手に入つて良かったんですか。村々に断りを入れて入つてはつたんですか？

足立 それはないですわ。もう狩猟免許証があつたらね。

—— 山中は自由？

足立 そうそう。その当時は全国一本で良かったんですよ。今は各県の狩猟税を収めんと猟ができませんけど。一本、大日本猟友会があつて、その狩猟税を払うたら、全国どこでも行けよつたんです。

—— おいくつぐらいから猟をはじめたんですか。

足立 えーとね、昭和の三十九年か四十年からですわ。

—— やつぱり先輩猟師さんに、ずっと罠を教わつてらしたんですか。

足立 いやいやいや、鉄砲しましたんやで。

—— 鉄砲をされたんですか。昔は鉄砲の

方が多かつたんですか。

足立 そうそう、罠はね、少なかつたんです。というのは「大名草の猟師」いうけど、大名草はグループをきちつと組んで、それで猟をしたつたんや。で、できるだけ個人プレーはせえへんかつた。

—— そうなんですね。

足立 はい。みんな仲良く。おんなじ村で。子ども大きいせんなんしね。プロやもん。せやから、居る所へ行つて、やりよつたつたんで。市島の方も行くし、中町の方も行つてやし、この和田山、山東町も行くしねえ。山続きやさかいに。そら幅広うやりよつたつたんでつせ。その時分は、四月いっぱい、四月十五日までがありよつたんやもん。

—— 長かつたんですね、猟期が。十一月から？

足立 十一月は十五日からね。せやから、山そのものはね、むしろその時分からわかつとるけども、ただ、とにかく奥行つて銭儲けしよつたんです。

—— なるほど。街ではなく。

足立 そうそう。今は、口向いて（村の入口を向いて）行かんとお金儲けになりませんけど、昔は全部、養蚕やら、それから炭焼きやら。

—— 炭焼きをやつておられた人も結構いらつしたんですか。

足立 大勢居つてですね。うん。

—— 最初の頃の獲物も、シカがメインだつたんですか。

足立 違います。イノシシ。

—— イノシシですか。それで、当初は鉄

砲でやって、いつごろから罾をよくやるようになったんですか。

足立 罾はね、昭和五十年代からかな。

—— 何かきつかけはあつたんですか。

足立 あのね、その時分から、イノシシの単価が下がってきたんですよ。せやから、五人、飯にかかったら、お金にならんようになったんですわ。

—— ああ、なるほど。グループで獲りに行つては採算があわなくなつた。

足立 旦那の遊びになつてしもたんですよ。小さいイノシシを獲つて、たとえば、十万円しよつたイノシシやったら、もう五万円ほどになった。それから、三十貫級（百二十、百三十キロ級）やつたら、四十万ぐらいいよつたんですよ。それが今、四万円から五万円なんですよ。というの、こんな背ロース、ロースが入る鍋がない。昔にバブルの時代につくつた宿泊施設や観光施設がありますねえ、そういうのが、バス会社とかそういうのが指定管理者になつとるやつが多いんですよ。そこへ、今度はバスでツアーで送る。イノシシ鍋や言う。そしたら、ポツと火をつける（一人用の）鍋ですよ。こんな大きな背ロースが入る鍋がない。ほつたら、ニワカ炊きさーつとするさかいに、堅うて食べられへんねや。そういうことの繰り返して、それから我々の年代みたいなイノシシ食うて舌が味を覚えとるやつが、みな食べへんようになった。で、今の若い衆は、焼くばかり。煮るよくなことはあんまりせえへん。そういうことになつてきて、需要と供給の

バランスが崩れたつて、グループ猟しとつては合わん、と。遊びではしゃあないということ、（大勢の猟師がやめて、自分は）一人、単独をやるようになった。

春は、女性が山奥へ行って稼ぐ

—— 山の風景も、猟をはじめた頃の風景と、今とで、随分違いますか？

足立 いやあ、もうひどう違いまつせ。とにかく、春は、奥行つてお金儲けするというのは、おばちゃん、おばあさんたちが、木の芽を採りに行くんですわ。山に自生しとる木の芽をね、大阪へ持つて行ってん人があつて、木の芽採りをする、一週間か十日ぐらいますね。

—— 山椒の木の芽ですか。

足立 山椒、はい。それが終わつたら、今度はフキ採りをする。フキ、ワラビ採り。

—— ようけ採れたんでしようね。

足立 ようけ採つたんでつせ、ようけ採る人はほんまに本職で、自分が行くところはもう決めといて。ほんで、途中で掃除してね、カズラが登つたりせんように掃除しといて。ほいで、行きつけ、いうて、「もうあの人がここは行くところや」「この場所はあの人の陣地や」つちゆうに（という風に）して。おばちゃんらがもう、ほとんどここらへんの人は、木の芽採り。春の四月二十五、二十六日頃かな。

で、生活の知恵で、口（山裾）から採つて行くんですわな。温度差でこう、奥、栗ヶ峰の上へあがるほど遅いから。口から採つて行くんですわ、その行きつけを

自分がこしらえていて、ずーっと。ほんで、ニユースを入れて、「まだあそこはやらこかつた」とかね。で、その道中で、今度はフキがようさん（たくさん）生えてくる。それを採つて。で、二番ブキいうて、田植えがすんだ時分にもう一遍行くんですわ。大きいなつたやつ。うちのおばあさん、背中に負うてきよつた。それをゆがいて、乾燥さして、冬の保存食ですわ。冬から春のね。

春に、今はほとんど少ななりましてけど、アマギ、つちゆうのがあつてね。クサギ（三ページ写真参照）、臭いやつがあるやろ。

—— アマギつて言うんですか。

足立 アマギ。その芽を摘んで、ゆがいて置いて、それと一緒に炊いたりね。ゼンマイ、それからワラビはみな保存食、フキも保存食で、全部ゆがいて乾燥さして、ほんで、もどして。そういうのが田舎の生活。わしらが一番しまいやないですか、そんな話でできるのは。もう少ないですわ。そやから、植林してから皆目ですわ。

山の栗拾いも、行きつけの大木へ

足立 木の実ね、栗、シバグリ。

—— そのときのシバグリつて結構大きかつたんですか。

足立 小さいん。それは天然でシバグリがあるんですよ。それもみんな行きつけがあつて。あそこは誰が行くつて、こんな木（大木）がありましたんでな。—— へーえ（聞き手一同、感嘆の声）

足立 ほつて、（木の斜面下側に）筋をつけて、落ちててもコロコンコロと来ても、間でとまるようにしといて、生活の知恵で拾ってきたつたんです。背中に負うて来りましたもん、おばあさん。それは、もう全然、もうね、植林して地あけすのに木い伐つてしまいいよつたさかい、ほとんどありませんね。

—— もつたないですわね、栗の大木なんて。

足立 うん、せやから、その時分のわれわれよりちいと上の年代は、栗拾いも手つたい（手伝い）に連れて行つてもらうてますわな。嫌々やけど（笑）。

—— 帰り重たいですもんね。

足立 帰り、持つて帰らんなんもんねえ。—— 調子に乗つて拾つたら、拾つた分を全部背負わされる（笑）。

足立 そうそうそう、それおもしろいさかい、拾いますやろ。それを持つて降りんなん知らなんだんや（笑）。—— 拾うんは楽しいけど。

足立 そうそうそう。せやから、遊びの一環やつたんですわな。遊ばせる。ほんで、後のことを教える。

里山の恵み
マツタケは

話し手 大西明美氏、小寺昌樹氏、

長井克己氏（青垣町東芦田）

日時 二〇一六年十一月十日

会場 東芦田公民館



マイとか、フキとかがたくさん出よつたんですわ、あの今、桜が植わつてるあたりね。

はい、桜が植わってるあたり

長井 うん、あるある。峠。

大西 峠のね、あのトンネルの下あたりね、ずーっと。子供会の費用にする、いうてね、柳町とか沼とかね、そのあたりへ売りに行きよつたんですわ。

それは、採つたやつを？

大西 うん、束ねてね。まあ、悠長な時代やつたんでしょから、誰も何も言えしませんしね。そないしてね、手伝つてね、自転車で行ったり……。

それは、子どもが刈つて、子ども

もらが売りに行つたんですか？

大西 子どもらが採って、はい、子どもで売りに（笑）。もう五、六年生ぐらいでね、もうそれは。（昭和）十八年、十九年、二十年頃ですね。

大西 あの時分は、本当にもう私ら、学

校行つて勉強なんにもせんとね、サツマイモ作りに運動場耕したりね、あの倉町の野で耕いて、五年生の時に、そしてサツマイモ植えてね、食糧増産やいうて、そんなこともしました。

——倉町野つておつしやいました？

大西 倉町が野でしたでね、そこ開墾し

てね。ツルハシ持つて行つて、私ら五年生でしたけどね、あの、しまして。ほんとで、シシ（イノシシ）が出るからいうてね、川からずーとみんな並んでね、石をひとつずつ運んで、ほんとで垣に。

— ああ、猪垣つくつて

大西 猪垣に積むのにな。でまあ、それを作んなはる人はまた、大人の人がね、作ってでしたんやけどね。

——結構、離れたところまで行かれたんですね

大西 ええもう、山も行きましたしね、

西芦田の方の山（笑）。薪をつくつて、五年生、六年生の時にね。薪をつくつて、石生駒までね、荷車に積んで持つていきました。

小寺 割木とか柴とかいう……。

大西 割木をね、束にして荷車に積んで持っていったりしました。荷車、それもカネの車でね。まだほんなゴム車やなんか、はやつとおしませんで。

小寺
それが昔は船で、大

す、運んでたんですけどね。大西さんが
おつしやつとんのは、石生に日通の事務
所があつて、ほいで、貨車に載しとんで
すよ。

マツタケをエプロンに包んで

大西 そうですね マツタケもたくさん生えよりましたでね、峠のちよつと向こうに狼谷おわふぐたにという谷があるんですが、そこでマツタケ採りにね、父や母やらね、行ったりしました。

小寺 狼谷は市島と背中合わせのところ。

東沙田林野管理組合共有林各谷地名表



東芦田林野管理組合共有林各谷地名表

奥狼とかね、そういう名前で。狼谷、そ
んぐらい奥が深いんです。

大西 狼谷いいよりましたで（笑）。

小寺 うん、そうなんです。今も、名前残つとりますよ。山の地籍で、奥狼、狼谷、二郎谷、太郎……残つとります。

大西 狼谷やとか、水の手やとかなんや

かやいうてね、ありましたな、梅ノ木や。
小寺 トンネルはこれですわね。

大西 ああ。ここの山ですわね。（左

（参照図）

小寺 坂、いうとは、いろは坂ではないけど、それぐらい九十九というぐらい折れ曲がつてたというぐらいの。だからそれぐらい急だから、(まつすぐは) 上がれないから、ゆすつてゆすつてしてこ

うあがつていく。でこれから、上豊富へ降りて行くということ。だから、大西さんらの青年時分は、福知山の祭りのときには、自転車でね、押いて上がつて、ほて、福知山の街へ行かれた。今でこそトンネルができてますけどね。

大西 そうですね。

小寺 今でこそ、マツタケマツタケ言いかけてましたけどね。

大西 もう、あの、たくさん生えてねえ、私なんか子供でしたけどエプロン外してね、エプロンに包んでね、父はズボン脱いでねえ(笑)、下くくつてね、そこ入れたりしてね、とりましたね。まあその頃はもう、あれですわ、からし漬けいのをお婆あちゃんがようしよりましてね。

—— マツタケのからし漬けですか

大西 酒の粕に塩をしといてね、それを漬けるぐらいのことですけどね、おいしかったですよ。

小寺 酒の粕は、なぜかいうとね、この地方はいわゆるお米がとれないから、(冬場は) みな出稼ぎいうて、酒屋へ出稼ぎしているおうちもあつたんで。寒天屋へ寒天のために岐阜の方へ出稼したり。

—— 酒屋に行った人が、村に酒粕を持って帰ってくるんですか

小寺 後の方は、酒を持って帰られましてけど、酒なんか持つて帰れるいうたら、もう棟梁が杜氏の頭ぐらいい。他の人は粕を。昔はね。

大西 あんなマツタケも、今どうなったんかしらん、つて思いますね。(他に) こんなね、ネズミタケ、いいよつたんです。白い。(注：ネズミタケIIホウキタケ)

—— ネズミタケ、ありましたか。ネズミタケは、一か所からとつと出てるんですか？

長井 そう、株の塊。

小寺 群生やね。

大西 エノキタケみたいなんですがね、ずーつと生えとんですわ。もう広い場所。そこ行つたらあるさかい、いうてね、私もお友達と三人ね、マツタケ山に連れて上がつてもうてね、そんな採つて。それは乾燥させて、そしてあのインゲン豆ね、豆と一緒に炊いたらおいしい、いうてね、ようそれ炊いてくれよりました。

—— ネズミタケを乾燥させたんですか

大西 はい、家で乾燥させて。

小寺 あれ、水に戻してまた使えんねやね。

大西 そうですね。水に戻してね、うずら豆やらインゲンがいましたね。それで一緒に炊いてね。

—— どういうところに生えてるんですか

大西 平たいね、ちよつと木があんまりない雑木林のね、そこに生えとりました。

小寺 雑木林やないとあかんで。杉の木

ではもうあかんさかいに、雑木林」
長井 雑木やね。

タニシ、ドジョウも美味しく料理

—— どんな魚が居ました？

小寺 フナ。ナマズももちろんそやけど。ウナギもね。

大西 田んぼ水落としなはる時分にね。

小寺 大西さん、タニシの話せな。

大西 タニシねえ、よう拾いに行つて。おいしいですよ。

—— おいしいですね。タニシ、どうやって食べてはつたんですか？

大西 塩でもんでね、ぬめりはずして。そしてもう醤油、お砂糖で(佃煮)。

—— 殻は？

大西 殻とつて。殻は針でこうしてとりよりました。

—— 生きたままですか？

長井 熱湯にさらしとおしませんでしたか。いっぺんは消毒いう関係で、熱湯にさらしとると思いますわ。

大西 で、フタとらなんだら中出えへんから、フタとつてこう引き出して。

長井 で、塩でもんで。毒落としとぬめり落としと兼ねとんのやな、塩というのは。

—— その後、醤油で炊いて佃煮ですか。手間がかかりますね。

長井 手間はかかるね。(殻は) ニワトリの餌にしよつたんやね。

—— 採つてすぐゆがいて料理できるんですか。一週間ぐらい泥抜き？

長井 いや、すぐできますわ。

小寺 泥めくり。

—— 泥めくりつてなんですか？

小寺 もう秋がすんで、その泥をこもつたそん中にドジョウが隠れとんですわ、休んどんですわ。ドジョウをとつては、泥をめくつて。

—— 泥めくりつていうのは、表面がちよつと乾いてめくれる？

長井 乾く云々やなしにね、稲刈つた後の株。株と株の間の泥をこうしたら、マドジョウですけど、ドジョウがでてくる。

小寺 溝にね、いわゆる草が生えて、コンクリやないから、水をもうあてたらいかんと、いかんというのか、田んぼは欲しくない(水抜き)、というので上でせきつてしまふ。そしたら、川がこんぐらいの沼になつて。その泥をめくつたら、大きなドジョウが居つたいうて。小さい子が大きいドジョウを捕つたら、かえちやる(笑)。僕らはやられた方やけど。そういつてね、ドジョウようけ持つて帰つて。あれコトコトコト炊きよつたんやで。

大西 そうですね。溝にたくさんおりましたね、いろんなもん。

—— 雑魚も捕つてたんですか？

小寺 雑魚、フナとかヤマモト(アブラハヤまたはタカハヤ)とかね。

長井 タナゴいうのが当たり前に居りましたからね。

小寺 あれ(雑魚)、囲炉裏のところに刺して、ねえ、乾物にして。

—— 乾物にするのは、腹裂くんですか？

長井 小さかつたらそのままですわ。ま

あその方法と、そのまま炊くという方法がありますね。

小寺 落ち受け。

—— 落ち受けはどんなときにやったんですか？

小寺 あのね、水を流れまっしやろ、あるところできせきつてもうこれで終わりやいうたつたときに、一生懸命水を求めて走ってるやつはすーつと下へ流れてくるんですよ、それをとつたり。台風のとかなんかやつたら、水がようけでたときは、土手のところに網をはつて、ずーつと登ってきたやつがしゅーつとおりにきたやつを受けて。で、ようけとれたときに近所からもらつて、だーつとバケツでもらうさかいに、そんなひとつひとつ腹裂いてなんて小さいやつ料理やつとられへんから、ざーつと刺いて、今みたいな状況でいろんなとこに干したり、乾燥させて食べたり。

長井 洪水の時の、泥水が川の土手のとこで渦巻いてるようなとこを網を入れる、いう捕り方で。

—— それはお父さんらがやるんですか？

長井 そらもう当然、お父さんの役。—— じかに炊くつていうときにはどうするんですか？

長井 山椒を入れて、お茶で。

—— お茶？お茶で炊くんですか？

小寺 みな、昔お茶炊きよつたさかいね、家で。そのお茶を使つて。お茶、便利でしたよ。食事した後でも、お茶の残つと

るやつをちゃーつとテーブルに置いてぐーつとしたら、テーブル、ぴかぴかに光ってんです。

—— なるほど！

大西 家でつくつたお茶は、香りもいいし。

小寺 茶の葉っぱは、今度は畳にばらまいては、ほうきで掃いて、埃の立たんようにそれで掃除したりね。

—— 濡れたままのお茶がらで？

小寺 ばさばさではないけど、湿気のあるようなものをバラバラつとまいといては……。

大西 新聞なんかでもしすけど、あれでは具合ようとれませんね。

「大休み」は、各家でご馳走

長井 田植えの後の大休み、いうのもあつたね。

大西 村中ね、お触れが回つてね。

長井 (区の資料には) 区長から何日から大休みと触れが出ると書いてある。手間替えの勘定日でもある。ああ、支払をせんなん日やつたんやな、これが。どの家も、うどんを作つたり、買つて食べたリ、お寿司やいろいろなご馳走をして楽しむ。夜はかけ小屋の芝居を見に行つたりつて書いてある。勧進元^{かんしんもと}がおつて、芝居を買つてくる。呼んでくるいうこつちやろな。

長井 これに大休みはうどんを、いうて書いてあるけど、ほんまにうどん食べよんなつたん。

大西 私はおすしが好きやつたさかい

に、おすししたり、お餅ついたりね、夏でも。

長井 いわゆるハレの日なんやな。

—— 季節ごとに作つてたような料理つてあるんですか？

大西 ありますね。社協でね、二十周年記念に『青垣の味』いう本を出しましてね。(大西さんも分筆)

長井 『青垣の味』これに昔のことが書いてある。

—— そういう料理は、大体、畑のもんで足りたんですか？

大西 そうですね。『青垣の味』いうてね、伝承料理集いうことになつてゐるんです。門日、門日に何を作つていうんで、そんなことを書いたりね、なんかしました。

『伝えよう青垣の味』



青垣町社会福祉協議会の給食ボランティアグループが中心になつてまとめた、青垣の伝承料理のレシピ集。四季折々、門日などに作つた料理が掲載されている。大西明美さんもボランティアメンバーの一人として執筆に参加している。



里山の恵み 里山おやつ、あれこれ

野山を駆け巡りながら、上級生から下級生へ、代々伝えられてきた美味しい里山おやつのお話を、集めてみました。

【荻野忠一氏／市島町乙河内】 マツノモチ、ヤマナシ

荻野 マツタケ山へ秋に上がりますと、秋の産物がありますからね（大人に叱られる）。普通の山にあがると、マツノモチいいよったけど、ヤドリギ。松の木にはヤドリギね（※ヤドリギの一種で、マツグミ）。採って、きつしやきつしややってるとね（噛んでいると）、モチになるんです。チューインガムです。それもね、真つ赤になると甘いんです。私らは、モチ、モチというたけどね、ヤドリギですね、マツのね。楽しみでしたね。

それからもちろん、秋やったら、山にはナシ。ヤマナシ。自然のね。こつちには甘いのがありましたわ。自然のナシが。楽しかったね。

里山らしい里山で私が楽しんだところはね、今は牧場になつとんですわ。そこはね、常に小さな池があつて、自由に行き来できた。防水池でも用水池でもない。自然にできた池で、年中、水がね。とつと、とつとと流れてた。あつちからも流れ、こつちからも流れ、ね。そしてね、そこは、松の木も小さな松が生えているし。私たちは兵隊の頃の子ですから、

兵隊ごっこした。それが、ひとつの敵の陣地になつたりね。自分の陣地にこう隠れてね。わーつと。もう子どもの格好の遊び場。そしたらね、ウス、というた小さい小さい木でね。六角ですか、の赤い甘い実がね、なつとるんです（カクミノスノキ／二ページ写真参照）。それを見つけるのが楽しみでね。

【大西明美氏・小寺昌樹氏／青垣町東彦田】 ぴんぴんなし

大西 日天さんのお供（注①）やいうたら、みな集まつて、峠の道ずつと上がつて、柿があつたり栗があつたりしてね、それを拾いながら。

小寺 シバグリ、ヤマナシな、ブドウね、そういうったもんが、（今は）みな消えてしもうたし。柿も。

——山のブドウもあつたんですわ。

大西 ぴんぴんなし、いうてね、大きな木がね、芦田の奥の谷にあつたんですわ。——ぴんぴんなしは、ナシになるんですわ。

大西 いやいや、紐みたいなもんですわ。ごじやごじやごじやごじやした、紐みたいなもんですわ。

——ケンポナシですかね。

大西 ぴんぴんなし、いうて言いよりましたで。味は、甘い、甘かつたんでしょね、子どもでもう、ざーつと行つてね。せやけど、そういう風な果物が、もうほとんどなくなりましたね。

注① 四十七ページ参照

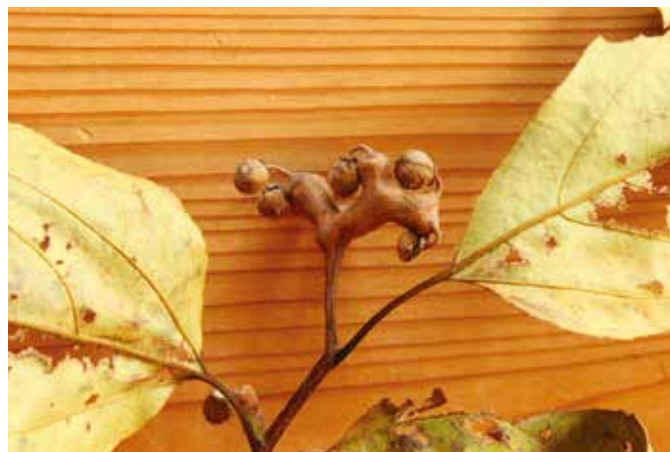


写真 ケンポナシ（太った果軸が甘い）

【山本とみ子氏／青垣町稲土】 夏は、大きな山イチゴを楽しみに

山本 子どもの頃はね、浄丸さんいうてこの神社行くまでの山に、けんぴなし（ケンポナシ）いうのかな、あれを採りに行つたり、それから、ヤマナシいうのがあつて。このぐらゐのナシ（子どもの握りこぶしくらい）。

——ああ、大きいですね。

山本 「あそこ行つたらある」いうちやつて、だーつと、採りに、男の子に負けへんように行つたり（笑）。一番覚えどのはね、夏休みにね、お父さんらは昼寝しとるし、その間に、山イチゴいうて、こ

んな（市販のイチゴぐらゐの）大きなイチゴあつて、それを採りに行きよつたんですわね。

——何色やつたんですか。

山本 普通のイチゴです。大きな。赤いの。もう草のがーつと生えたところだね。長靴なんか履いとおへんかつたんやろな（笑）。おつきなイチゴやつたわ。

——イチゴの味？

山本 イチゴの味がするおいしいのんね。ほいで、籠持つて行つて、帰つて来たら（父が）お昼寝から起きとつてやさかい、「これ食べない」言うて、食べさせたげんねん。山イチゴはよう採りにいきました。

——何月ごろですか、夏休み？

山本 夏休みいうのか、夏です。そんな長靴を履いた覚えもないし、たぶん、藁草履はいて行つた（笑）。

——色は、黄色やなしに赤？

山本 赤でね、いつかど（相当）、こう大きいのがつてね、それがおいしかつたで、よう採りに行つたんは覚えてる。

——それは、栽培のイチゴみたいな生え方ですか？

山本 （枝が）すーつと伸びて。

——伸びて、その枝先についてるような。

山本 そうそうそう。今はなんば探してもあらへんやろうと思います。

——中が空しやないですか。

山本 そうかな。こんな（丸く）なつて、中にぶつとこう、どういふかな。それがおいしかつたんですわ。今あつたら採りに行くのやけど（笑）。

里山の恵み 川の恵み ズガニ、ドジョウ飯

【荻野忠一氏／市島町乙河内^{おとがわち}】
通学路沿いの小川に、マスがゆらり

荻野 (川が) 三面張りやなかったらねえ。(昔は) 魚釣りもできるし、よく居りましたよ。三輪神社のところ(小川の合流点)はね、必ずマスが来ました。日本海から上ってくるんです。

——マス!? ほう(驚嘆)。

荻野 由良川を上ってくるんです。今でも若干由良川は上ってくるんですよ。学校から帰りよつたらね、橋の上のところにね、こう溜まりがあるでしょ、



写真 川岸の草の下が、魚の隠れ家

あそこにね。「おお、マスが来とらあ! 掴みにいけえ!」いうてね。大変な(騒ぎになる)。おつとつこい、子どもの手にあうもんじゃないわね。アザだらけになつて(笑)。

アユは、ちよつと来ませんでした、この川(美和川)には。竹田川に行つたらね、アユは、わー言うほど居た、坂折^{さこわり}のあたりはね。

ウナギはいっぱい居りました。カニは何ガニ言うたかな。

——毛の生えたやつですか。

荻野 ああそう、ズガニや(モクズガニ)。毛生えたやつ。下から手突つ込んでね。向こうも、餌が来たと思うてちよつちよつと(ハサミを伸ばしてくるので、それをがつと掴む。そして折つてしまふんです。やられんようにね。それからもう一回突つ込むとまた伸ばしてくるから、がつとつかんで折つてしまふ。挟まれんように。そしたらあとは歩く足だけでしょ。悠々とズガニをね、捕りました。また、それがおいしいんですわ。

——どうやって食べたんですか。

荻野 いやいやもう、ゆでて。ミソ食べるんです。あれあんまり、ハシ(ハサミ)はね、身ないんです。ミソ食べるんです。——海に居るカニと一緒にですか。ミソの味は。

荻野 ああ、どやってんやろう(笑)。

ミソやから赤かったしね、一緒でしょうね。そやけどね、海のものほどそんなうけ持つてへん。なんせ、最高でこれやでね(手の平サイズ)。

——ちよこつとしたもんですわ。

荻野 食べたか食べてへんかくらいです(笑)。

あとはヤマモトいうてね。こころでモト、モト言うんのは、なんですわ、ハエですね。ヤマメは居りませんね。それはもつと広い川です。

——カワムツがモトですかね。アカモト(繁殖期の婚姻色のカワムツ)とか。

荻野 ああ、アカモトいましたね。かつかつと牙が生えて。それから、ホトケドジョウ。今希少価値言われてるの。これも居ました。ぴっぴつぴつと。(現在も、ナガレホトケドジョウが生息している)

それから、餌つけんでも針だけかかつてくる、ヌルヌルの：ヤマモト(タカハヤと思われる)。私らヤマモトと呼んでました。(鱗が目立たず)ツルツルです。ヌルヌルです。あれは、餌つけんでも、ちよつちよい、ちよつちよい(入れ食い釣れる)。今でも居りますわ、ヤマモトは。

ドジョウ飯

荻野 魚ではね、アカシチ(アカザ)、ちゅうのも居つたし。これは竹田川に居つて、乙河内では珍しかったかわかんね。ドジョウは、何ドジョウいうたかな、川ドジョウで・・・あ、ササドジョウや。

縞^{しま}があるササドジョウ(シマドジョウ類)。少なかったですけどね。ドジョウ(マドジョウ)にタニシは、もうね、どの溝に行つても居りましたわ。ササドジョウは綺麗でしたよ。

泥の中に居るドジョウはね、ごつついこと捕れたねえ。わーつと捕まえてバケツの中に入れて、ほいで十日ほど置いて。豆をぼつぼつと入れるんです。ほいで、泥はかせ。で、泥はいた頃に、今度は煮るんですわ。はい、おいしかったねえ。

あるいは、ドジョウ飯。ドジョウ飯いうたらね、煮てね、すり鉢で潰すんです。ごりごり潰して、団子つくる。ほいで、それを出汁にして、ゴボウとか、いろんな混ぜ飯にするものをつくるんです。臭いから、ドジョウは油で炒めて。そうしたら臭みが抜けるんです。そんなら捕ってくるのも子どもの仕事でした。「おまえ、田んぼ行つてドジョウ捕つてこい。雑魚^{じゃこ}釣りしてこい」いうてね。

ニゴレスクイは、親父の楽しみ

荻野 雑魚は、親父の一杯呑む肴になるんですよ(笑)。親父も釣つた。(雨で)ちよつと水が出て来るでしょ、ニゴレスクイ(濁れ掬い)いうてね。アミ持つて行つてね。普通は川下からこう、アミをずーつと流れの際(水際の草が垂れてるところなど)、真ん中が流れとしたり、この際^{きわ}をね、笹があるでしょ、こうアミをすーつと(動かすと)、魚がね、流れまいとする。縁に居る。それを網ですく

うのがニゴレスクイ。それは、子どもは行ったらあかんいうてね。

—— なんてあかんですか。

荻野 水の出たときやから危ない。せやけど、親父は行きよる（笑）。

—— それは、親父さんでも危ないやないんですか。

荻野 せやけどね、ここらは危ないいうてもね、今は危ないですよ、（当時は）川に入って流れるようなことは滅多にない。（三面張りではなかったの）

年に、そやね、暴れ川になって回ってましたけどね。曲がっているところの田んぼはよく水が入ってたね。どこの家の田んぼって、決まっとった。そんな急やないですよ。曲がったところが、水が出たりする。せやけどね、そんなに怖くなかった、ニゴレスクイです。

荻野 （雑魚は）はらわた取りをする。ごつついこと捕れたもんね、つというのがあつてね、藁の。藁つというてね、麦わらをかーつと縛つてね、竹の串をそれに刺すんや。今でもやる方いらつしやいますけどね。それに、ハエやつたらハエを、（刺し並べていく）。そうすつと藁つとが三つほどできた。それを軒に下げよったね。おいしかったですな、あれ。

—— 軒に下げるのは、生の状態ですか。
荻野 生です。それがだんだんカラカラになつていく。この間に、親父は、禁制の和鳥捕りが好きやったから、コマドリのすり餌ですよ。すり餌には干し魚、これが不可欠のものです。すり鉢ですつて

ね、こねて、やるんです。

—— コマドリは、村で採れたんですね。

荻野 そうそうごつつええ声で鳴くで。ひよろひよろり……いうて。

—— 良い声ですね。

【荻野正裕氏／氷上町香良】

好きな人は、

夜に田んぼを巡って魚捕り

荻野 香良は、川から遠いから、（子どもが）水泳行くんでも集団で歩いて、出ていきよつたから（加古川まで）、あまり、雑魚捕りは少なかったね。

—— そうなんですな。

荻野 そんで、よつほど好きな人は、田んぼ、夜振りいうて、マツの木のやにの濃いやつを取つて、松明みたいにしたり、いわゆるカーバイトランプやね、露天商らが使こる、焼いた石灰に水を一滴差して、火をつけるカーバイトランプ持つてつて。そして、木綿針を棒の先に何十本も刺して、それで、夜振りつて言つて、カーバイトランプ照らして、田んぼ、ずーつと歩くと、この辺りは、しる田（湿地）ばかりでしたからね。

ちようど水が湧いて出るようなところが、しる田やつたから、そこ行つたら、ま、ドジョウとかナマズとか、おりましたから。それを、その針いっぱいついたんで、クシヤと刺して、捕りよつた。

—— ドジョウを、刺すんですか。

荻野 うん、ドジョウを刺す。ドジョウが、眠つたようにしとんのを、この歯ブラシみたいないっぱい木綿針をつけた

棒で。どのようにしてとりつけとつたとか知らんけど、それで、クシヤつとこう、刺すねんね。それでナマズとか。それからウナギは、うーん、まあ夜、夕方に、エダタ（注①）いうて、溝、今のようなコンクリの溝やない、石垣の溝でしたから、ウナギのおりそうなところへ、ミミズを餌にして、この木綿針大きいやつと真ん中に糸くくつて、普通の糸やなしに、かなり太い糸で、それにミミズで、針を見えんようにして。で、篠竹の先に取り付けて、奥の方へつつこんで、置いとくわけやね。ほつて、朝、その仕掛けたところ、捕りに行つたら、ミミズを、飲み込んでるやつがキュツとこう、横になつて引つかつて、出てくる。そういう捕り方を、してたと思う。それから、大きいこういう、いわゆる曲がつた、釣り針にも、あの一、蚕のサナギ。それ……なんかを取り付けて、しかけておいて、朝、回収に行つて捕りよつた。

それから、田植えの時期になると、田んぼの水が入るから、あの一、ナマズがよう上がつてきよつたから、ナマズはどないして捕りよつたか知りませんけども。それから……ポン。これも、私はあんまりねえ（使わなかった言葉）。あのおっさん、ポンやさかいいうて、魚捕り上手な人を、ポン、言つたりした。そういう人は、落ち受けいうて、夕立があつたりしたら、ダーつと一気に田んぼへ水が流れてきますから、そういう水のところ（田んぼの水の出入り口）へ、これくらいの網（タモ網）を持つて行つて、落ち受けいうて、フナとかドジョウとか、モロコとかいうのを捕つていました。

注① エダタ 水路や川で、石垣や岩の隙間、水際の草や木の根元などに、奥行きのある空間ができたところ。二十六ページ参照。



子どもたちの遊びとシゴト
ウルシでチャンバラ、おやつはフナメ、罌をしかけて鳥狙い

話し手 岡田徹氏（市島町上竹田）、
荻野聰氏（同上）、荻野晴久氏（同上）、
近藤悦生氏（同上）、藤田家治氏（同上）、
角木隆久氏（市島町上鴨阪）、余田正
博氏（同上）、余田義信（同上）、余田
安男氏（市島町下鴨阪）
日時 二〇一六年一月二十三日



写真 焚き火を囲んで、子どもの頃の話に花を咲かせる（聴き取りの様子）

ウルシで刀つくって、手がパンパンに

近藤 この辺、桑の木が多かったな。

荻野（聰） 桑の実がな。

近藤 桑の実。フナメやなんや言うて、あれはよう採りよった。食うやつがそれくらいしかなかったから。ここらは桑畑や、ずーっと、全部。

—— それは、フナメがなるということ、は、ちよつと大きい木がたくさんあつたんですかね。

荻野（聰） そら、蚕も飼つとつたからな。

角木 この辺はどういうか、綾部のグンゼ（製糸業）があつたさかいに、ここらは養蚕業が盛んやった。そのためにやつぱり桑の木を植えたように聞いているけどね。だからそれに成つて実とか、それから野イチゴもそうやけど、そういうもんが。まあおやつもなかったからね。せいぜいその、今で言うベタ焼きかな。まああれわれは焼き餅、言うつつたけど。小麦粉かメリケン粉か知らんわね。あれを溶いてもうて、あれを焼いてもらうんが唯一のおやつやったね。やつぱりそれで足らんかったら、野に山に求めていくような遊び。遊びをしながら、アケビも含めて、そういうもん食べとつたんちゃうかと思うけど。

—— なるほど。ご経験上、美味しかったのはなんですか。フナメは美味しいつてよくこの辺の方はおっしゃいますが。

荻野（聰） フナメは美味しいね。

角木 まあ旬が違うさかい、それはそんな時はそれなりに美味しかったんちゃうかな。

—— フナメの旬はいつなんですか。

角木 あれ、いつぐらいやった？

荻野（聰） 六月くらいやったかな。寒いときではないなあ。

角木 やつぱりそれは、どういうかな、先輩なんかに連れて行かれたりして、山でもね。日天さん（注①）のあれでもそやと思うわ。「行こか」言うて、なんや知らんけど誘われて、「弁当持ってこい」言われて持ってつた。それでやつぱり山登りしたりな、そこで遊んだりしながら、その中で見つけた実がアケビであつたり、いうようなもんやと思うで。

—— 日天さんつて、登る場所は村ごとに違つたんですか？

角木 違つたなあ。村のもんが、そやなあ、部落ごとに。

角木 僕ら、鴨阪やつぱり細長いから、上と下だけでもなんか行つて場所が違つたような気がするけど。

荻野（聰） 俺らは赤ズレ山（注②）言うてね、そこへ行つてやりよつた。で、ウルシの木で刀作つて、ここ（上半身）もつかぶれて（笑）。

近藤 ウルシの木が、よう剥けるじやわ、つるつるに。翌日、（かぶれて）パンパン（笑）。俺、学芸会の前のときでね、手が出えへんねん（腫れて袖が通らない）（笑）。お母さんが「アンタ何着とつてん

や」言うて。

—— まつすぐですし、ちよつと反り具合も、剣にちよつと良いんですね（笑）。

角木 せやけど良い経験やな、間違いない。それ知つてから、今の子どもやら孫にもな、それは触るなとか教えられるやと思うけど。今は学校で教えてもらつたことしか知らへんさかいに。だからそういう刀でもなんでも、自分で作つたりできよつたからな。今はそら、買に行つたらあるさかいに。

注① 「日天さんのお供」などと呼ばれる子どもの行事。年に二回、春分の日と秋分の日、子ども達だけで一日中、お弁当をもつて、山で遊ぶ（四十七ページ参照）。

注② 赤ズレとは、草木がなく表土が流れて赤土が露出したところをさす。

ツグミもマムシもおいしかった

近藤 クンツ（注③）は作りよつたね。今でも作れるけど、あんなもん、ヒヨ（ヒヨドリ）なんか一発やね。

荻野（聰） ほんまかい？ 捕つたことあるか？

近藤 ああ、あるある。

荻野（晴） よう捕れよつたで。

近藤 竹のみでもできるで。

近藤 うん。クンツはすぐできるなあ。ナンテン（の実）置いといたらい。

—— え、それは、食べたはつたんですか、獲つた鳥は。

近藤 美味しかったわね。脚からこう、テヤツとやつたら……丸焼き丸焼き。

——丸焼きですか。

近藤 スズメ、ヒヨね。ヒヨは美味しな
いけどね。

荻野(晴) ツグミは美味しかったな。

角木 そこにヘビも(焼いて)。

近藤 そうね。ヘビをかーつと剥いて。
僕はマムシをね、おばあちゃんが干した
カラカラになったやつを食べさして貰い
よったね。

——カラカラになったやつを焙り直し
て食べるんですか。

荻野(晴) そうそう。焙りながら食べた
んや。香ばしいねえ。干してあつたわな、
こう串に刺して。マムシが。

——マムシは、マムシって呼んでたん
ですか。

近藤 マムシはハメ。「ハメが居る、ハ
メが居る」言うね。

荻野(晴) 「これマムシや」言うたら食
べられへんけど。後で聞いたたら、「なん
やったんや、今の美味かったけど。えっ」
ちゆうようなもんで(笑)。

近藤 赤マムシは高う買いいつたでな。
マムシ。買いに来よつたな。

——赤マムシ、干しといたやつを買っ
て行くんですか。

近藤 アルコール漬けしよつたかな。そ
れで火傷の後とか(塗り薬にする)。ム
カデでも、よう効く。

荻野(晴) (マムシは)ナマで捕つたやつ、
醤油で焙り焼きするんです。そしたら美
味しいわね。油があつてね。せやけど、
そんなもん自分ではようせんけど、食
べさせられた後で、「あれはマムシや」

って(笑)。

——マムシはハメと呼んで、他にヘビ
は、クチナワとか言うんですか。

角木 クチナワね。

——クチナワは、どんなの言うんで
すか。大きい、長いやつですか。

角木 いやいや、ヘビのことを。ちっちゃ
いのも。

——ちっちゃいのもクチナワでいいん
ですか。

近藤 「クチナワが居るやわ」言うね。

荻野(晴) クチナワか。久しぶりに聞い
たわ。クチナワ言いいつたな、昔は。

荻野(晴) クチナワというのは方言なんや
な。

荻野(晴) ほーやろね。

荻野(晴) 縄に口があるからクチナワや。
余田(安) そういうことか。クチナワい
うのは。

角木 最近、減つたやろ、ほんでもヘビ。
前なんか、よう道路歩いとつたら横切り
よつたが、今、横切んのなんてそう見
へんやろ。

荻野(晴) ちよつと減つとんやろね。

——マムシの心臓食べたりしなかつた
ですか。近所のおばあちゃんて「マムシ
見つけたら心臓をべろつと呑む」とかい
う方が居ますけど。

荻野(晴) そうそう、動いとるやつをね。

近藤 動いとるやつをね。あれが一番え
えのや。

荻野(晴) 肝いうては、肝臓が特に効く
いうてな、それと一緒にぐいーと飲み
よつたわな。心臓はびくびく動いとるし

ね、その上に肝臓がついとるでね、マム
シの。それを一緒にとつてね、ほつて、
ぐいー飲みしよつた。そしたら、元氣にな
るって。

——それは、乙河内おとがわちの話ですか。前山さきやま
ですか。

荻野(晴) ああ、乙河内。親父が捕つ
たら飲みよつた。

注③ 罌えいの一種。とまり木に小鳥が乗ると、枝や
竹で作ったバナがはじけて、鳥を挟み込むしかけ。

太いイタドリイタドリの茎には、ヘビが居る？

荻野(晴) イッタンドリ(イタドリ)
はよう食べよつたけどね。

荻野(晴) イタドリなあ。

角木 酸いいやつやろ。

近藤 シャーと剥いて、塩つけて。そう、
あれ。

荻野(晴) そうやね、イッタンドリは
よう食べよつたね。

藤田 良いのは少なくなつたんじやな。
べらつとやつてすーつと剥けるやつが
あるけど。

岡田 太いやつやないとなあ。

近藤 ヘビが入つとる言いいつたわな。

藤田 そうそう(笑)。

近藤 あれになあ、太いやツにはヘビ
が入つとるって言いいつたもん(笑)。

岡田 どこもそう。

藤田 言いいつたな。

近藤 小さいとき入つとつたところねえ、
中ですーつと大きなつて。

角木 そんなん入つたの見たことない

けど(笑)。そやけど、見たことないけど、
そういうこと言われたことあつたな。

近藤 よう言いいつたな、子どももの
とき。言いいつたわ、大きいヤツ、ヘビ入っ
とおでよお、つて。



図 前山地区および周辺の地図
(国土地理院 地理院地図より改変)



子どもたちの遊びとシゴト 学校の行き帰りに牛追ひ。野山を駆けて、ウサギも獲った

話し手 足立九一郎氏（青垣町山垣^{やまがひ}）
日時 二〇一七年九月十三日



写真 足立九一郎氏（右から二番目）

冬は、キリコギばかり

足立 青垣いうてもな、やつぱり遠阪が一番違うのや。その次が神楽やろな。で、芦田、佐治は大体似たようなもんや。要するにな、山の地形が違うのや。

ここはもうマツタケがほとんどあがらへん、昔は。まあ、神楽はちよつとあ

がるところあるけど、大体がスギ・ヒノキがつくつたあるんや。松の木はあるんやけどな、土が良すぎてあがれへんねや。

—— ほう。そうですか。

足立 芦田や佐治は、マツタケがあがるんや。そやからもう、マツのあるところは全部このコクバ掻き（コクバリマツの落葉）いうてな、あれもひとつの道具やつてんで。あのコクバを持つて帰って、あれで風呂焚きよつてん。そやからまあ、生活の必需品じやにして、コクバ掻きに行きよつたわけや。それがもう山の掃除や。そやから、山の松ん中、走つとられるくらい綺麗かつたんや。コクバ掻いたり、細い木やみな伐つて帰つてな、風呂の焚きもんや。

ところが、ここらはそれでなかつたんや。神楽、遠阪はな、マツタケがあらへんさかい、松の木もないし、スギ・ヒノキを植えようやろ。それで、下の方は全部アサキ山（アサキニ落葉樹）にしとつたわけや、クヌギとかホウソ（コナラ）とかあいうアサキ山な。それを冬の間に、キリコギつちゆうて、一年中の焚きもんを、冬の間中かかつて、伐つてなあ、ほいでに（柴や薪に）しよつたから、綺麗になつとつた。山裾の方はぜんぶ綺麗かつたんや。

夏はもうなあ、やつぱり牛たちの草刈り行かんなんであ。冬はもうキリコギ

ばかり。わしらでも、もう若い頃は冬はキリコギばかりや。そやから、里山やなんじやいうてやいやい言わいでも、必然的に、若いもんらな上へあがつて良いもん伐るし、年寄りらは下の方の細いやつをみな伐つてやし、そういう、誰がどういうたわけでもないねや、結局は。

スギの葉拾いは子どものシゴト

—— 焚きつけは、ここらでは何ですか。

足立 みんな、スギの葉や、焚きつけは。わしら子どもの時分に「山に拾いに行つて来い」つてよう言われよつた。

—— 子どもが拾うんですか。

足立 そや。子どもが拾いに行くんや。スギ葉拾いいうたら、子どもが拾いに行くつて決まつとんのや（笑）。

—— なるほど。スギ葉は、家のどつかに蓄えておく場所があつたんですか。

足立 そうそう、今はみんな瓦屋なつとるけど、みんなもうわら葺きばかりやつた。そのわら葺きのなあ、二階にあげんのか。あのわら葺きいうのはこう四角い家かいて、この上へ柳帽かぶつとんねんからな、この三角のどこ（屋根裏）空くわけや。そこへ木がみな上がつとんねや。

—— 薪や柴も全部上がつてゐるんですか。

足立 薪もみな、全部、上がつとんじや。冬中焚く木が全部上がつとんや、そこへ。

—— アサキは、太さどれぐらいですか。
足立 いやもう、少々大きいもんは全部割つて使いよつた。大きいやつは全部、四つへ割つたりな、六つぐらい太いやつは割るし、二つに割るやつもあるし、み

んな割つて、ほいてそれを全部囲うつたわけや。枝はもう全部、長さを揃えて束へしてな、上の三角のどこへ上げたあんなや。ほたら、下で火い焚く（囲炉裏がある）からよう乾くんや。

そういう生活の形態いうのがな、やつぱり燃料革命で壊れてしもうたいうこつちや。石油ストーブもできまし、ボイラーができたやなんかして、山へキリコギ行かいてもええなつたいうこつちや。炊事するのでも、湯沸かすんも、みんな給湯器みたいなもんで、でけるでな。そやから、木がいらんなつたやろ。そやから、もう山へ行かへん。それが一番大きなあれ（原因）やな。

子どものおやつは、山の畑の芋

足立 農地が少ないさかいな、山を耕した。今みたいにな、シカやイノシシが出えへんねんや。そやかい、里芋とかサツマイモとかいうのは、ぜんぶ山裾に、みな作りよつたんや。山裾の畑に。なんともなかつた。なんにも出えへんだんや。あんなもん出たら、できないわね。どつこも作れへんわな（笑）。

わしらでもみんな山裾に里芋やらなあ、サツマイモみたいなもん、山裾のガラガラ（石だらけ）みたいなどこに作りよつたんや。あれはガラガラのとこでもできつさかいな、あの芋は。それでみんな、子どものおやつや（笑）。学校帰つたら、「おまえ、あれ、芋が茹でてあつさかいの」言われてな。サツマイモが採れかけたらサツマイモばかり。二度

芋（ジャガイモ）が採れかけたら二度芋ばっかり。そんなんや（笑）。

峠付近まで、広大な桑畑もあった

足立 山は、これ今は真つ黒けやけどな（スギ・ヒノキの植林で林内が暗い）、これずーつと奥まで桑畑やったんや。

——桑ですか。

足立 養蚕の桑畑や。（当時は）ここの副業の一番盛んなんは養蚕や。

——山のどの辺まで、桑畑だったんですか。
足立 いやもう上まで。全部わしら、桑採り行きよつたん。それぐらい、この山は活用しよつたんやけどな、昔は。せやから、山が綺麗ねやな。桑畑やかいな、草取りも行くし、掃除もするし、綺麗になつとつたんや。子どもらが走り回つて遊びに行くよつたつたんやけどな。
——そしたら、おやつも桑の実、フナメですか。

足立 ああ、フナメはよう食つた、わしらも。あの時分、砂糖がああへんさかいに、フナメはよう食つた。ここの真つ黒けにして（笑）。家の軒らでも、桑よう植えとつたさかいな。

放牧場へ、子どもが牛を連れていく

足立（青垣いきものふれあいの里付近から、南側の植林地を指して）ここはな、非常に土が良かったんや。そこから、桑畑。こっち側（ふれあいの里付近）は、あかんねん。赤土みたいな土や。せやから、こつち側はな、牧場やつてん。牛の牧場つちゅうやつ。

——結構な数の牛が居たんですか。

足立 牛はもう、どの家でも一匹は居つた、必ず。そこから、夏あいだはな、こへ放すやろ、牧場やで。

——個人の牛をそこへ放す形になつてゐるんですか。

足立 そうそう。子どもが牛を追つてや。朝の学校行く前に牛を放しに来んねや、ここへ。ほいで、また学校から帰つて来たら牛を引くねや、ここで。わしら、それが仕事や。そこから、牛の背中に乗つたり引いたりしもつてや（笑）。乗つとつたらひどう怒られたしな。「そんなん、乗んじやない」言つて。

——そうですね。馬は乗れるけど、牛は、ちよつとやつぱり背骨がね（笑）

足立 くるんと落ちんねや。つるんと落ちてな、頭がここ（下）へ来んねや、つるんと（笑）。そやかい、「危ないから乗んじやない」つて昔言われたんや。それでも乗りよつたけど（笑）

——牛は見分けがつくようにしてあるんですか？

足立 そんなもんなあ、見分けも何もない、おんなしような牛ばかりや。

——どうしてたんですか。

足立 そや、それがにわかで（滑稽で、牛がよう覚えとんねん。綱もつて連れに行くやろ、ほつたら出てきよんじや、おーいっつと。「あ、これそうじやい」言つて（笑）。

——これそうじやいって、牛次第つてことですか（笑）。近寄つてきた牛が、そうつてこと？

足立 そうそう。たんまに、一匹ずつ上の方へあがつて降りて来えへんやつが居んねや。それなあ、べこ（子牛）じよな、子をな、一緒に居つてるやつが降りて来いひんねや。子が寝てしまふんじや、くたぶれて。ほつたら親は動かへんねんや。

そんなんがたんまにあつたけど。ほつたらもう、上まで連れに上がらないかんねん（笑）

——なるほど。

足立 そやなかつたら、一番縁の、門のところになつたら、出て来とりよつた、皆。頃になつたら、出て来とりよつた、皆。

——賢いですね。

足立 毎日行つてさかい、牛もよう覚えとる。それでも、綱つけていでも、どうせいで、長い綱つけて裏の方から引つ張つとつたら、だつたつと一人一人で帰るわ。一人自分の家に帰んねん。牛でも可愛いもんやで、毎日毎日行きよつたら。一人帰つて一人行くわ。あんな鈍感なもんでも。

——へーえ（聞き手一同、驚き）。

足立 わしら子どもの時分はそんな生活つちやな。それが仕事じやわな。

ウナギもウサギも捕って食べた

——どんな魚を捕っていましたか。

足立 その時分にはな、今みたいに上品な魚ばかりやない、ウナギがようけ居りよつた。まあ「つけ針」でもしいたら、

晩げにつけ針しとくんや、そしたら、大抵食いといとるんや。

——仕掛けをしておくわけですね。

足立 そう。ドジョウを捕つて来てな、それを半分にポンと切つて、で、針に刺して、そこらにぶらさげとくんや。ほしたらそれへウナギが食いといとるんや。

——その晩は豪華な蒲焼ですか。

足立 そうそう。蒲焼に。ナマズでもな、田んぼの中にでーつと入つたりしよつたもん。ちよつと夕立ちやなんかした後で行つたら、もうじきに入つて来んねや。

——田んぼに餌がある、いうことですね。ナマズは食べたんですか。

足立 ナマズは食うた食うた。頭だけほかして、ケツはウナギと同じように開いて、焼いて食うんや。蒲焼や。うん、わりあい美味いけど。ウナギよりはあつさりしとおけんな。

戦中の食うもんじゃないときは、食えるもんつちゅうもんはなんでも食うたわ。猫やろがネズミやろが。犬でも猿でも美味ないわ。まんだ、あのアナグマは一番美味いわ。

——ノウサギとかも結構いましたか？

足立 ノウサギも、よう捕りよつた。

——どうやって捕るんですか？

足立 青竹の先をジャーツとしならせてな、中に餌置いて、ほいでその餌を食うたら、びやつと（跳ね毟。現在は禁止されている）。

——餌は何ですか？

足立 家の麩^ぬな。
——麩でウサギが獲れたんですか！

子どもたちの遊びとシゴト 子どもらで魚を捕っては、家で料理してもらうのが、おいしかった

話し手 大河孝氏（柏原町石田）
聞き手 長井克己氏（青垣町）、
山崎春人氏（大阪府豊中市）他
日時 二〇一八年九月十日



写真 大河氏（前列右）、長井氏（前列左）、
山崎氏（後列右端）

いろんな魚を捕って食べた

大河 魚はもう、捕ってきたもん、じきに焼いたり、炊いたりして。ほんなもん、一匹として、そんな、ほかしたりせえし

ません。それは、家に、もうね、あの時分は、女の人は家に居って、ほんで、食事の準備をしたり、それから家の中を掃除したり。あんまり、女の人は外に出よってなかつたです。私は、母親やおばあさんでも、減多に外へ出ようつちゅうようなことは、あへんかつた。家の中で、なんやはんけど、ごそごそごそごそ、しとりましたわ。そやかいに、捕って来た魚やなんかは、みんな、串に刺して、焼くか、炊くか。ほんな、逃がしたりほかしたりは、しようしませんでした（笑）。

—— どんな種類の魚を食べとつちやつたんですか。

大河 魚はね、そらあの、小鮒（コブナ）が多いですわ。それから、モロコ。それから、クチボソ（ムギツク）つちゅうやつがあつた。うん、それからね、チチンタ。ネズカ。それから、ドジョウな。ドジョウも、ササドジョウ（シマドジョウ）と、普通のあの大きいドジョウと。あのドジョウのことをね、チンポドジョウって、よう言うてました（笑）。

—— チンポドジョウ！（笑）

大河 ササドジョウは、ちよつと小型。でね、味が違いましたわ。ちよつとね、うーんそういう臭いがしましたわ、ササドジョウは。

—— ササドジョウの方が臭いがするん

ですか。

大河 ドジョウも、美味しかったでつせ。頭からしつばまで、串にガツと刺してね、塩をまぶしてね、ほいで、焼くんだ。それで丸かぶりすんねや。

—— それは、ワタ（はらわた）は抜かないんですか。

大河 ほんなもん、もう一緒や（笑）。そんな、ワタ抜いたり、せえしまへんねや。せやけど、かんしような人（神経質な人）は、かんしような子どもやね、ワタ抜きよりましたけんあ。大抵のものは、ほんなもん抜かんと、丸かぶりや（笑）。

—— じゃあ、子どもたちで捕って、子どもたちで食べるんですか？

大河 家でみな、それはしてもらいよつたんだ。そのために、女の人が家で待機しとりまつさかい。

山崎 それは、遊びで捕りに行くんじやなくて、食糧としてちゃんと捕りに行く？

大河 それもあるし、遊びもあるし。うん、両方兼ねてやな。

—— その中で、大河さんが一番好きな、一番美味しかった魚つてどれになりますか。

大河 美味しいのけ。うーん、そらやつぱり、鯉は美味しかったね。鯉は、そやけど減多に居らへんねやね。ほいでね、そやけど、食べるんにはね、黒鯉やなかつたらね、赤鯉はなんかも、うーん。：：どうつちゅうことないんやけどね、一緒やけどね（笑）。うん。黒鯉でしたな。

そら、黒鯉は、煮ても良いし、それから焼いても良いしね。あの新しいのやつたら、生でも、ようよう……。山崎 洗いですよ。

カエルの思い出

大河 ヒキガエルは、あれはもう嫌やつたね。あれは、臭いんですわ。

—— においが？

大河 ほつてね、あれは、普通のカエルみたいにピョンピョン跳んで逃げしまへんわな。悠々と、あんだ、ごそごそしらんやわ。ほして、どういのか、いわゆるヒキガエルのおい。草むらの中へ、ぐーつと入っていくわね、あれはね。ほたら、におうんですわな、あのにおいはなあ、また、特別なにおいやわ。

—— 結構たくさん居たんですか、ヒキガエルは？

大河 ヒキガエルはそんな、ようけは、おおしまへんでしたけん。ほつて、おるところが決まつとりましたわな。どこなとおおしまへんだわ。普通のカエルはね、アオガエルでもトノサマガエルでも、よけ居りましたけん。カエルはもうほんまに、いやつちゅうほど、まあ殺しとんね。かわいそうにな、今から思うたら。

エダタン中をヤスリで突く

—— 魚捕りは、網ですか？

大河 ああ、そうでんな、雑魚（じゃこ）捕り網がありましたんで。うん、それで、片つぽは竿（さ）を持つてね、ヤスリ（ヤス）つちゅうやつや。先がとがつてね、ぎやつ

と突くヤスリがありましたんや。それを持って。そして、エダタン中、がーつとやるんだ。そしたら、エダタン中で、鈍いやつはそのヤスリにひっつかかってつかまるやつもありますしな。

—— エダタ？

長井 手を入れたら一番深みのあるところ、一番の岸側で、草がこう生い茂ってきるところが、魚の棲家なんやね。そういうところ、エダタという。エダタつちゅうとこと、エダタつちゅうとこと。

—— 道具は自分で作ったんですか？なんか買ってきたとかそういうんですか。

大河 それは、縁日やなんかあったら小遣いが貰えまっしゃろ。それを大事に置いて、それで買いつつた。そんなん買うとくれ言うたつて買うてもらえやしまへんさかいな。そこから、やっぱり自分の小遣いで買わなしゃあなかった（笑）。そやかい、大事にしよりました。

柏原と青垣でも、小魚の名前が違う

—— さっきおっしゃった魚に、モト（カワムツ）は入っているんですか。

大河 モトはおいしいでつせ（笑）。

長井 ちよつと青垣では聞かん名前のが出たさかい、なんやろな、つて考えとんのかやけど、どんな魚でしたやね、モトやなしに、まあクチボソというのはわかるけど、その前後に言われた魚。

—— ネズカやらチチンタやら。

大河 ネズカいうたら、ナマズとよう似た白い。

長井 ギンタ（ギギ）のことけ？

大河 ギンタはギンタやね。

長井 ドンコ？

大河 ドンコは黒いわね。砂色してんの。

長井 スナホリ？

大河 おたくらでスナホリ言いよりましとか？そうかもわからへんね。うちは、ネズカ言いよりましなけん。

山崎 スナホリもわからんわ。

—— カマツカ（標準和名）ですか。

長井 カマツカのことですわ。砂の中で生活しとる。カマツカ（四ページ写真参照）。

大河 ああ、カマツカか。そんな上品な名前やなかった（笑）。

山崎 チチンタもわからへん。

大河 チチンタつちゅうのは、あれじゃわね。小川でも、綺麗などころやないと居らへんやつで。あれ、なんちゅうんじやいな。うちらは、チチンタ、チチンタ言うけど。

長井 泳ぐの？ドジョウみたいなの？ドジョウみたいやなしに？

大河 小さいやつでつせ。ほいで、びび、びび、びび、つて（動き）。

長井 ああ、ヨシノボリ。

大河 ヨシノボリや。そやそや。

山崎 なるほど。

長井 小さいさかいに。そういう意味かな。

—— 魚はどこに捕りに行ったんですか。

大河 私らは柏原やかい、柏原川です。それから、奥村川ですわね、この横つちよ

は、奥村川いうて、奥村からずーつと流れて来て、小南で一緒になってますわ。

そやけど、この奥村川はね、病院がありましたさかいな、そやから、親も、奥村川で捕って来た魚は、あまり喜ばしまへんだかい、捕らしまへんだ。

—— そしたら、食べられるような魚は、

柏原川から捕ったものが多かったんですか。

大河 そやね。あの時分は綺麗かったね、そやけど。

—— そしたら、今よりホタルも多かったりしたんですか。

大河 そうやね。

長井 綺麗かったやろね。

カイドリしてやさかいに・・・

大河 それと、それぞれ、イネ（井根／井堰）つちゅうのが、前まではありまして。イネがあつてね、イネで、そつから分水するわけですわな。溝があつて。

水を田んぼへ入れるのに。そのイネはちよつと水たまりになつとつて、そこは、ウナギやらね、ナマズやらね。そういうもんが居りましたわ。そしたら、その、ヒヤケ（日焼け／湯水）になつたら、もう農家の人は、そこに井戸掘つてね、そつから水を揚げて、そして、田んぼへ水を入れてやわけですな。ほしたらあんだ、魚はみな干上がつさかい、それを、よう捕りよりましたで。今日はカイドリしてやさかいに、捕りに行つてつかい、カイドリつちゅうて。

—— カイドリですか。

大河 バケツで、ぼーいとね、水たまりの水を出すんですわな。ほたら、浅うな

るさかいね、とりあえず。カイドリつちゅういよりましたで。おたくらはその呼ぶ？」

長井 やつぱりカイドリです。

—— 僕やつたらカイドリつて聞いてました（丹波篠山出身者）。

長井 うん、カイドリでもある。カイドリとも言うのやけど、とる方や。青垣の方はドリやね。カイドリやね。ボリも言うところもあるな、カイドリつちゅう。

—— カイドリとカイドリは、ひよつとしたらもとは意味が違うんですかね。

長井 違うんかも知れせんね。

—— 池^{いけ}、えの方をカイドリつて言うところ多いじゃないですか。

長井 播州の池がそうすね。

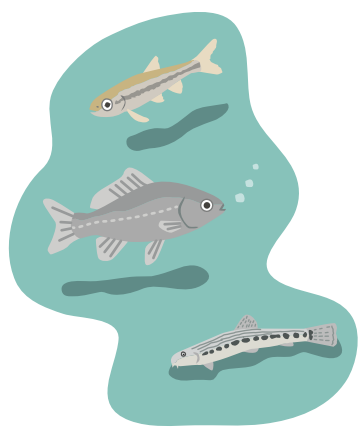
—— 今お聞きしてたら、水をとるためにやつてるんですか、カイドリの方は。

大河 うんうん。

山崎 ウナギねえ、そら高級品やなあ。

—— イネから田んぼに水を引いて、田んぼの方は、さすがに子どもらは遊ばなかつたんですか。

大河 そらもうね、やつぱり、大事な米つくりを、百姓は一生懸命やかいね。



子どもたちの遊びとシゴト 遊びと食が近い時代、野山を駆け回って、共に遊び、共に食べる

話し手 由良嘉明氏（柏原町大新屋）
日時 二〇一八年九月七日



写真 由良嘉明氏（右より二人目）

七輪の鍋を囲んで、子どもたちの宴会

由良 虫や魚を捕ったり、木の実を採ったりして、野山を駆け回って遊びました。これも戦後の話です。戦後の食糧難の時代に全部結びつく遊びなんですね。

—— 雑魚捕りは、捕るのが楽しみだけじゃなくて、食べるまで？

由良 そうですね。友だちと捕って帰っ

たら、それを家で七輪で、鍋に入れて、炊いて、で、みんなで集まってね、食べたりにしてね。それも遊びなんですね。

—— どんな味付けなんですか。

由良 やつぱり、醤油と砂糖で甘辛うに炊いて、で、大人が宴会でね、杯を酌み交わして酒を飲んだような恰好で車座になつてね（笑）。雑魚を酒のアテにして。酒はそのときは飲めませんでしたけども、そういう大人の姿を見て、なんかそういうことやりたい、という興味を持ったのでしようね。それはそれはよくやりましたね。

—— 雑魚は、どれくらいの大きさの？

由良 やつぱりね、一番多いんは小鮒（こぶな）やね。この新井村には、不毛（ふけ）いうところがあるんですね。これはたぶん、不毛（ふ）という湿田（ぬ）ですね。シルタ（silta）ですわ。そこに小鮒（こぶな）がね、夏にはたくさん湧いて出るんですね。それを捕りに行くんです。

稲を作っていましたから、水が必要な時と、水が不要な時があるのですが、必要な時期に雑魚を捕るために子どもたちが無断で堰（せき）を切り、田んぼの水を一気に落とすのです。落とす時に小鮒（こぶな）も一緒に降りて来るというわけ。そこで、網で待ち受けしとつたら、一挙にたくさん

雑魚が捕れるんですね（笑）。それは、ものすごく悪いことなんですけどもね。

—— うわあ、楽しそう（笑）。

由良 そういうことを次から次へやって叱られるのですが、またしてもそういう悪さをしてましたね。

—— その捕った雑魚、小鮒（こぶな）は、どう処理するんですか。

由良 炊いたり、焼いたり・・・

—— 特に泥吐（どひ）きも何もなく、ですか。

由良 そうですね、今から思うたら、随分、泥臭（どろくさ）かったでしょうね（笑）。で、焼くのは、自分たちで作った串（くし）を細（こ）うして、こう、くつくつと刺（さ）して。十匹（じっぴ）ぐらいを炭火（すす）で焼きます。で、麦（むぎ）わらを三十センチほどに切（き）って、結（むす）んで束（たば）にして。そこへ、くさつくさつと、斜（かた）めに串（くし）刺（さ）して、軒（のき）先にぶらーんとぶらさげておくと、乾燥（かんそう）して、保存（ほぜん）するのですわ。

—— それは、ワタ（はらわた）は抜（ひ）いているんですか？

由良 ワタは、抜（ひ）かん方がおいしかったですわ。ちよつと苦（く）みがあるんですけど。第一、ワタ（はらわた）を抜（ひ）いたら、もう食べるどころがなくなり、べちゃんとなつてしましますからね。だから、そんな小さな魚（い）のワタは抜（ひ）かずに食べます。

食べて覚えた、おいしくないモノ

—— 食べられるか食べられないかは、年上（としう）の人の行動（こうどう）とか見てたんですか。

由良 いや、それはもう、誰（たれ）から教えられることなく、小鮒（こぶな）はおいしいけど、この魚（い）はまずい、というようなことは、子

どもなりにわかつたりしましたね。

—— 逆に、おいしくなかった魚（い）つていののは？

由良 おいしくなかったのは、タナゴ（tanago）。

—— タナゴも食べたんですか。

由良 タナゴも今、おいしい言（い）われまうけど、まああの、紫（むらさ）や青（あお）、お腹（はら）が赤（あか）みがかったような、姿（すがた）は綺麗（きれい）けれども、そういう魚（い）はおいしく思（おも）いませんでしたわ。

—— そうですか。今はもう全然（ぜんぜん）タナゴを見（み）ないですけど。

由良 そう、見（み）ないですね。

—— 昔（むかし）はいっぱい居（い）ましたか。

由良 そうそう、居（い）ったんですね。きれいな魚（い）でね。

—— 綺麗（きれい）ですね。

由良 それより、小鮒（こぶな）が一番（いちばん）おいしかったように思（おも）いますね。その他、タニシ（たにし）採（と）りとか、シジミ（しじみ）採（と）り、カスミ（かすみ）網（あみ）でスズメ（すずめ）やホオジロ（ほおじろ）を捕（と）ったり、イナゴ（いなご）を炭（すす）焼（や）きにして食（た）べたりしました。みんなおいしかったですわ。

—— そうですか。

由良 アカガエル（あかがえる）も食（た）べましたよ。

—— どうやって食（た）べるんですか。

由良 焼（や）いて。

—— 丸（まる）焼（や）きですか？

由良 丸（まる）焼（や）きしてね、皮（かわ）をきゅつと剥（む）いてね、脚（あし）の部分（ぶぶん）ですけどね、このお腹（はら）の部分は捨（す）てて。脚（あし）の太（ふ）もいうんかね、うん、それはよく食（た）べましたね。それはね、スズメ（すずめ）を焼（や）いた味（あじ）と良（よ）く似た味（あじ）でしたわ。

雪の後は、知恵を絞って小鳥を捕る

由良 飛んどったスズメとかホオジロ（四ページ写真参照）をカスミ網で捕りました。その当時でも許されとったんかどうかはわかりませんが、よく捕りましたね。

——どこに罠を仕掛けるんですか？

由良 雪が降ったときにね、一面に積もった田んぼの一角を、雪かきするんですわ。ほしたら黒い地肌が見えるので、鳥はそこにエサ場があると思い、飛んで来るんですわ。

——ああ、なるほど。

由良 で、そこにカスミ網を張ると、飛んで来た鳥がひっかかり、それを捕るという仕掛けです。

——スズメもホオジロも焼くんですか？

由良 焼きます。おいしいんですよ（笑）。伏見稲荷さんの門前で焼き鳥売ってますわね。あれはウズラかなんかやけどね、今でも、あの匂いをかいだら、昔のこと思い出しますね（笑）。

——一羽から食べられる量って、どのくらいですか？

由良 もうあの、スズメなんかは、頭から食べられる。はじめ、羽毛をむしって、網の上でくるくるまわしながら焼いて、醤油をつけてまたそれを焼いてできあがり。それをぐちゅつと、一口か二口で食べます。

——骨までこういったちゃう？

由良 ああ、もうポリポリになるんですわ。またその骨がおいしいんですわ。

——これは、みんなで協力してやるんですか。それとも一人ですか。

由良 そやね、まあ近所の二、三人でね。そう、ホオジロは、集団つくって居りますんでね、ばーつと遠くから追うて来るんです。

——追いかけて来るんですか？

由良 追っかけて。そういう捕り方。右真ん中、左で、二、三人で網のところへ行くように、ですわ。果たしてそっちへ行きよるかどうかわからんのやけども。

——すごいわ（笑）

由良 子どもなりにね、いろいろ考えてね（笑）。

——へーえ。

由良 雪を分けて、黒く地肌を見せて捕るといのは、私らが考えたことやじゃないけども、昔から子どもたちがいろいろ考えた知恵なんでしょうね、あれは。

スイスイ、アマネ、ツンバラ

由良 スイスイ。これは、名前のように酸っぱいからスイスイと呼んだのでしょう。葉っぱの大きいもの、小さいもの、これも数種類あるんですけどね、葉っぱのやわらかいものと、食用に向かない、スイスイ、と呼ばれる二種類があつて、どちらもおいしいものではありますでしたが、身近にあるのでよく食べました。

——あの、穂が赤くなるやつが？

由良 赤いようなやつはエエンですわ。青い、ぶきぶきしたのは、堅うてね、あんなもん食べられへん。

——ああ、なるほど。

由良 まあそういう見分け方もしました（笑）。

——スイスイというのは、食用ではない？

由良 全部、食用ではないんやけどね（笑）、まあ食べられへんような味でしたわ、エグいね。それも、食べたからわかることだね、みんな（笑）。

——いろんなものがあつたんですね。

由良 そうやね。甘根（かんね）いうてね、これはね、土手に生える草なんですけど、まあ草丈の高い芝草みたいなもんでしたわ。今は、これがこの草や、いうてよう見つけませんけどね、それを引き抜き、根を洗うて、しがんだら、甘いんですわ。

（※由良氏の描写から、甘根は、チガヤの根を指すものと思われる。郷土資料にも、同様の記述がみられる）

——そうですか。

由良 それを、よう食べましたわ。根元の茎が赤かつたので、アカネと呼んでいたような記憶もあります。アカネやつたんか、アマネやつたんか、まあとにかく、草の根っこで、甘い草があるという。これも発見ですね。まあ、発見というか、年上の人に教えられて、しがんで、「あーこれ違うわー」と言いながらいろいろ試しました（笑）。

——それは柔らかいんですか？

由良 堅いですわ。しがんで汁だけを吸うんですわ。まあいうたら、サトウキビ。あんな太いもんやないけども、

サトウキビをしがんだような味が、ちよつと、しりましたわね。

——穂を抜いてしがむようなものは？

由良 ああ、ツンバラ（二ページ写真参照）。あれは美味しいものではなかったわね。

——あれは、ちよつと甘いんですか。

由良 ちよつと甘いような無味のような、綿毛のような穂でしたわ。で、ツンバラを、なんか言うてましたよ。

♪ つんつん、つんばり、・・・耳に入れてなんとかしたら、つんばになる、とか。

なんかそんなことを言っていましたわね。



子どもたちの遊びとシゴト 小学校二年生のとき、一人で峠を越えて、祖父母の家へ

話し手 芦田三千丈氏（氷上町鴨内）
日時 二〇一五年十月二十日



写真 芦田三千丈氏 鴨内公民館にて

私一人で、二時間かかって行った

芦田 私の母親が（鴨内峠の向こうの前山地区）上鴨阪から嫁いで来とんですけれども、私んどこ来て約十年か二十年ほどまでは、この辺（地図上で上鴨阪の山奥の谷）でまだ稲作つとつたらしいです。

—— こんな奥まで？

今はもう、こんな杉の木があつて、ほんで、あの林道を広げたりなんやかやした関係で、もう原型はのうなりましたけども。昔は、百十年か百二十年ほど前は、こころあたりでも、田を作つとつたというか、稲を植えとつた言いよりましたね。

—— じゃあ、その頃は、もつと明るかつたというか、木が少なかったんですか。

芦田 昔はね、山の掃除をようしとりましたでね。私、小学校二年生のときに、一人歩いて、上鴨阪の母親の実家まで、二時間ぐらいはかかりましたけれども、行きましたで。

—— それは、すごいですね！

芦田 昔はもう、そんな二年生の頃は、四年生以上やないと自転車は乗つたらあかんとか言つてね。私らの子どもの時分は制約がありまして、もし自転車で石生の方へ回つたとして、二時間やそこらではよう行けせんでね（笑）。

—— それなら、山の中を歩こう、という気になりますね（笑）。

芦田 私一人で、二時間かかって行つたんですよ覚えてます。

—— すごいですね。歩きやすい道はあつたんですか？ 今よりもつときれいな。今とちがうて、やつぱり、狭いなら狭いなりでも、道を、下刈りというか、やつとつたさかいね。そう、その苦労なしに行けたし。



図 鴨内集落および周辺の地図
（国土地理院 地理院地図より改変）

マツタケ狩りで、芸者が盛大に三味線を

芦田 あの松くい虫が入つてから、マツタケが皆目生えんようになりましたけど、ね。ここで、シチベエという字の山が、二町くらいでもあるかしらんけど、部落で入札したらね、一番多い年なんか、一日でタテ（注①）いっぱいに入らんくらい生えよりました。

—— すごいですね！

芦田 そらあの、私んどこのお宮さんの上の山でもマツタケが生えて、三回くらい、お宮さんの広場でね、マツタケ狩りというじゃか、盛大に芸者がシャミ（三

味線）弾いたりして、盛大にやつてんこととが、昭和三十二、三年頃にあつたんは、覚えてります。

—— 落語でそういう話を聞いたりすることがあるんですけど（笑）、やつぱり現実なんですね。

芦田 そらあ、マツタケないうたつてね、びつくりするような大きなやつがね、生えよりましたわ。

—— 他に木の実とか、甘いのかありましたか。

芦田 あまりね、そないになんやけど、山に行つた年配の人は、アケビいうてね、それを採つてきたり、それから、渋い渋い柿のこんくらのいのをセンノウいうてね、それを食糧不足の時分は皮を剥いて吊るし柿にもしよりましたね。

注① わら編みの頑丈な大袋、四ページ写真参照。

一戸に二口、縁故使用地を貰うて生活

—— こころ、山の斜面が急ですよ。今はもう上の方まで植林してありますけれども、昔はそこは全部柴刈りしてはつたんですか。

芦田 ちよつと奥の方はね、縁故使用地の関係で、今みたいに木を植えとらなで、今はあれ、縁故使用地は年になんばか部落が出して、市から借つとるような恰好になつとるやないでつかいな。

—— 縁故使用地というのは、分け山ですか。

芦田 ああ、そうそう。昔は、私んどこの方は、一戸に二口（ふたぐち）いうて、二所（ふたところ）で貰う

て、そのうちの一所は採草地として、堆肥にするようにね、適地をどつこも貰うて。ほして今みたいに燃料のない時代ですの、残り一口はまあ、柴刈ったり焚き物するのに、堆肥の草の生えへんようなところをね。どつこも二口ずつ縁故使用地を分けて貰うて生活していました。

——草刈りの適地というのは、どんなところだったんですか。山裾やったり、山の奥の方やったり。・・・

芦田 そらあ、奥の方です。下の方は、民有林で、いわゆる奥の方の縁故使用地というところが、草刈り地でしたね。

——そしたら、山は上の方、どの辺まではそんな分け山というか草刈り場になっていたんですか。もう尾根までですか。

芦田 尾根までですけどね、尾根まで草が刈れるとこはね、よつぽど地味の良いところくらいで。採草地としてもうたこでも、上の方二割くらいは、もうそら焚きもんせなんだら。そんな上の方までは草刈り場にはならしまへんでしたね。

黒牛の餌の草刈りも、子どものシゴト

——草は、さつきおつしやつた田んぼに鋤き込む以外に、牛も飼うてたんですか。

芦田 ああ、牛も飼うてましたね。

——そしたら、想像がつかないんですけども、牛の餌って（年間）どれくらい必要なんですかね。

芦田 いやあ、そんなもん、毎日ちいどずつ（少しづつ）やることやで（酪農家のように一度に大量に草を刈り集める



写真 鴨内の山林の入口にて

ものではなかった。毎日、一般百姓は黒牛やつたで、その日籠に一杯なら一杯だけ刈ってね、昼晩にやつたらという。まあ、飼料もやる余分に（草を）やりよりましたさかい、そんなようけではないですわな。飼料は、買うたんどか、家のみんな百姓で麦を作つとつたら、押し麦にして、ヒラ麦をね、やりよりましたね。ほんで濃厚飼料は、黒牛やで、量としてはやらんと、まあ、草が主でしたね。

——牛の世話はずどももしてたんですか？

芦田 そら、牛の世話はずどもでもしたから、子どもも田んぼの畦へかかつて、牛の草刈り、男の子も五、六年生になっ

たら、夏休みは籠いっぱい、もう義務みたいにして、親から「牛の草刈りしとけよ」いうて強制的に刈らされよりましたねえ。

——山の草刈りや柴刈りの手伝いなんかは何歳ぐらいから？

芦田 そら子どもの頃いうてもやつぱり高学年になつて中学くらいにならんだら、てつたい（手伝い）いうような事も。小学生の時にはね、干し草いうて青いの持つて出んのが重たいさかいうて、三日なり二日なり山で乾燥さしたやつを、一束背中に負わしてもうて、奥の方の山からは持つて出よりましたね。

部落有林を売って

公民館建設、分配金も

芦田 公民館でも、全部、部落有林を売って、そのお金で建てたんですわ。それで、ああ山言うたらこんな値打ちがあるんやなあ、という。

公民館が建つた記念に、それぞれ山に奉仕して、まあ出役はみんなタダでつさかいね、奉仕して、昭和三十二年の金でね、一軒前に五万三千円ずつ貰うた。その当時の五万三千円いうたら、この頃やつたら五十万円くらいには、匹敵しますやろね。

——山が本当に、儲かったんですね。

芦田 そうです。これはお宮さんの上の山、そこを売った売り上げ金で建つたんです。それで、奥の方にあつた山で、スギばっかりでしたんやで。

今やつたら、スギないうたら二束三文で、その時分は、太い大きいもんはカン電柱（電力柱）、ちよつと細い短いは電電、電信電話会社の電柱（電信柱）としても、全部出ましたでね。それを、杉の木を売つて、五万三千円ずつ分けたんや。百十戸。そしたらもう、今やつたらね、大きな金ですわね。

昔から良い木が育つところ

——良い木がとれるところはあるんですか。

芦田 ああ、そら地味によつて。そらやつぱし、この村では、（公民館から見える）裏の山というのがね、一番、ヒノキとしては、良い素性のが採れる。その見分け方は、薄い板にして、おたくらは知つとつてかわからんけど、餅蒸すのに昔、せいろいうて、しよりましたやろ。あの下にこのくらい（手のひらくらい）の幅のもんがね、あつて、その上に網があつた。これにすんのには、裏の山のヒノキは、薄うこうして、きりーつと曲げられると。どこでなどの木でしたつて、そうは簡単にはならん、いうて聞きましたね。

——面白いですね。本当に、素直な綺麗な木ができるところっていうことなんですね。そのせいろに良いくらいねばりがあつて。それが、鴨内の昔からの材木山なんですわね。

芦田 そうでんな。

山稼ぎいろいろ（炭焼き、薬草、林業）
薬草の里の戦後、オウレンで家が建ち、小学生も薬草採集

話し手 倉本英一氏、倉本克司氏、
（山南町小野尻）

日時 二〇一七年七月三日



写真 倉本英一氏（中央）、克司氏（右）

戦後、オウレンが飛ぶように売れた
倉本（英） 昭和何年ぐらいやったんだ、漢方薬というのがえらい認められかけて、そしてその中で、オウレン（三ページ写真参照）という薬草が薬効がおびただしい、ということを知った（大阪の薬種問

屋街）で言いかけて。その当時は中国からは貿易がなかった、入ってない。和製の商品ばかり扱ってた。ほんで、それがオウレンのキロ単価が最初千円ぐらいでしたかな。キロ単価いうたかて、その当時は百匁（め／もんめ）、二百匁、一貫匁、というような度量衡でしたんで。で、しよるうちに、オウレンの需要がだんだんだんだん増えてくるんです。これらの人もみな、はしかい（素早い）人ばつかしやから、昔やったことある人は、各地方へ飛んで、オウレンの採取をしだした。日本のオウレンの産地でいうと、丹波は「作りオウレン」、つまり畑で栽培するオウレン。それから福井県大野市、それと鳥取県の智頭町。ここは、山林で栽培するオウレンなんですな。これらの周囲には、かなりオウレンが生えてまして。

オウレンという薬草は、この和田地区の中で半分、小学校から上の牧山地区ハケ村、ここがオウレンの産地なんです。そこに畑をぜんぶ栽培してまして。昔は養蚕地帯でもあったんです。で、大きな立木（たき）いう桑の木が、この天井につかえるぐらい、ようけ密集してまして、最盛期、真夏は桑の葉でもう薄暗うて、もう陰気なところでしたわ（笑）。その下にオウレンの棚が。オウレンを作つて、ほいで陰を作らないかんで、柴

を山で採ってきて、棚を作つて。
倉本（克） オウレンは、日が当たたら良えことないんですわ。それで、あえて日除けをつくる。

倉本（英） 桑があつて、その下にオウレンを栽培して。そのオウレンの日除けを、山の雑木切つてきてつくるんです。

倉本（克） 今はもう、寒冷紗（かんれいしゃ）いうてるけどな。

倉本（英） 農協さんやら業者が（寒冷紗を）扱ってきて、それで日陰つくつてましたんやが、みなやつぱり、生育状態は、昔の柴の方がオウレンの出来具合は良かったようだな。

—— そうですか。

倉本（英） そういうような状態で、だんだんだんだんキロ単価が二千円、五千円、すぐ一万円近うなつたというようなことで。売っていくたびに値段が上がつていく。ほつたらもう、これらの人はみんな素早いさかいに、オウレン探して採ってくる金儲けが大きくなってくるもんやさかい、オウレンに関する、関係の人は、鳥取県、山陰地方から北陸地方、東は日光オウレンいうて、あれは日光いうのは栃木県だつたかな。あそこにもコオウレンいうて、ちっさいオウレンができる。種類の違うオウレンが。そんなにも採りに行つたりしてました。

オウレン栽培と、牧山の土質

倉本（克） 栃木の日光オウレンいうのは野生もんやね。

倉本（英） うん、もう山へ行くのは野生

もんばつかし。せやけど、野生でも、今言うた智頭と福井県の大野市とは、山に種をまいて。

—— 種をまくんですか。

倉本（英） 種をまく。オウレンの種子を。—— タンバオウレンも種ですか。

倉本（英） これも、ぜんぶ種から。で、これは、畑で苗を育てて、種まいて二年間苗でつくつて、ほしてその日陰の棚をつくつて、ほいで、二年目の秋に、本田に今度は定植するわけや。ほんで、一反歩に、一反歩いうたら三百坪でんな。それに、株にして二万株。一反に二万株植えてましたね。

倉本（克） それが四、五年かかんねや、生長していくのに。

倉本（英） 苗で二年と、定植して三年と。合計五年はかかる、製品にすんのに。

—— その間、追肥はもろろん、もう油粕

倉本（英） 追肥はもろろん、もう油粕が一番適してまして。ほらもう、どっさり入れてました。

—— この牧山が薬草栽培に適してたんですか。

倉本（英） そうなんです。あの砂礫土（されきど）いうて砂地の多い田んぼ、畑でんねや。そやけに、あの大東亜戦争が当時に食糧難で大分水田に変えましてたけど。今また、水田やめて漢方薬の方に代わつてますけど。米作つても、収量は少ないけど味は良いんです。ほんだら、オウレンなんかはこの砂の土地が一番適してましたよ。

—— そうですか。

倉本（英） もう粘土質は全然できまへん。で、やっぱり、土質、土壌の性質によって、できの具合がひどう（大変）違います。で、むしろ、青田買い、いうのをようやくてましたけど、土の様子を大体見分けて、これやったら、土壌、砂気が多い土地やったら、まあ間違いないやろう、いうことで青田買いをようやくてましたけどね。

——その青田買いというのは、作りかけのときにですか。

倉本（英） もうね、オウレンなら仮に二年苗で作って、本田で定植して三年目の秋。今年の秋には掘り取る、いう時期に、買取りするんです。

——ああ、なるほど。

倉本（英） ほんでもう、秋じゃなしに、もって早うに買ってくれ、いう人もあるし。ほしたらもうやっぱり、砂土壌やないと、秋になってから、秋口いうて、ぐるっと、春見たんと秋見たんと、これが買った品もんかいな、いうほど変わるときがあんねん。そこから、やっぱり土壌の適したのん買わんと、えらい損しました。

小学校の薬草集めは、膨大な量だった

——牧山は生産地ですけど、よそにも回って集めに行ったりしたんですか。

倉本（英） それはしょっちゅうやってました。

——買い付けに回ったのは、オウレンが多かったんですか。

倉本（英） ほとんどオウレンでしたね。

あとはね、時期によって、秋になったら小学校のドクダミ、ゲンノシヨウコ（三ページ写真参照）を買ひよってね、してましたけど。ほとんどはオウレン、買ってましたな。そのときは、もうオウレンの本体と、それについてる根っこまで触れとりましたさかいな。オウレンのモウレンいうてな。

——モウレンというのは、細かい根？

倉本（英） 本根（ほんね）についてる。ちっちゃい根っこでんな。モウレンいうのんや、ひげみたいなのとんの。それを、みな水で綺麗に洗うてもうて、乾燥さしてもうて。そんなん、オウレンと、そんなんばつか買うとりました。

——ドクダミなどの葉っぱもんを集荷する仕組みは、どうなつてたんですか。

倉本（英） あのね、まあ小学校が、あいう薬草の資金化いうのか。夏休みの間に、子どもに採らしたのを、九月の学期の始めの授業に持つて来て、ずーっと広い講堂に積んでましたわ笑。ほんで、それを、時期が来たら、「倉本さん、あの子どもが収穫したやつを買いに来てください」言うて、よう行つてましたわ。遠阪の方も行つたことありますし、それから、京都府の京北町の方も行つたことありますし。はい、いろんなところへ、小学校五、六校行つてました。で、量も大きいさきに、業者の、土建屋の業者のトラック、大きなあの五トン車とかそんな頼んで持つて帰つたことある（笑）。

——すごいなあ（聞き手一同、驚嘆）

倉本（英） 当時は、私も手伝いに行つ

たら、ごつつい量でした。薬草いうのがごつついありました。今は比べもんにならんほど。

——あれは、乾いた状態で出してくるんですね。で、それは目方で量つて。

倉本（英） 乾燥で出して。キロなんぼで。

倉本（英） 大体みな、乾燥、簡便乾燥でないって受け取れまへんいうて。

近年は薬草の単価が下落、獣害の激化

倉本（英） （近年）中国から医療品が入つたんです。ほしたらもう、中国の価格と、日本の価格とやったら、十倍以上に違いがありますやろ。ほいたらもうあんだ、やっぱり、オウレンなんか特に、四川省と湖北省と、あの辺から量がごつついんですわ。ほつたら値段がまたべらぼうに安いんです。せやで、そんなもん、まあ会社によって、「日本製品やないとかかん」言う会社もあんけど、「中国もんでええわ、結構」言う会社もかなりありますんで。やつぱりもう、そうなつてきたら、日本の商品、太刀打ちでけしまへんわ。そこから、高う売つても、耕作量も減つてしまふ。ほいで現代に来てるわけや。

せやけど、もうええときは、そのキロ三万までのときは、牧山あたりに新しい瓦の家が建つたら、ほとんどオウレンで建つとるんです。

——オウレン御殿ですか（笑）。

倉本（英） オウレン御殿で（笑）。その昔は、サフラン御殿（笑）。（※同地区は、昔、サフランの特産地でもあった）

倉本（英） 二、三年前やけど、鳥取県の智頭の農協や役場へ寄つて、オウレンのでき具合を聞いたら、「もうシカとイノシシとね、まあサルからクマから、もう山ん中、動物園ですわ」言うて（笑）。まあシカがオウレンの新芽を全部食べてまうねん。そこから、最近、できが全然ないようになってもうたんや、言うてましたね。

——昔はそんなに動物がいなかったつてことですか。

倉本（英） そんな話、聞きませへんかもんあ。ほんなもん、里へ下りてこられんときは、山でなんなど食べなしやあないさかい、なんでもかんでも食べてしまうんやな、あれ。

——昔はオウレンは、どんな林に生えてたんですか？

倉本（英） ああ、自然もんのやつな。自然もんは大体ね、マツとかね。それから、スギの下はようできてましたわ。大体、芽え切つてから三十年生息します。それで、三十年したらまたべたと倒れてしまいます。ほんでまたそれから、種が落ちて、また新しい芽が出て、ちよつと、水分の多い山林が、ようオウレンができてましたな。あの谷川に水が自然にちよろちよろちよろ流れてる、そういうところに、足の長いオウレンの生育の良えのがね、ようけ、「ああいうところ行つたらようけ良えのが採れるわ」いうて山へ採集に行つた人が言うてました。

山稼ぎいろいろ（炭焼き、薬草、林業） 村で競って、炭を焼いた

話し手 細見具康氏（春日町野瀬）
日時 二〇一四年十一月十三日



写真 炭の原料の木に腰かける細見氏

大路木炭組合

細見 大路木炭組合という名前の、ひとつの組合を作って、それでまあ、村じゅう、六十戸からあったんやけど、ほとんどの人が組合でつとって（手伝って）ね。

まあお互いに競争みたいにな、炭を焼いとったんやけども。売れるときにはものすごい売れて、取り合い。業者が取り合いて持つていんでくれて。また売れんときもあつて、倉庫の中で貯まつてたり。ひとつの倉庫で、十二キロ入りの木炭が五千俵は入るくらいの倉庫が二つ、それがいっぱいになるときもありましてん。そうか思ったら、すつと何にもないようになるくらい、出てしまふときもある。それはまあ、篠山なり、三田なり、福知山なりの業者がとりに来てくれよつたやけどね。

私らが、ほんまにそれをしかけたのは、学校出てからやさかい、終戦後になるんやけども。

——炭焼きは、冬の仕事だったんですか。
細見 年中焼いてました、売れるときは。炭焼きつてなもんは、ほんまは、冬せなあかん。葉が紅葉して落ちてから、したんが一番良いんや。春から夏は、（木が）水上げよるさかいに。ほんでに、炭としてはあんまり良いともならへんし、皮が剥けてしまふし。（秋に）葉が落つたら、もう水上げようへんさかいに、紅葉して葉落つてまうさかいね。

ほんまは、秋口くらいから冬にやらないかん仕事や、炭焼きさんは。ほたら、炭も良い炭が（できる）。ま、その時分は、一番最盛期は、やつぱし、これも統

制もんで、県の検査があつて、県の検査官が来て、ほんで一俵ずつ見て回つて、で、札に判を押して「はいっよろしい」つて押してもらわなんだら、出せようへん時代もあつたんや。今はほんなことも全然ないけども。統制もんやつたんや、炭でも。

それがまあ、生活の糧やつたさかいに、まあ月に百俵焼くか、百五十俵焼くか。よう焼かん人はその半分くらいで、よう焼く人はそれくらいで。まあ、努力次第で。家内まで、女まで連れて行つて、一人では、炭焼きは窯出たり入つたりせんなんさかいに、無理やさかいに、外に居るもんと中に居るもんと。やつぱり二人三脚でやらなあかん仕事なんや。

——炭を作る上で一番しんどいことは？

細見 そらなあ、今は話しにならんで。その時分は、そんなもん、山の上ばつかしやろ。結局、肩よりあらへん。あんなら、担うつていうこと知つてないけど、二メートルほどの棒を、先を両側とがらして、ほんで、刺せるものは刺すし、刺せんものはロープでくくつて。炭の十二キロのやつを、裏（後ろ）に二つ、前に二つの四つ、荷をして（荷造りして）、ほで、これをグイッと肩へ乗して、片手でたつたつたつと、山道を走つて降りよつてんや。

窯づくり、仕上げの後は一杯飲み

——窯はどこに作るんですか。
細見 窯は、山へ打つんや、そこへ行つ

て。よその山や部落の山、入札やなんかで「こつからこうや」つて印（境界の目印）をつけて。一山あつたら、一人ではどもならんさかい、四人とか五人とかで入りますやろ、そしたら、境を印つけて「お前はこつからこつまで」「お前はこつからこつまで」と。

——窯は、石を積むんですか、土盛りですか。

細見 窯は、土へ穴を掘つて、格好つくつて。それをするのにも、一か月ほどかかるで。ほいでまあ窯いうたら、レンガひとつも使わへん。黒土（表土）はひつつかへんさかい、黒土の奥（下）に赤い土がありまっしやろ、それを叩いて、ねやして（寝かせて）、まああんまり汁気になかつたら水ばつぱつと振つて、ほいてねやして、それを。天井は、木を積んで、格好をこしらえて、その上にムシロなりコモいうようなもん乗せて土が下に入らんようにかぶせて。いうたら木で型をこしらえるんや。ほいで、出入り口をこしらえて、下のシキいうて一番下になるところが一番大事になんねん。この一番下のところを水平にするんやけど、（完全に）水平ではあかん言うて、一分勾配いうてちよつと奥の方が深いようにして、きち一つとまつすぐなようにして。

それに、炭やいうたら、炭は横向けに焼いてんやない、縦向きに立てるんやでな、全部。縦向けにずーつと立てていくんやでな、横向けにしたら焼けへん。丸い窯の中に（木を）全部一回立てて、そ

の上に、天井になる型を作るのに、木をわーっと重ねて、だんだんだんだん短い木を、「ドーム型に積み上げて」格好をこしらえて、その上に、布やら分厚い紙みたいなのを敷いて、土がこぼれんようにして。ほいで、まあ「釜上げの日」は手伝うてくれよ」つちゆうて、気の合うもん三人なり四人なりに頼んで来てもらうて。一日がかりで、相槌を打つていう、それでドンドンドンと。あんなもん、練り土でひつつけたもんではない、叩いて。ほいて、こぼーっとして、それを二回も三回もずーっとして上へあがつて、つぺんまであがつて。「晩までにできたら良い仕事や」言うて。ほいてまあ、窯打ちの日は「一杯しようか」言うて酔うたり、しよつたんやけどな。

火入れから一週間、火をとめて一週間

細見 (その後、焚き口をしつかり作ってから) 燃やしつける。それを一週間燃やさんなんねん。

—— ええーつ (聞き手一同、驚く)

細見 そしたら、燃やしている間に、その奥叩いたつた土が乾いてくるんやでなあ。一番奥に煙道いうて、煙突みたいなあんねやで。煙道いうのは、窯の入り口よりは下にあんねん。それを開けたらあかんさかい、蓋しといて、穴はあいとんやで、下に、上だけ蓋して、(空気を外へ) 引かんように。煙を出んようにしといて、燃やいて燃やいて、一週間燃やいて、ようようと乾くねん。乾いてきたらわかるやろ、土が乾いて白くなつて、

まあレンガみたいになるわあよ。ほつたら「あ、乾いた」つていうやつたら、中の木も随分乾燥してくつて、乾いてきとんや。「これで、べつちようないな(問題ないな)」いうことになったたら、煙道の蓋をとつて、また燃やすんや。ほたら、ぼつぼつぼつぼつぼつて出んねや。せやけど、何が出ても、こいでいくかいかなかは、判断で。コツでみよんやけどな。

—— 職人の勤で。

細見 そや。ほんで、今やつたら機械か何かあるかもわからんけど、まあ、手で煙道んところ手やつて、「あ、こりやあ熱うなつて自分でいきよる、焼けよんな」つちゆうことがわかつたら、もう(焚き) 口を燃やさんと、土を下へ、空気穴だけあけて、土で蓋してまうんや。

でね、炭いうたらね、ずーっと全部(木を) 立ててもな、口からずーっと奥へ焼けていくんやけども、結局は、上から焼けておるさかい、口の方は空気が入つさかい、灰になつていくわけや。で、奥の方は残つていくんや。ほいて、一番下の敷きもん、ここまで全部焼けてしもたら、煙が出んようになんねん。ほしたら、止めるいうて、空気が入らんように、どつこもかも蓋してまうんや。それが黒炭^{くろすすみ}。

備長炭は、小さい窯やけど、その煙がないようになつた時点で、口をとつて、火のまま引きずり出すんや。そいで、土と灰とを混ぜたもんをこしらえて、そいで、消すんやな。これが白炭^{しろすすみ}。

私たちは、焼けてしもたら消して、一週間やつたら一週間おいといて、火の気がないようになつたら、土をとつて、出す。私は今一メートルの木を焼きよんやけど、一メートルが八十センチくらいにもう短くなつとるわ。ほいで、この太さも、大分細なるね。

奥の方はその通りで居るやけども、口の方なつたら、半分炭になつたり灰になつて、人が入れるほど、もう木がない、炭がないなつてしもて。それは、窯の焼く技術と、土によつて大差が出て。土にもものすごい影響を受ける。

土がその、窯におつた土(窯に適した土) やつたら、ええし。窯の講習所の先生もありよつたんやで、その時分は。指導員はん。

クヌギやナラは上木^{じようき}

—— できた炭は、どこで使われるんですか。街へ売るとか。

細見 もちろん、街ばつかしやな。その時分は、昔はやで。ナラやクヌギとかいう炭は、火力が強いきさい、良いし。安い炭は、(灰ばかり増えて) 火力が弱いさかいに手間やということなんや、いうたら。ほでまあ、良い炭と悪い炭と分けるんやけど。クロキ(針葉樹) はな、スギやヒノキは、炭にしてもやわらこうてな、火力が弱いねん。アサキ(広葉樹) にも種類があつて、クヌギとかナラやというの「上木」。ほんで、サクラやらなんやというの「雑」つちゆうて、三手ほど

に分かれとつたんやけど。炭でも区分けして、これはナラ炭、これはクヌギ炭、これは雑、いうて選別して、袋になり俵になり荷造りして出しよつてんけどな。十キロから十二キロの品もんつくつて、出しよつた。

—— (良い炭の原料の) ナラやクヌギを植えたりはしてたんですか。

細見 こころはねえ、植えなんたら、クヌギは育たへんねん。あの三和町^{みわちやう}(現・福知山市) には、自然生えでクヌギが生えよるけどな。こころは、クヌギの木は植えましたよ(※コナラは自生している)。

近年の森林土砂災害に思うこと

細見 そのね、木が大きなりすぎとんねん、いうたら。スギ・ヒノキを植えとんのももちろんやし、山としては、スギ・ヒノキの山よりも、やつぱりアサキ山の方が強いねん、根が。スギ・ヒノキは、ウワネ(上根) で、ばーつとこういうような根やし。アサキは、タツネ(立つ根) で、下へ降りる。ほんで強い。

時代がこういう時代やけど、日本はもつと山を利用して、もつと山を伐つて若返らせてやつたら、山も強いし、獣も山で生活できるし。もつと山を利用したらええんやけど、そういうエライ仕事は、若い人がしてないで、政府が文化政策になつてしもたんで。山をもつと利用せんなあ、つて私は思てまんねん。

山稼ぎいろいろ（炭焼き、薬草、林業） 山師（原木屋）が見た、戦後のヤマと丹波の木

話し手 足立勝己氏（山南町小畑）
日時 二〇一七年七月三日

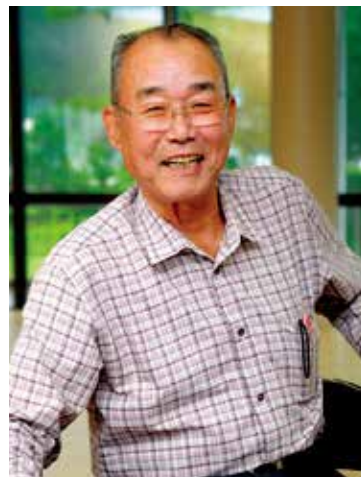


写真 足立勝己氏

山師のシゴト

——そもそも「山師」というのは、どんなお仕事ですか。

足立 まずね、立木を山持ちさんから買うわけですね。

——山にまだ立つてゐる木ですね。

足立 そうそう。昔、私のおじいさんが、木材会社を経営してつて、それで私はそこへ高校を昭和三十五年にあがって（卒業して）、それから就職したわけですね、その会社へ。そこから、監督とかいろいろなことは実際してきてます。で、立木を山持ちさんから買って、そして、人夫さんを都合、つもらして、で、伐採と搬出して。で、トラックで市場へ運んで、そして利益をまあ得よつたわけですね。——その立木があるという話は、どこ

から入ってくるんですか。

足立 それはその当時ね、ブローカーが居つてね。個人の山は、ブローカーが言うて来よつたわけですね。それと、部落山、そういうのはね、入札があつたわけ。それで入札の招待を受けて、そこへ入札に行く。そこで落札したら、その山を潰しよつたんです。そういうわけですね。——なるほど。ちなみに、ご自身で直接交渉しに行くこともありましたか。

足立 あります。そら、私、昭和三十八年にね、豪雪がありましたんやな。それで、うちのその山五木材株式会社いうところに入社しよつたんやけど、それが解散して、それで個人でやりかけたわけですね。それで、いろんな人の山を口頭で商売して、で、今まで成り立つていったわけですね。

——当時はね、材木、山師というのはそんなにうけなかつたわけやね。それでも、今よりはもつとようけあつたけど。ほんで、ちよつとでも有名な山師のそこへは、ブローカーとか、それから入札の通知が来よつたわけやね。それで知つて、そこへ入札に行つたり、ブローカーに言うてもうて、そこで山を買つたり。

——それは、丹波市域だけでなく？

足立 そう、あのもう全国いうたら言い方あれやけど、島根県、三重県、それから福井県、大阪府。ずーっと行きました

な。

——遠方になつたら、その遠方で人のやりくりをするんですか。

足立 いや、それはうちの専属の人夫が居りまして、それを二組か三組抱えてましたもんで。

——そうしたら、その人足仕事は、もうチームでこつちから連れて行く、という形ですか。

足立 そうそう。で、遠いところ、まあ三重県の場合は、ブローカーが和歌山県の人夫ごと世話して、そこで人夫をつもりしたりね。いろいろやりましたな。

——そうですね。では、木を出す先の市場は、それぞれの地元ですか。

足立 いやいや、岡山県の真庭、真庭市の真庭木材。これがうちの一番、主ですわ。それと、奈良県の西垣木材。それと、三重県の松阪市の松阪木材。この三つが、うちの主な取引先でんな。ほして、まあ、端材がありますやろ、先つぽの方の端材。あれは、この辺の柏原とか卸しよりまして。たわ。実業の山崎木材とかね。そういうとこ卸しました。

——そうしたら、それ全部ひつくるめてのご商売なわけですね。

山の価値を見極めて、入札、価格交渉

——人夫さん二人なり三人なりで伐つてもらうんですか？

足立 人夫のグループは七、八人のひとつの組やないと、商売なりまへんわ。

——七、八人で伐りに行くんですか。
足立 うん、「伐り」と「出し」とね。

——そうになると、どれくらいの面積が最低限必要なんですか。

足立 ま、最低限は、この丹波地域やつたら、一ヘクタールでもいけるけど、やっぱり泊まりで行くんやつたら、最低三ヘクタールぐらいやな。

——なるほど。

足立 そやけど、五十八歳までは、材木がもう付加価値が高かつたから。そももう、三町、四町いうたら、五、六千万の金額でしたな。

——何日かかるもんなんですか。

足立 そらもう、山の状況によりますわ。ウインチ一線で行くんやつたら、しれてるけど。千メートルほどの山がありますわな、そしたらワイヤー千メートル張つて、二段で出してくる場合は、何か月もかかりますな。

——そうになると、現場現場で、かかるコストも日数もかなり違うんですね。

足立 みな計算して、ほいで買うわけですね。その買うときにはね、まず毎木調査。個人山の場合は、一本一本木を測つて、ほいでこれだけの値打ちがあるな、いうことを計算して、それで金額出すわけですね。そやけど、営林署とか、県行造林とかは、大体向こうが調査して、資料が来まんねん。そしたらもうこれは、八掛けに、営林署やつたら八掛け、県行造林やつたら六掛け。もうそういう大体あれ（相場）がありまつかいに、そういうあれでやつてましたな。

昔はあんまりなかつたと思うんやけど、環境の問題が知らんけど、加美町

の県行造林を買ったことあんのやけど、そこは枝虫(注①) いうのが入りまんねん。それは見えまへんわな。伐らな。枝虫があつたら三分の一ぐらい、値段が下がるさかい怖いで。

—— 枝虫というのは、枝から、切り口から入るやつですか。

足立 枝のね、枯れ枝から入って、ずーっと浸透していきまんねや。若いうちに枝打ちがしてあつたら、入らへん。私ら若い時はなかつたように思うやけど、最近はおつたような気がするな。

注① 枝虫は、主に、スギノアカネトラカミキリの幼虫。

木を出すために、想定外のコストも

—— 他に、困ることはありましたか。

足立 困ることはね、当時は木が高かつたから、その搬出路やね。ワイヤー張って出すんやから、千メートルほどの山もありましたわ。そしたら、搬出路に障害木がありますわな。それをね、交渉するのが、一本一万円とか言いまんねん。今やったらもうほんまにタダみたいなんもんやけど、当時は木が高かつたからね、その障害木の費用がね、よう要りましたな。思わん費用がね。

—— どけるのにお金がいるんですか。

足立 それを伐採して線を張んのにね。それは、ちよつと計算以外のお金がいっぱいしてましたな。

—— そのどかしした木自体は、どちらのものになったりするんですか。

足立 それは私のもんやけど、どかすい

うのは大体若い木やから、もう(売りものには)ならんかつたね、ほとんど。「ほんなん出さへん」言う人もあるしな。「金もうても、通つてもうたら困る」言う人もあるし。そこはもうこれで話をせんなん、一番それが困りましたな。そら、千メートルいうたら、大勢の持ち主のそこ通るまつさかいな。

—— ワイヤーが空中通ることにもお金がかかるんですか。

足立 いや、それはいりまへんわ。支障木さえ伐つたらね。そらあ、その交渉が一番大変やつたな。山は買いたいし、買った以上は、私の責任で搬出をする経路を私がみな交渉していかなあかん。絶対あかんいう人も居るさかいね。そしたらコース変えないかんやろ。そらもう、それが一番辛かつたな。

丹波市内にも、良質の木があった

足立 岡山へずつと持つて行きよつたら、「丹波のヒノキは良え」つて言うてました。

氷上町の葛野も、土がええ(良い)とこやな。木がええとこや。葛野の清住とか、あそこらはスギでも、ええスギができまん、目合いもそんな大きないし。ヒノキも、ええヒノキができよつたね。

市島町の市の貝あたりはええマツがあつて、ほいでそのときは、当時はマツのね、杭木。尼崎の方でその会社があつて、よう杭木に使いよましてん。今は、パイルみたいで打ちますやろ、その代わりにマツを打つ。

—— 海で使うんですか？

足立 海です。海でも川でも。そいでね、長さ八メートルで直径三十センチくらいなマツ。それを、ようけ尼崎に持つていきよりましたな。

それと、乾燥電柱(スギ材)。あれが、私らのときはごつたう盛んで。それで、山で伐つて、皮剥いて、で、杉皮は杉皮で売つて。それで、山で二か月ぐらい寝かして乾燥させて、そして出して電柱にして。ほいで、あそこ、石川県とか名古屋とか。四国、坂出の方へ送りよりました。それも、貨車でね。谷川駅から貨車積みして。もう最後の方はトラック輸送になりましたけどな。

—— その電柱のスギの長さや太さは？

足立 いろいろありまんねん。十六メートルが一番太かつたけど、規約があつて、地際(じさい)うて、地から上がつたところの、一メートル五十センチで直径何センチないといかんとかね。いろいろ規格を、その電柱会社が言いましてな。それに合うもんを持つていかないかんの。そやから、難しかつたでんな。

一番小さいので、六メートル。一番長いので十六メートル。そやから、貨車でねえ、トキとかトラとかつてありまっしゃろ、トキいうのが一番長いんやけど、トキいうたら十二メートルまでしか積みまへんねんな。ほたら、十六メートルいうたら出まっしゃろ。ほしたら、そこに有蓋車(ゆうがいしゃ)いう貨物があつて、そこへこの伸びたもんを出してね。ほして、石川県らへよう送りましたね。

ロープをいろいろしたり、その規約があるんやね、いろいろ積むのにね。ほしたら、雨降りやつたら、向こうで途中でこつと出たり。それなら、「直しに来い」言うて。途中、駅まで直しに行つたり。ありましたね(笑)。

—— それもすごいですね。

足立 電柱はね、何年ぐらいいまでだったかな。私が四十二、三ぐらいのときやから、昭和十六年やから逆算してもうたらしいけど、その時分までは、乾燥電柱が売れよりましたな。

その電柱、うちが送りよるその、大日本木材防腐いうて、まあ株式に二部に上場しとるけど、名古屋の。その会社は坂出にもあるんやけど。しまいに、台湾に輸出しよりましたな。

—— じゃあ、丹波産の電柱が台湾に生き残つてるかも知れない(笑)。

足立 昔ね、電柱の株に炭でね、屋号を入れよりましたんや。で、うちはね、山に五と書いた屋号でしたんやな。私のおじいさんがしとる時分ね。それがね、神戸の方でね、こんなん出て来たで、いうて、建て替えのときに。これが残つてね、炭やから。腐らへんねやね。それが残つてね、うちへ持つて来てくれた人がありました。

—— なるほど。山師はいつごろまで？

足立 五十八歳まで。六十歳頃から、木材も安くなつたので、県と国の認定を取り、森林施設計画の認定を取り、間伐や枝打ち事業(造林業)を始めました。

山稼ぎいろいろ（炭焼き、薬草、林業） さんばくち 村の各戸が、共有山で稼ぐ

話し手 山本とみ子氏

（青垣町稲土出身、大名草在住）

聞き手 長井克己（青垣町在住）他

日時 二〇一七年二月十三日



写真 山本氏（中央右）、長井氏（中央左）

さんばくち

山本 さんばくち、山の畠の地。

長井 ひとくちで言えば、「五十年間、この山をお前とこが管理せえ」と与えられた。で、木をして（植林管理の山稼ぎ

をして）。それからまた集落へ返す、という話。

山本 荒れ地をね。で、今、四次まであるんです。さんばくち、いうのは。

長井 証書があるらしいんです。

—— 初めて聞きます。

長井 初めてやろ。そういう集落ですわ。

—— 村から発行されてる？

山本 ほんで、区長さんの名前で印鑑が押いたあつてね。どここの山、何年まで、というような感じで書いてあるんです。

長井 五十年というのは、まあ五十年で

木い売つて、それでまた整理をしようかいな、つちゆう（ていう）区切りなんやろな。それは山本さん、大名草の集落の全戸がそやつたか。全戸にそういううな？

山本 証書ですか。

長井 証書いうか、貸し付け。全部の家、大名草二百軒やつたら二百軒ともにそういう山を分けてもらった？

山本 そうです。そや思います。

—— それは、植林ですか。

山本 植林。それ、もらったとこに、木を植えてねえ。ほんで、大きくなって何年か経つたら、かやす（返す）とか、売るとか言うてね。今もう、山もう木い売れへんで（笑）。もういらん、いうてみなかやす人が多いです。

長井 そのときは、雑木林やつたんやな。ほんで、自分とこが伐つて植え込みをし

てという話なんやな。

山本 そうそう。で、もう私らは、おじいさんとこう、どういふんかな、掃除して、ほんで植えて。植えんのも、自分で植えられへんから、集落の人に植えても

うて。

長井 手伝うて来てもうたり。その証書はどうじやいね、一から四まであつて、なんぼまでは山本さんとこあつじやいね？

山本 うちたぶん、二やね。三と四と

あると思う。一は返（かや）して、二もかやす言うて預けとうさかい。

長井 四回に渡つて、そういうこと、集落がやつてきとつてんやね。

—— それはもう別々の場所ですか？

長井 別々の場所。

山本 まあこうひとつ大きなのがあつて、なんぼかにわけてね。と思います。私もはつきりしたことは知らへん。

—— そのさんばくちは、大人になられてからですか。

山本 もう私がお嫁に来てからは、ずっと前からあつたんやからね。五十年のいのんが、あれもう返してから十年にもならへんやろな、主人が亡くなつてからやつたで。

長井 嫁いで来てやつたときには、もう、一は自分とこの、嫁ぎ先の権利になつとつたんやな。

山本 なつとりました。

長井 はいで、それから、一遍は売つとつてんじやわね、嫁いできてからその家の分の木を。

山本 木はね、たぶん売つとつてやろと思うんです。せやけど、さんばくち、いうて、どういふんかな、グループでね、五人か六人かグループでひとつ持つとるやつと、それから家に貰うとるやつとあるんです。

長井 わかるわかる。（グループで持つのは）お講みたいなものじゃな。仲間内でお講みたいなもの持つとつて、「お前とこの子がここの部分持てや」いうようなもんやないか。そういうなん多いで、歴史的に多いで。

山本 たぶんそうやないかと思っています。まあ一応は、四人か五人で持つてね。ほいて、掃除に行くとか、これがあるさかい売ろか、という話は五、六人でこう集まつて。うん、と思います、私は。

木を売って、村からお小遣い

長井 次、お小遣いの話をしたらどうや。

山本（笑）それこそ、五十年前にね、私がお嫁に来たときに、お正月前になつたら、村からお小遣いが貰えよつたんですわね。一軒に、なんぼやつたやわからへんのやけど、お小遣いくれよつちやつたんですわね。印鑑持つて行つて。村全体が。貰うて、そのお金はどないなつたや知らんけどね（笑）。各戸、みな貰いよつたんです。

—— それは、当時からすでに村の山に育つた木があつて、それを売つて、ということですね。

山本 そやね、昭和三十二年か三年頃ですわね。

長井 そんなもんやろな。

—— 逆に言うと、山の管理は、村日役として、村人総出だったんですか。

山本 そうです。

義父が柴を束ね、私が背負って降りた

山本 おじいちゃん（義父）も山へ行きよったから、それについて行つて、山仕事を手伝うた。

—— その山仕事は、木の世話とか、柴をとつて帰つたりですか。

山本 そうです。最後に登つたんは、地あけてね、ほいで、それを植えんなんでねえ。それを植えんのは、近所のおじさんに植えてもろて、三人か四人に植えてもろて。私は、たきぎを持つて帰つたりはしよったけどね。

—— 地あけというのは、植林準備ですか。

山本 細い木がね、あるのを刈つて、太い木も倒しては、しよりました。

—— それを燃やしたりしたんですか。

山本 いや、燃やさんと、たきぎにして、束にして持つて帰つたりはしました。大きな束してもろてね。

長井 どうして持つて帰つた？

山本 背負うて（笑）。

—— 背負うてですか、すごい。

山本 山から降ろして、山、川があつてね、ほいで、田んぼがあつて、道まで相当あるんですわね。

長井 その道までは、背負うて？

山本 背負うて。私一人で。おじいさんは（随分と）大きな束してやで、「おじいちゃん、もつと小さいのにしてや」つ

て（笑）。

長井 わかるわかる（笑）。

山本 ほつたらね、「おおよし」つて言うといて、ほたまたこんな大きななつて（笑）。「重たいのによつて持つて帰らん」言うて、川渡らんなんに。

長井 そつからはどうして家まで行きよつたんえ？

山本 そつからは、荷車なんかで。牛ではない。荷車やないかな。

長井 鉄車てつぐるまやな。

山本 そやね、今で言うたら。（女性では）私だけぐらいやろで、そんなしとんのは。みんなそんなことはしとつてないです。私は、おじいちゃん、年寄りのところにお嫁に來たから、なんでもせんなんと思つてしただけでねえ。

長井 家に柴小屋しばこやいうのはなかつたか。

山本 ありました。

—— 柴小屋というんですか？

長井 柴小屋いうんです。今でもその、たきぎ小屋、たきぎ小屋、たきまや、言うけど、昔は柴小屋、柴小屋つて。柴が主やつたんでね。そんな、割り木なんかあんまり使うとおへんのでね。せやからおそらく、その話や。

山本 もうほんまに大きな、こんな（一抱えほどの）大きな束をね。私も、どいううか、あれやつたんでね、あそこからここまで持つて出るのに、ひとつ持つて帰るか、ふたつ持つて出た方が早い、思うて、いっつもふたつ持つて歩いた（笑）。「頼むさかいおじいちゃん、小つそおしとくれえな」いうて言つ

たら、「よし」言うて（また大きい束をつくる）（笑）。

長井 おじいさんは、そのたきぎ、焚きもんをつくつて、山本さんは、作りはせなんだ？

山本 私は追い出し役。

長井 追い出し役。運び役（笑）。

山本 山降りたところに川があつて、川はまあ丸太の橋があつて、そこを負うて。そういうことはしました。

—— 映画みたいですね（笑）。

山本 そうや（笑）。

—— 昔の柴小屋はどれくらいのスぺースやつたんですか。

長井 あれは大きいで。

山本 うちら、そんなにようけ積んどおへんだ思うけど、どこや、あつちやこつちに積んどつたんかもわからへんし。軒下にね。うまい具合にこう積んで。

長井 柴小屋持つとるんは、大概、独立した柴小屋ばかり持つとつたもんでね。いわゆる倉庫つちゆうようなしろもんではないので。せめてこの会議室の半分ぐらい（四、五畳）はあつたんやないかな。

山本 そら、一間ほどは丈ね、あれ（収納）せんなんから。

長井 （柴は）わりあい長いでね。

山本 丈が長い。

長井 最終はこんなぐらい（四、五十センチ）になつとるけど。

—— 持つて帰るときには一メートルや一メートル半、二メートルはないですか。

山本 ニメートルはない。

—— 長い柴を束ねて持つて帰つて、そのまま乾かしとくわけですか？

山本 積んでね。

—— ヒノキやらスギの枝払いしたやつも、柴で持つて帰りました？

長井 枝の方持つて帰つたね。

山本 太いのは太いので別に割り木にしてね、持つて帰りよりました。

一升炊きでも、二十分ほどで炊ける

—— 焚くときには、別にその針葉樹やら広葉樹やらといつても、あんまり関係なく使つていたんですか。

山本 なし。それでご飯も炊きよりましたしね。家の中でかまどで燃やして、炊きよりました。

—— ご飯を炊くとき、柴で炊くと、どれくらい時間かかるもんなんですか。

山本 あれ、わりあい早かつたんちがうかな。二十分ほどで炊けよつたんやうかな。わりあい、勢いがあるから、早う炊けると思ひます。昔、今みたいに二合や三合いうて炊かへん、一升ほど炊いてね。

—— 一升炊き一回で食べるわけじゃないですやね。一回で食べてましたか。

山本 私は、子どもの頃はね、弟や妹が居つて六人（兄弟）。お父さんとお母さんと家族で七、八人ぐらい。ほんでに、こんな鍋で炊いても、朝ご飯食べてお弁当入れたら、もうお昼にないぐらいでした。

山稼ぎいろいろ（炭焼き、薬草、林業） 山林八百町歩 子どもが駆け回れるほど、山が綺麗になるしくみ

話し手 飯谷幹夫氏（柏原町上小倉）
日時 二〇一八年七月二十三日



写真 飯谷氏（前列中央）

柴刈り二・三反で、一軒の一年分

飯谷 まあ戦時中いうたらね、まず山行くと、スギの葉っぱやら、コクバ（マツの落葉）つちゅうんやけどね。コクバさせ、つちゅうのをしよつたね、コクバさせと、それから、雑木をね、八年か十年に一回伐って、一軒に二・三反ほどの、

これぐらい（直径十センチほど）の木を伐ったら、焚きもんになつてね、一年間暮らせるんですよ。

——なるほど、二・三反ですか。

飯谷 それがね、昭和三十五年ごろまでやったかな、続いたのが。それから、石油やらプロパンガスやらが入って、徐々になくなつていた、というような形跡ですね。それから、戦時中はね、私んとも山が五十町歩あんねやけど、山に松の木が生えとるでしよ、マツの木は二百年、三百年経つたようなやつは、こう筋を掻いてね、松根油を採るんですよ。それで、何に使うんやいうたら、飛行機の燃料やというけど、まあ僕もちよつとエンジン屋なんですよ。エンジン設計しとったんです。そんでね、昭和四十八年に石油危機が来たでしよ、私の上司が海軍の軍人やつてね、ほんで、「おい飯谷君、松根油って知つとるやろ、あのときの調査してこい」つて言うんですよ。調査しに行ったんですよ。京都大学、長尾先生（長尾不二夫・動力熱工学）つていうエンジンの大家が居つてね。ほんで行つたらね、アカンのですね。

——使えない？

飯谷 使えない。松根油つていうのは。それから、ヒマワリのタネやか、まあまあそういうようなもんもね、やつとつたけど使えなくて、そのまま、研究その

まま、お蔵へ入つとつたんやね。その松根油をね、僕らが、僕は（昭和）十九年に小学校へ行つとつたんや。十九年に小学校の一年、国民学校やつたけど、当時は。国民学校の一年生で。ほんで、六年生がね、缶カン持つてね、松根油を。山へ行つて（木を）傷つけて（缶で受けておく）。今思うたら、・・・アホみたいな話やけど、そのときは真剣やつたんや（笑）。もうなんにも知らんからね。

——必死になつて集めてたんですか。

飯谷 うん、そうです。これぐらいの太さ（一抱えほど）の木にね、松の木に、三本ぐらいこう。

——なんか漆掻きみたいな感じのあれですよ。

飯谷 うん、漆するみたいにしてね、ほいで、この缶をさげてね、ほんで、松根油をとつとつた。

同じ人が落札するから、山が綺麗になる

飯谷 ここはマツタケが生えなくなつたのが、昭和四十二、三年頃かな。四十二、三年頃まではマツがあつてね。昭和五十年になると、松くい（虫）が入つてね。軒並み、マツの木があかんようになって、マツタケがあかんようになって、入札もなくなつたし、マツタケの入札がね。

——村で入札があつて、山止めですか。

飯谷 九月三十日から十一月十五日までは。僕とこの山、先ほど言うたように五十町歩もあつたんやけど、たくさんあつたんやけど、マツの木が生えとる山は

入札に出しとるからね、そこは地主でも入られへんねん。

——そういうときは、地主さんは、入札山で落札されたら、お金を貰う側になるんですか。

飯谷 そうそう。半分は貰つて、半分は部落の運営費に寄付しよつたんや。まあ他の部落は知らん、上小倉は。僕とこの母親の里は前山（市島町）なんやけど、前山は、一山は、地主の自由に採つて良い山があつたんや。せやけど、柏原はそんなんはなかった。

——本当に村ごとに違うんですね。

飯谷 村ごとに違うんや。そういう、ここは村のシステムやつたんや。

——マツタケ山を、そしたらご自分の家でも落札したんですか。

飯谷 いや、僕とはもう、受けたことがない。もうみんな、人にとつてもうて。そしたらね、山も綺麗になんねや。山もね、コクバもさしてくれるし、雑木なんかも切つて綺麗にしてくれるんや、入札で受けた人が。受けた人が山の管理してくれるから。

——それは、管理をしてくれるのは、いつの時期なんですか。

飯谷 そやから、九月三十日から十一月十五日まで。その間にマツタケを採りながら、雑木も処置してくれる。

——そしたら、落札した人は、マツタケと、コクバやら雑木の燃料やら、両方ひつくるめてもらつていきはるんですね。

飯谷 まあ、マツタケの入札料は、その雑木やらそんなんをとる費用には入つて

ないけどね、それは地主がサーブスで、掃除してもらってるんやからね、良いから、そういう風になってたんや。

—— そうなんです。

飯谷 そやから、もう山が綺麗やったよ、昔は。僕らが子どものときに山へ入ったら、そんなもん、山道やない、もう、山道というか、マツタケ採りに毎年、毎年入札する人はおんなじところを入札するようになつとんねん、大体。そやから、もう人が入れ替わり立ち替わりやないからね、AさんやつたらAさんが、その山はいつも毎年毎年入札して落しとるから、そやから、綺麗になつとんねや、山が。

そら、普段のときは、入ったらいかんもん。山の木も、ヨソの木やから伐つたらいかん。伐つたら、まあ罰金つちゆうようなこともないけど、せやけど、村の人が見とつて、「あそこ、飯谷さんそこ、山いらいよつてんですか（森林作業をしているのか）」言うて聞きに来た人あつたもんね。いや、うちはいとおへん、言うたら、「どここの人が入つて伐りよつてでつせ」言うて（笑）。

—— うち（春日町）なんか、雑木も全部入札やったそうですよ。

飯谷 いやいや、雑木林も入札があつたんですよ。雑木林としては、雑木専門の林として、僕どこも何町歩かあつたからね、そこは、さつき言うたように、二、三反ほどね。一軒で二、三反ほどの山を入札してもらつて、買つてもらつて。それがね、僕とこはね、石生（氷上町）の

人まで来よつたね。

—— 石生の人ですか？

飯谷 石生やら柏原町内の街の人やらね。

——（自家用の）一年分の焚きもんつていうことですか。

飯谷 うん、焚きもん。そやから、二、三反を十年分いうたら、二、三町歩やね。二、三町歩を順番に受けるようになってつたんや。その家が順番に、もう買う人が決まつててね、ここ済んだらここ、ここ、いうてちゃんと綺麗になつとんねん。せやから、山がAさんならAさんがほとんどそこをやるからね、せやから綺麗になんねん。いろんな人が来たら、やり方がいろいろでね、ぐちゃぐちゃになるけど。

—— なるほど。

共有山管理組合で入札

飯谷 小倉はね、上下小倉（上小倉、下小倉）で八百ヘクタールぐらいあんねん、八百町歩ぐらい。その半分、四百町歩が共有山管理組合いうて、僕も名刺に書いてつけど、上下小倉共有山管理組合が持つとつたんや。そこが入札してね、そういう焚きもんの足しにしよつたんや。（落札した人は）一日に（柴の大きな）束を三つか四つぐらい、山高いところやからね、降ろして持つて帰んのに。

—— 大変ですね。

飯谷 大変やで（笑）。チエーンソーないし。ノコギリとナタで。

—— 八年、十年で木の太さは？

飯谷 太くても十センチやね。ほんで、

太いとこは炭にしてね。山で炭にする人も居つたね。炭焼き小屋いうて、土でつくつた、蒸し焼きの炭窯や。瀬戸もん焼くみたいな窯がいんねんや、炭作んのには、ああい窯がいんねん。せやから、窯を山につくつとつてね。山でその木を切つて、そこで蒸し焼きにして、ほんで持つて降りよつたんや。

—— 炭焼きするのは專業の人たちだったんですか。

飯谷 部落の中で、そういう専任でやつとる人が居つたんやね。

—— そうやつて焼いた炭は、どこに売りに行くんですか。

飯谷 自分たちで使うというか、炭が要る人は、火鉢に使うんで、炭が要るやろ。

—— 青垣では、福知山へ売りに行つてた、という話も聞いたんですけど。

飯谷 そこまではしてないと思うよ、柏原では。柏原の街の人が大勢あるからね。

—— もうそこで十分、消費地をちゃんと抱えていたんですね。やつぱり、城下町で人が多いんですね。

山の変化、そして現代へ

—— そうした山が変化したのは、いつごろからですか？

飯谷 昭和四十年に松くい虫が来て、マツが全部枯れたでしよ。そしたら、スギ、ヒノキを植えこんだんやね、皆さん。いやそれが今、四、五十年経つてね、ええ木になつてんねやけど、管理ができへんやね。地籍調査でも、僕が全部山を歩いて、「ここがお前とこの境やで、ここ

がお前とこの境やで」言うて決めんなんからわからへんぐらい、持つとる人もわかつとつてないんや。

植林した時は一メートルか一メートル五センチに一本植えとんのやけど、それを、生育したら、五分の一にせなあかんといひますね。そんで、間伐が行き届かないと、山崩れを起こすんやね。いや、間伐したからといって、必ずしも山崩れ起こさないか、いうたらそうでもないんやけど。でも、今は間伐してないから、下がもう、草が生えてなければ、雑木も生えてなけりや、土が見え見えになつてね、保水力がなくなるんや。

上下小倉の財産管理組合の山、四百町歩。そこへみんな、日役に出てね、やりよつたんや。ほんなら、僕の先の組合長が、もう人集めるのに困つてね、ほんで、間伐が思うようにできへんねん。日役かけても、五人やら六人、ノコギリでやつても、一日に十本も切るか切れへんかぐらいで、そんなもんで四百ヘクタールの山、整備できまへんやろな。

で、間伐、僕が組合長のとき、平成十五年ぐらいにその制度（国などの間伐助成金制度）ができたんかな、民林も含めて八百ヘクタール、全部間伐したんや。五年か・・・八年ぐらいかつたね。その間伐して十年ほど経つとんのやけど、上下小倉は水害が出えへんね。それしたから出えへんのか、せんでも出えへんのかわからんけど（笑）。とにかく出ないわ。

六章

里山こぼれ話 木炭バスのために客が歩く?!

【倉本英一氏／山南町和田】
エンジンかけるのに一時間

倉本 その当時のガスいうたら、石炭でもなんでもないねや。木の、雑木を伐ったやつを小そうにめんで（割って）ね。それを燃料にして。エンジンかけんのに一時間ぐらいガラガラガラかけんねん。そんなバスでした。

【大河孝氏／柏原町石田】
「お客さん、押してくれえ」

大河 私は戦時中、学徒動員いましてね、今の柏原高校ですけど、前の柏原中学校ですけど、柏原中学校の四年と五年は、西宮へ飛行機のおつくりで動員されたんです。「もう勉強はどうでもええさかい」言うて（笑）。そやけど、勉強もしようしませんでしたな、その頃は山行きばかりで。山行つてね、焚きもんして、炭こしらえて、その炭でバス動かしてね。バスも、ガソリンがないさかいに、炭で、ガーガーガーいわして、火をいこして、そのガスで動きよりましたんや。そやから、坂はあきまへんねやな。ほしたら、「お客さん、押してくれえ」言うて（笑）。・・・押したら、ブルンブルンいうてかかりかけて（笑）。そういう時代でした。



写真 鐘ヶ坂峠 明治のトンネル

【飯谷幹夫氏／柏原町上小倉】
鐘ヶ坂峠では、客が歩かされる

飯谷 ここ（鐘ヶ坂峠）に明治のトンネルと昭和のトンネルと平成のトンネルとできとるけど、明治のトンネルは明治十六年にできとんねん。それから、昭和四十二年に、今の二代目の昭和のトンネルができて、平成のトンネルが平成十七年にできたんやけど。その明治のトンネルね、明治のトンネル、この鐘ヶ坂の峠、バスがガソリンで動かないんやで、当時は、戦争中。木炭車や。木炭を、木を蒸し焼きにして、それからガスこしらえて、それをエンジンにひいて、それを燃料にして走るバスや。

—— パワーもないですよね。
飯谷 パワーがないねや。パワーがないつちゆう話をしよう思うて。鐘ヶ坂の峠へ行ったらね、お客を降ろすんや（笑）。
—— あ、軽くして（笑）。

飯谷 ほんで、トンネル越して、向こうまで行つたら、トンネルは柏原側に下がつてとんのやで。柏原側に下がつとんのやけど、篠山側へ越えたら、下りやねん。だからそこまで、途中で降りて、歩かれんねん（笑）、当時。小学校一年生、二年生のとき、篠山まで、篠山の親戚へ行くのに、歩かされよつたわ。木炭車な。タクシーも木炭車やつたよ、当時は。
—— タクシーも降りたんですか。

飯谷 タクシーはまあ、どないしよつたんか知らんけど、バスは降ろされた。せやけど、軍の、日本帝国軍は、全部ガソリン焚いて走つとたんや、当時。

—— そっちに、やつぱり力を注がないと。
飯谷 そっちに力を注がんとあかんから（笑）。
—— 民間に油がまわつて来ない（笑）。

里山こぼれ話 天秤棒で峠越えした時代

【細見具康氏・眞也氏／春日町野瀬】
天秤棒で赤ん坊を乗せて山越え

細見（具） 昔は（集落奥の山を）越えて三和町（現・福知山市）行つとつたんやで、家内が来た頃は。親父が一荷担（いっかた）ちゆつて赤子を前にして、ウラ（背中）

に荷物をして、棒でにろて（担つて）送つてくれてん。子どもは前のかごに入れて、荷物は後ろで（笑）。

細見（眞） 天秤棒やで。

細見（具） ようは、車ではまだ行きようへんだ時代。

細見（眞） まだ三春峠がないんやな、その頃は。

細見（具） まだ三春峠はあらへんで。細見（眞） ないから、うちら京都方面へ行くのに、この（奥の）山を越えて行きよつてん。



地図 春日町野瀬と三和町付近地図（国土地理院 地理院地図より改変）

里山こぼれ話 峠越えて遊ぶ、無尽蔵な体力



図 山南町小畑、加美区箸荷付近
(国土地理院 地理院地図より改変)

【足立勝己氏／山南町小畑】 おばたけ

峠越えて加美町へ、野球して帰ってきた

足立 私とこの家が山の近くやから、で、小さい時いうたら、みんな山へ上がりよったがな。私らのこまいときはな。彼岸の中いいうたら、山へあがる。

—— 日天さん？

足立 それが、あれやったら、加美町（現・多可町）の方へ遊びに行ったりな、山

には馴染んどったな。加美町よう遊びに行きよった。その彼岸の中いいうたら、みんな山へ上がりよったがな。私らのこまいときはな。彼岸の中いいうたら、山へあがる。

—— 疲れないんですかね（笑）。

足立 そやけど、疲れたいうことはない。子どものときやもん。疲れるなんていう発想あらへんで（笑）。

—— 野球して帰ってくるなんてめっちゃ大変。

足立 子どものときやもん。

—— それは小学校、小学生ですか。

足立 そやね。そやから、その時分やらね、加美町とね、うちらとはその、縁嫁さんがよく来たりしとる。

—— ああ、そうですね。割り合いこの加美町から貰われとる家は結構多い。

足立 うちの奥、西谷いう村があんのやけど、そこはな、昔鉾山があつたや。黄銅鉾があつてね、そこで、鉾山で黄銅採って加美町へ持って行ったりね。で、

加美町から鉾山がその西谷まで続いとつてね、で坑道があつて、今でもあるけど、まだ風がふうふう、そこへ行ったら坑道へ行ったら、加美町からの風がふうふうと来ますわ。

—— へえ、すごい！

足立 そやから、ようそこに、鉾山の人

が黄銅鉾をかます（注①）に入れて、穴

みたいなとこ置いとつたや。うちらは川がないさかいに、ホタルが居らへんか

つたから、その黄銅鉾を、下の方の村の人に、ホタルと替えごしたり（笑）。ようこまいときしよつたな。

—— （聞き手一同、驚き）。黄銅鉾は、キラキラしてるんですか

足立 そうそう。そやから、帰りがけにね、加美町行つて帰りがけに持つて帰つてね。

—— 小畑から、加美町はどの辺の村へ？

足立 はせがえ（箸荷／はせがい）。ちょうど西谷から降りたらそこに行くんや。道がついとる、みんな。昔の人が通うて行きよつた道がな。

注① わら製の穀物を入れる袋（四ページ写真）

【大河孝氏／柏原・新井小での話】 月が出るまで学校で遊んだ後、峠越え

大河 石戸つちゆうとところがあるんですけど、石戸つちゆうところも開拓地のひとつで。そこで生まれた子どもは、やっぱり校区が新井やさかい、新井まで来な

しやあないわね。それには峠を越さんなん。ようあんなことしよつたな、思っただけんな。ほつたらその子らは、帰つた

ら仕事させられて遊べしまへんが。学校でやつたら遊べししね。そやさかいね、

遅うまで居るんだ（笑）。そしたらね、もう遅い、ほんなもん、あの子らはと

にかく、暗なつたつて、峠越えんのをな

んとも思つとおへんのや。

—— なるほど。

大河 で、あの時分は、怖いもんは、おへんさかいね。今のよう

に、あんまり居れへんだんですわ。そやかい、いつまでも居るんじやわね（笑）。お月さんが出るような日、良い天気やつたら、お月さん出てくるまでも平気で居んねやね。ほんなもん、もう、それぐらい元気は元気やつたんやけんね。そやけど、毎日その峠越えてこんなん。大変やつたけどもね。その子らは、そないして来ましたわ。

—— すごいですね。

大河 そしたら私（担任教師）は、家庭訪問うてね、行かんなんがやる。そら、その峠越えて行かな。またあの時分はね、自転車ややつとぐらいいで、オート三輪やとか、ああいう、それから自転車の、あれバイクスクルつちゆうんかいな、自転車にモーターがついて。そんなんがまだなかつた時分やさかいね。そやから、やつぱ歩くしかない。歩くか自転車やない。ほいで、家庭訪問いうたら家へ行かなしやあない、行くのやけど。そしたら、あの子ら喜んでな（笑）。先、先、先、行くのやけど、早う来ないな、いうて（笑）。そんなんもう、（大河氏が）「えろうて行けへんがいや、休もうかいや」いうて、（子どもが）「もうあかんあかん、後ろから押したげつさかいに」いうて腰をほんまに押してくれてね、あがつたりしてね（笑）。でもね、峠越えて私らが行かしてもらうのはね、嬉しかったやうでつせ。そんなことがありましたわ。あの時分のあの石戸から来る子は、ほんまに元気やつた。

里山こぼれ話 適材適所と、木を運ぶテクニック



写真 ホオノキの花

【吉見和己氏／市島町上垣^{うえがひ}】

ホオノキは鎌の柄、カシは山の道具に

吉見 ここ木工しとったんや（木工所）。

あのな、私は通信教育を慶応で受けてったんや。それで夏はスクーリング、四十日間は東京行かんなんやろ。なんか仕事せな、学費が出ん。ほんで木工で鎌の柄をしようたんや。それがよう出かけてな、ほんなん、夏四十日間行つてもうとつたら、夏一番忙しい時期なんや（笑）。得意先から苦情が出て鎌柄を本業にしたん

や。今なんかもう斜陽産業になつてしまつて、鎌なんて作つてん人は、お年寄りの他あらへんねん。その時分は何十万本いうて出よつたんや。

——その当時は、ここらの山の木を使つていたんですか。

吉見 この辺のもやけども、もう戦時中に伐り倒した後を植林（針葉樹）したさかいな、ほとんどそういう雑木^{ざつぼく}がなくなつてきてん。そこから、ホオノキは寒い方、北海道やら秋田、青森。カシ（樫）やシイは宮崎とか、あつちの方（から仕入れて作つていた）。

——鎌の柄はホオノキとおっしゃつていましたね。

吉見 うん、ホオノキや。今も梱包して岩手から来とるやつが（ホオノキの木材を仕入れている）。もう私は一応廃業したんやけど、ちよいちよい言うて来てん人には、「したつてもよいで」言うてや、「ほな元氣な間はしよか」言うて内職がてらやつて、ほんまに氣楽な、集金にも行かへん、注文取りにも行かへん。電話で来たやつをするだけで。ま、ほとんどは百姓ですわ。

——カシは、何に加工したんですか。

吉見 カシの木は、堅いさかい、重たい。せやさかい、トビ（注①）やとかキガマ（木鎌^{注②}）やとか、そういう山行き用のや。もうほとんどあらへん、今は。まだ三年か四年ほど前は、いつかど（相当）かたまつて（需要が）ありよつたけどな、今はほとんどあらへん。

——そうですか。

吉見 今はそんな重たいもんをする人がなくなるや。使う人が年いつたやろ。——昔は、ここらの人も、そういうたものを持つて山に入つたんですわ。

吉見 そやそや。こころ植林した当座は、年に一週間から十日ほどは、日役^{ひやく}いうて、下草刈りに行きよつたんや。今は半日の日役でもぐずぐずぐず言うさかい（笑）。

注① 鳶^{とび}口とも呼ぶ林業道具。トビのくちばしのようにとがり曲がつた先端を丸太に突き刺して丸太を動かす。

注② 枝払いなどに使う厚手の鎌



写真 上から造林鎌、トビ、木鎌、稲刈鎌

【足立九一郎氏／青垣町山垣^{やまがひ}】

野干^{のぼん}した四メートルの木を担いだ

——木を運び出すときは、専用の人がいたんですか。

足立 まあそら材木出しばかりでな、専用の人も居つた。わしらでも若い時、材木出ししてくれて、よう言われて行きよつたけどな。

——そうですか。

足立 そんなんはな、特殊な車あんねん。材木出ししよるもん、それ持つとんねや。せやけど、そこまで、道が今みたいに良えないやさかいな。

——ガタガタですか。

足立 ほんなもんガタガタの道やもんな（笑）。そこまで、キンマ（注①）かなんぞで引つ張つて出んねや。そこで車に積んで、ほつて結局角まで出しといたら、国道まで持つて行つとつたら。そしたら、昔のボロいトラックが来て持つて帰りはよつたんや。

——なるほど。

足立 昔はみんなね、今みたいに生の木はあんまりいごかし（動かし）ようへんださかいに、みんな野干^{のぼん}しいうて、山で乾かすねや。みな。せやから、軽う軽うなんねん。

——確かにそうですよね。

足立 せやから、そやな、四メートルぐらいまでは、わしらでも、がーつと担ぎよつたけどな。

——そうですか！（聞き手一同、驚き）
足立 そんぐらいなんねん、乾いたら軽

うなんねん。皮付けずに軽う乾かすねん。

—— 山で乾かすときは、組むんですか。

足立 ちやうちやう、木をこかすときには、丸い木を横へ伐つて、ほんで、（根元から完全には切り離さずに）少しだけ残すのや、（根元とつながったまま）べつたーんとこかすねや。それで枝を全部払うて、一番先の方だけ、二メートルほどだけ枝を置いとくんや。ほしたら、こう上へ（幹の中の水分が）上るわけやな、結局は生けつとるし、これもうちよつとついとるし（先端に生きた葉がついていくので）。ほいで、段々段々枯れていくんや、それで軽う軽うなるんや。これ、野干し木いうて軽う軽うなるんや。

—— なるほど。

足立 ほいで、大きなスギの木でも、がーつと一人で枯れていくんや。

—— すごいですね。

足立 みなそうじゃい。それで、今らみな生木ばかりやかい、今らは持たん（今は、人力では持ち上がらない）（笑）。

—— 持てないですね（笑）。

足立 ああ、今らは重たい重たい。昔はそんなやなかつた。山行つたら、みんな野干し木にしてな、もう一か月くらい山で乾したある。伐つて皮剥いて乾したある。ぜんぶ皮剥くんや。杉皮も良え値で売りよつたさかいな、あれも。今の瓦の代わりにすんのや、杉皮。せやから、山でぜんぶ皮を剥くんや。

—— 皮は、できるだけ大きく剥いて持つて帰るんですか。

足立 いやあ、杉皮いうんも、決まつと

んや、丈が。もう三尺もんとか四尺もんとかいうて決まつとんのや。

—— なるほど、屋根の寸法にあわせて。

足立 そうそう、決まつとんのや。それで皮も専門にしとるもんが居りよつた。ほいで皮剥いて。（木には）一番先の枝二メートルほど残つとんねや。ほいで、元（根元）もちよつとひつついとるしな。野干し木いうて。

—— その木には目印をつけたんですか。

足立 いやいや、んなもう、「もうこの山ひと山なんぼ」いうて買いよんねや。

—— それで二ヶ月経つたらとりに行く。

足立 そうそう、それはまた、材木出し専門にしとるもんが出しに行きよつたんや。今みたいに、あんな生木のどさどさみたいなもん、昔は手えはつかりでするやろ、そんな重たいもの持てへんやん。今ら道具があつたさかい良えけどな。野干し木いうのは軽い軽い。スギの木は軽い軽いなつさかいな。

—— その木の仕事は何月ごろにやるんですか。冬ですか。

足立 いやもう、冬はあんまりせえへんねん。木がな、前言うたように、大きなる、生長する時分やさかいに、夏が多いねん。成長する時分やないと、野干し木はだけへんねん。木の生長する時分、まあそや、四月頃からなあ、まあ九月いっぱいぐらいまでやな。そのぐらいまでに伐つて置いといたら乾く。冬に伐つたら重たいねん。冬は重たいんや、冬は。まあ良え家を建ててん人は、冬に伐つた木を、そうして重たいのを出して使いよ

つたけど、冬時期はちよつと木はつまつた木にはなんねやけどな。

—— 夏するのは畑仕事の合間に行くつてことですか。

足立 いやまああそらあ、前山に、木伐りばつかり専門にしとるもんが居つたし。

—— ああ、もう専門に。

足立 皮剥きは皮剥きばつかり専門にしとるもん居るし。材木出しは材木出しばつかり専門にしとるもん居りよつた、わしらも材木出しに行きよつたけどな。そやけど、普通の日当より大分日当はええさかいな。うん。わしらでも、ほんなもん、もうせんことないほど、いろいろしとつて、若い時分。

注① 木を搬出するソリ。

【足立勝己氏／山南町小畑】 山では、馬も活躍

—— 大木を根元から伐るんですよな。

足立 根元から伐つて、枝打つて、そして三メートルから六メートルくらいで玉切つて（切りそろえて）、大変。そら一本倒すのに、ごつつい労働やで。

—— 先日、ちよつと太い庭木を伐るだけでも、親父と交代で四苦八苦しました（笑）。すごい労働ですよな。

足立 僕らはな、卒業したときはな、黒井の国領、うちら（山南町）から国領まで、自転車で行きよつたら時間がかかるから、（伐採の人夫さんたちは）泊まりよつたわ。それから、葛野、三方の現場も、泊まりよつたわ。そんな時代やけど、

みんな自転車しかないからな。

—— 木自体は何で運ぶんですか。

足立 トラックやさ。それと、馬力。

—— 馬ですか！？

足立 馬、馬。

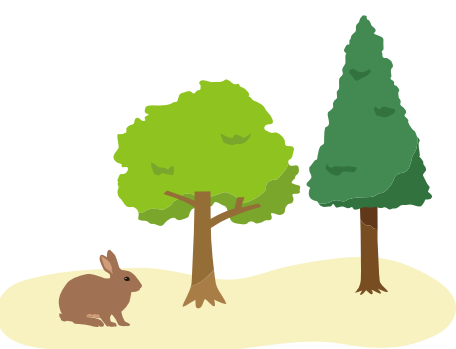
—— 馬は、道に出てからが馬ですか？

足立 いや、馬の動力で、ごつつうな、山で伐つたやつを、馬が、こんこんと、トチいうのがあつてな、トチ引き（注②）、いうのやけど、こんこんとこの峠のとこに打つて、鎖で馬につけて、それで、ひかしよつたな。トラックのとこまでな。

—— そうなんですね。繋つてるようなケモノ道みたいなところを、生きものだけで、手作業でいく感じなんですか。

足立 そやな。ウインチもなんにもないときやろ。そら、人間の人力か馬か、どっちかや。

注② トチ（トチカン）は、爪型の金具に金属リングついた形の牽引具。トチの爪部分を伐採木の端に打ち付け、輪部分に牽引ロープを通して、馬に引かせた。



里山こぼれ話 カブト、クワガタ、ホタルの宝庫

里山には、今と比べものにならないほど、昆虫が多かったそうです。中でも、大きなカブトムシやクワガタムシをいかに見つけるか、というのは、里山を知り尽くした子どもたちの、腕の見せどころ。薪や炭の原木であるクヌギ、コナラなどは、一般に樹液の良く出る木として知られていますが、栗の木でたくさん捕れたと語る方が多いのは、さすが、丹波栗の名産地ならではです。

【飯谷幹夫氏／柏原町上小倉^{かみおぐら}】

栗の原木が、カブトムシの溜まり場

飯谷 カブトムシはようけ居ったよ、当時は。クワガタやらね。僕とこも、栗の林が五反ほどあってね、当時は。栗の実を、タテ（注①）いうて、藁^{わら}でつくった籠^{かご}みたいなもんがあんねん。それに、まあ二杯ほど、毎日落ちよったかな。

——毎日ですか！

飯谷 毎日（笑）。そしたらね、そこへ、カブトムシが居んねやね。カブトムシやクワガタが、当時は、ようけ居んねや。そやけどね、そこにね、スズメバチが居んねや（笑）。せやから、棒でね、木の裾をバーンと叩いて、バタバタツとクワガタやらカブトムシは落ちて来んねや。それを採つてきよったね。ハチは、逃げて行くからね。

——枝のあっちこっちに、ちよつとずつ

樹液が出てくるような感じで、ついてるんですか。栗の木は、そんなたいもんやないんですか。

飯谷 いやいや、これぐらい（直径二十〜三十センチ）のもんや。

——栗が良いんですか、やつぱり。

飯谷 栗の木が多かったね。クヌギが生えとったけど、クヌギには居んには居んねやけどね、クヌギはそんなにたくさんないからね。

——ああ、なるほど。

飯谷 古い栗の木に、カブトムシが巣しとった、巣^すというか集まつとったね。

——木の間をほじくつたりとか、そんなことはしなかつたんですか



写真 水牛と呼ばれた、ノコギリクワガタ

飯谷 そんなことは、せなんだけどね。

——せんでも捕まるぐらい居るんですね（笑）。カブトとクワガタは、どつちが多かつたんですか。

飯谷 さあ、どつちが多かつたかな。同じぐらい居ったね、当時は。

——クワガタは種類あつたんですか。

飯谷 クワガタは種類あつたね。

——どんな風に呼んではつたんですか。

飯谷 クワガタいうて、僕も、どんな種類いうてわからんけど、角（枝角）が二本あるやつと、真ん中に一本あるやつとね、とか、角がごつついやつとか、ちつさいやつとかね。

——色が黒とか茶色とかありましたか。

飯谷 いやあ、色は、さあどうやつたやろな。まあ黒が多かつたんやないか。

——捕つた分のクワガタはどうされてたんですか。持つて帰つて、家で飼われるんですか。

飯谷 うん、飼つてたな。

——相撲させたりとか？

飯谷 相撲させたりとかね、そういうのんね（笑）。

注① タテは、わら編みの丈夫な大袋。四ページの写真参照。

ホタルは、家に入って来るほど居た

飯谷 子どものときは、誘蛾灯^{ゆうがとう}つちゅうのがあつてね。田んぼ、稲に虫（害虫）が来るから。蛍光灯で寄して、駆除しよつたんやけどね。そのときにね、ホタルが（飛び交うのも良く見えた）。農薬があんまりなかつたからね、当時は。ホタル

がようけ居つて、まあもう、ホタルいうてもう、今みたいにホタル探さんならんようなやない、ホタルなんかいっぱい飛んどつたんや（笑）。

——それは、川だけでなく、田んぼにもたくさん居たんですか。

飯谷 田んぼに、うん。

——ということは、ヘイケボタルもたくさん居たんですか。

飯谷 ヘイケもゲンジも居ったね。ゲンジはこれぐらい大きい、ニセンチぐらいあるけど、ヘイケは小さいわね。

——小さいですね。

飯谷 山南行つたら、ヒメボタルいうのがあるけど、あんなのが居るつていうのは知らなんだね。

——田んぼのホタルは、遅くまで居たんですか。夏休みぐらいまでは。

飯谷 夏休みぐらいまでは居ったね。家の中にまで入つてきよつたもんね（笑）。

——そうなんですか！

飯谷 いやあ、戦争中はね、灯火管制^{とうかかんせい}いうてね、電気に黒い傘かぶせて、外に光が漏れんようにしとつたんや。敵機に見つかるから、いうて。そんなときは、ようけ、ホタルが家の中に入つてきよつたね。

——暗いからですね。

飯谷 それで、当時はね、蚊^か屋^やいうのを寝るときしよつたでしよ。蚊屋のぐるり、ホタルが飛んどるつちゅう感じ（笑）。——すごいですね。想像できません。

里山こぼれ話 日天さんのお供・お迎え

彼岸の中日（春分の日、秋分の日）には、「日天さんのお供／日天さんのお迎え」などと呼ぶ子どもたちの行事がありました。「日天さん」とは太陽のことで、お弁当持ちの子どもたちが、昼までは太陽のある東に向かって歩き、午後は太陽のお供をして西に向かって歩く、というのが原型のようです。大人はこの行事に直接関わらず、子どもたちだけで代々遊び伝えてきました。そのため、集落ごとにかなりバリエーションに富んでいたようです。（十一ページ、二十二ページにも関連記事）

【細見具康氏／春日町野瀬】

細見 彼岸の中日の日にな、「日天さんのお供行こか」とかなんとか言うて、弁当持って、山へ上がって。岩の上の松の根のもとで、わいわい騒いで遊んだぐらいは覚えとつけど。近くやか、山のてん（てつべん）で、山でも走つとつたけどなあ…今はもうよう走らんけど（笑）。

【芦田三千丈氏／氷上町鴨内】

芦田 私ら覚えとんのは、三人弁当持って、春の彼岸の中日、春分の日かな、「日天さん迎え」いうて、早うから山へ上がって、十時頃に腹減って弁当食べて（笑）。家帰って来たら、「お前なんじやい、もう弁当食べてもうてきた」いうて、笑

われたり叱られたりしたん覚えとりますわ（笑）。

【由良嘉明氏／柏原町大新屋】

一ヶ月前から、毎日、皆づくりに通った

由良 「お日天さん迎え」私の方ではそう呼んでおったんでね。まあ、彼岸の中日ですね。子どもたちの一大行事でした。春のお彼岸と秋のお彼岸。権現さんの祠がある山。五十メートルくらいの山です。そこへ行って、いわゆる皆つちゅうんかな、遊び場所を作るんですね。もう一ヶ月ほど前から、毎日そこへ行って、縄とか鎌やとか持って行って、自分らの住み家というんかね、そういうもんを作る。遊びの基地ですね。毎日学校から帰ると宿題そのので、鎌や縄を持ち寄って山に集合して、基地作りやターザンごっこなどをして、一日を過ごしました。

子どもの遊びも、彼岸の中日という季節の行事と共にあったんでしょう。この時期には何があり、この時期には何がありと、里山の果たした役割は大きかったのですね。その当時は里山なんて呼んでませんでしたけどね。

—— お日天さん迎えは、その日だけがお弁当持ちで丸一日ですか。

由良 そうですね。

—— それ以外の日は、毎日その日のための準備ですか。

由良 ひと月ほど前からそれをやるわけですね。春になりかけたらね。彼岸は三月の中下旬ですが、子どもたちにとつては、弁当を食べるその一日限りです。

あくる日になったら、それ、終いやからね。

—— 基地はその日で終わりですか。

由良 終わりやね。みんなそれで、しゅーんとなつて…。楽しい遠足や修学旅行が終わったときと同じように、今年ももうこれで終わりといううに（笑）。

—— ということは、毎年毎年ですか。

由良 毎年やります。上級生に連れられてね。六年生になったら終わりです。次の年は五年生の子が大将になってやるし。それがずーっと引き継がれていたんですけど。今はもう、そんなことする子はいませんね。

—— なるほど。…ターザンごっこっていうのは、蔓みたいなものにしがみ付いたりするんですか。

由良 そうしたり、縄を使ったり。あんな危険なことようしよったな、と思います。縄を高い枝につるして、びゅーつと…怪我したこともありますよ。それでも大人は「ターザンごっこしたらいいかん」とか、そういうことは言うてませんでしたね。私の友だちは、高いところから落ちて怪我したこともありましたがね、まあ骨を折るとかそんな怪我ではなかったけど、血が出るような怪我でしたので、ごつつう叱られへんかな、とみんなひやひやしとつたけども、だあれもそんなに、叱られず、「氣いつけてせえよ」ぐらいのことで済みました。

—— 基地には何か持ち寄りたりするんですか。

由良 鎌と縄があったら何でもできますから。それから、ものを結ぶのは、ガンビ（雁皮）。ガンビいう木、あれは紙の材料になるんですね。ガンビ、ミツマタ、コウゾとか、言いますけど。うちの方はガンビでした。ガンビをとつてきて、ガンビの皮で、柵を結んだり、あれが案外強いんですよ。縄なんかよりも強かったの、ガンビを使ってみましたね。

—— ガンビは、自分らで見つけられるんですか。

由良 それは。「ガンビの木はこれや、それはちがう」とか言うてね。さきつちよをピンと折ったらわかりますわね。普通の木やったらポキッと折れるけど、ガンビは皮が強いから、上から下へじーつと剥いたら、皮が切れずに剥けます。それを縄にして、使っていましたね。

—— じゃあ、それも代々、目が養われるんですね。

由良 そう、だからね、やつぱり下級生はそれを簡単に見つけられんわけですよ。それで、上級生は見つけるから、「あ、あの先輩はよう知つとんな。僕らもそうなりたいな」と思うんでしょうな。そういうなんの引き継ぎが、ずーつとされてきたのです。

—— 結構本格的な基地なんですね。

まとめ

古きを訪ねて、未来の多様な可能性を探りたい、との願いから始まった、里山文化の聞き書きですが、本冊子でご紹介できたのは、かつての丹波の里山の、ごく一部の風景に過ぎません。



戦争や貧困という苦い思い出と結びついているにも関わらず、快く昔の体験を語ってくださった皆さんに、改めて感謝いたします。さらに一部の方には、山の入口まで一緒にいただきました。



話し手の皆さんの笑顔を拝見するにつけ、野山を駆けまわった思い出が、今尚、皆さんの心を豊かにしていることを強く感じました。今の子どもたちにも、なんとかして、同様の自然の恵みに接する機会をつくり、継承していきたいと感じますが、そのためには、私たちと自然との付き合い方を、もう一度、編み直さなければなりません。

里山の変遷を語る証言集として

昭和初期にお生まれの方々は、第二次世界大戦中の国策の影響を受けた丹波の農村と里山の様子、子どもたちの様子から語ってくださいました。戦後の混乱期およびその後の復興期を、丹波の里山が支えた時代があったことも、大事な視点です。昭和三十年以降の燃料革命、農業機械の普及、そして拡大造林政策による森林景観の変化、高度経済成長、農村の過疎高齢化といった、里山を取り巻く時代の激動を、お一人お一人が体験してこられたことは、大変なことです。そして現代、記録的な暑さや寒さ、豪雨災害などの大規模災害に脅かされる、今の丹波の風景を見ながら、昔を振り返って語っていただいた言葉は、とても示唆に富むものでした。



丹波の里山文化については、これまでも、多くの先人が収集と記録に努めてきました。学問的にまとめて出版されたものも見受けられます。

しかし今回は、敢えてもう一度、地

元に暮らしたご高齢の皆さんに貴重なお時間を頂戴し、直接ヒアリングさせていたいただきました。それは、これから生きる若い世代の皆さんに、ぜひ、生の体験談を通じて、丹波の里山というものを身近に描きなおして欲しい、と意図しているからです。

丹波の言葉が持つ文化価値

ネット検索をすれば、専門家の著述からアマチュアのボランティア体験まで、日本中の多種多様な里山情報があふれかえっています。しかし、地域を越えた情報が氾濫すると、かえって、地域の気候風土に柔軟に適応して育まれた文化や、身近な自然そのものが見えにくくなっているのではないのでしょうか。



本冊子に先立つヒアリング活動には、丹波以外で生まれ育った若者らも参加していました。彼らが祖父母から聞いてきた昔の体験と、丹波の方々の体験との間には、多くの共通点もありましたが、やはり、丹波だからこそその体験、丹波だからこそその風景がありました。

また、第一章でも触れましたように、本冊子では、できる限り地元らしい語り口を、忠実に文章に起こしました。地元方言の響きの中にこそ、話者の喜怒哀楽と共にあった、豊かな文化体験がこもっているかと推測されたからです。



本冊子で地元方言にこだわった理由は、もうひとつあります。それは、読者

の皆さん、特に若い世代の方々に、ぜひ本書に登場するような地元の言葉で、身近な年配の方々と里山の話をしたいのです。

例えば、図鑑に載っているカワムツとタカハヤ、という二種類の淡水魚の名前からは、互いの関係が想像できませんが、丹波の市島地域ではモトとヤマモトと呼ばれるヤマモト、という地元での魚捕りの経験と一致する名前です。

ツンバラやツンバナという名前は、チガヤ（イネ科の野草）の若穂をさす地元名で、しがむとほんのり甘いのですが、万葉集にツバナ（茅花）を食べることが詠まれているそうですから、千年以上続く呼び方と食文化を継承していることになりそうです。

また、フナメ、マツノモチ、スイスイ、ピンピンナシ、フルフルダマ、スナホリ、チチンタなど、多種多様な動植物の地元名を使うとき、年配の方々の脳裏には、同じ言葉を使った仲間や、その生きものたちが暮らしていた風景が、いきいきと蘇っていることでしょう。そうした楽しい思い出も含めて、地元方言を若い人たちが受け取り、自分の体験も加えて、次の世代に継承していただければ、と願っています。

氷上回廊という特別な自然

最後に、丹波の里山の未来を考える上で、もうひとつ大事な要素があります。それが、氷上回廊です。

氷上回廊は、瀬戸内海沿岸から日本海沿岸まで、山を越えずに通じ抜けられる天然の道につけられた名前です（左図）。航空写真などで見ると、ちょうど、西の中国山地と、東の丹波高地という、二つの山塊に挟まれた、長い廊下のような地形です。一番標高が高い氷上地域の石生付近でも百メートル未満という、本州一低い内陸横断ルートです。

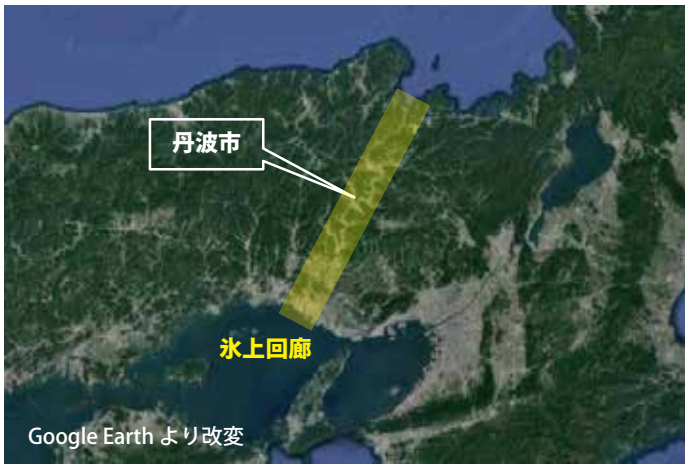


図 航空写真で見た氷上回廊
(Google Earthより改変)

この氷上回廊という特別な地形は、近畿地方中部、北部の生きものの分布と生態系に大きな影響を与えてきたと考えられています。

もともと、日本海側は、冬に雪が多く寒冷な日本海性気候、瀬戸内海側は温暖で年降水量が少ない瀬戸内海性気候で、生きものたちは、それぞれの気候に適応し、地域に根差した生態系を築いてきました。ところが、氷上回廊のおかげで、丹波市周辺は、その両方の生きものたちが、南北に行き交い、入り混じって暮らす特別な地域になっています。

氷上回廊のど真ん中に位置する丹波市には、手つかずの原生林や大湿原の代わりに、生きもの豊かな里山や水田地帯があり、生きものたちが交流する環境が持続的に守られてきました。

私たちがこれからどんな里山をつくっていくか、と考えるとき、丹波だからこそ、昔からの里山文化を参考にしつつ、様々なルーツを持つ生きものが入り混じって暮らせる環境を守り継いでいきたいものです。

氷上回廊については、丹波氷上回廊ホームページ（注①）に、詳しい解説がありますので、ご興味のある方はご覧ください。

注① 丹波氷上回廊ホームページ

(<https://www.tamba-hikami-kairo.com/>)



図 氷上回廊を行き交った生きものたち

発行年月：令和 3 年 3 月

発行元：

丹波市 生活環境部 環境課

〒669-3692 兵庫県丹波市氷上町成松字甲賀 1 番地

TEL：0795-82-1001（代表）

FAX：0795-82-5448

E-mail：kankyou@city.tamba.lg.jp

丹波市ホームページ URL：https://www.city.tamba.lg.jp/